
メイドくんは男の娘！

arty

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メイドくんは男の娘！

【Nコード】

N0882T

【作者名】

arty

【あらすじ】

貴族の青年コリンは、とある事情から使用人としてカントリーハウスで働くことになってしまった。ハウスメイドやスカラリーメイド、キッチンメイド、ランドリーメイド、パーラーメイドと、多様なメイド達に囲まれながら、階下の生活に慣れ親しんでいく。

ヴィクトリア朝の近代英国をベースに、中世ファンタジーや現代萌え文化の要素を盛り込みました。元はFLASHノベルゲームです。コミケやWebサイト、他投降サイトなどでも公開しています。

第1話 - 01 回想（帝歴262年秋）

王立陸軍士官学校は、帝国軍における士官育成機関だ。

士官学校に入学出来るのは、貴族だけと相場が決まっている。

特に帝都郊外に敷地を有する中央校は、上級貴族の子息達ばかりが在学する最エリート校という位置付けだった。

何しろ生徒父兄の大半が、爵位持ちの領主階級という偏りっぷりだ。

仮に授業参観でも開催したら、錚々たる顔触れになることだろう。

もちろん地方領主に仕える身分である下級貴族の子息や、平民出身の生徒がいない訳でもない。

成績優秀と認められた彼らは、特別に奨学生として在籍することが許されていた。

しかしその人数は少なく、例外中の例外と言えた。

「急に呼び出しだなんて、いったい何だろうな」

栗色の髪と、子供っぽさを残した頼りなさそうな顔つきをした青年が、磨き上げられた板張りの廊下を歩いている。

コリン・イングラム、士官学校三年生。

奨学制度ではなく、家柄による審査で入学したクチだ。

実父はスリス公爵家の次期当主。

長男であるコリンは、その後継者と目されていた。

エリート揃いの中央校においてさえ、その血統の良さは頭ひとつ飛び抜けている。

ひとまとめに領主と言っても、もちろん横並びではない。

社交界では男爵から公爵まで、さらに細かく序列付けされている。四大公爵家のひとつであるイングラム家は、王家に次ぐ格付けを

誇る名門貴族だった。

コリンを職員棟まで呼び出したのは、フレデリカ・ショーターという新任の女性教官だ。

ちよつとした有名人で、名前だけはコリンも耳にしたことがある。イングラム家と同じ四大公爵家のひとつであるショーター家の令嬢にして、帝国でも五指に入るほどの天才法術職人。

前線から退いて、教官になっていたとは知らなかった。

コリンに声を掛けてきたのは、公爵家の人間同士、顔ぐらい合わせようといったところか。

フレデリカの研究室であることを示す真新しいネームプレートに、コリンは足を止める。

ひと通り身だしなみを整えると、扉を軽くノックした。

「コリン・イングラムです」

「待っていたよ。入りたまえ」

「失礼します」

ドアノブに手を掛け、扉を開く。

着任したばかりということで、荷解きすら終わっていないのだから。

部屋には積み重ねられたままの本が幾つも山を作っており、用途の知れない器具類が乱雑に置かれている。

室内に一步踏み出した時、コリンの視界を何かが過ぎった。

それは、全力でフルスイングされた木刀の影だった。

「せいやーーッ」

「うおおおおおおッ？」

海老反りみたいな体勢で、半ば強引にその攻撃を避けるコリン。研ぎ澄まされた反射神経は、幼年期より十年近く続けてきた剣術訓練の賜物だ。

「ふむ。反射神経は及第点と」

いかにも小生意気そうな女の子がそこには居た。

コリンを襲った木刀を投げ捨てて、何やらメモを取っている。小っちゃい。

身長はせいぜい、頭の位置がコリンの胸元に届く程度だ。

悪戯にしては度が過ぎる行いに、頭から怒鳴りつけてもおかしくないシチュエーション。

しかし、コリンは紳士だった。

そんな大人げない真似はしない。

冷静に思考を回転させる。

研究室に居るからには、フレデリカ教官の身内だろう。

家族と考えるのが自然そうだ。

危ない、危ない。

もう少しでフレデリカ教官のお子様を、叱りつけてしまうところだった。

内心で、ほっと胸を撫で下ろす。

コリンは努めて紳士的な態度で、無礼な木刀少女に話し掛けた。

「こんにちは、お嬢さん。ちょっと聞きたいんだけど、お母さんは不在かな？ 俺、君のお母さんに呼ばれて来たんだけど」

「失敬な！　ボクだよ！　ボクがフレデリカだよ！」

女の子が、顔を真っ赤にさせて怒りを爆発させた。

「は？」

コリンが間抜けな顔をして首を傾げた。

有り得ない。

目前の少女は、どう鼻屑目に見ても年上とは思えなかった。

発育途上の小柄な身体に、驚くほどの童顔。

コリンの想像していた美人教官とは、イメージが全く一致しない。

「だ・か・ら、ボクがフレデリカと言ってる！　確かに多少背が低いことは認めるけどね。それにしたって、ボクから溢れるこの知的なオーラで察したまえよ！　ほら、君の父上から送られた紹介状だ。君のことをくれぐれも宜しくと頼まれて来たけどね、すっかりやる気がなくなっちゃったよ」

渡された手紙を確認すると、確かにコリンの父が書いた筆跡だった。

署名までばっちり入っている。

どうやら本当にこの女の子がフレデリカ教官らしい。

今度は逆に、経歴詐称を疑いたくなった。

とにかくフレデリカが、ショーター家のご令嬢であることには間違いない。

頭を撫でなくなるような女の子に見えても、大人のレディとして扱うことを求められていそうだ。

初対面からいきなり怒らせてしまったのは失敗だったが、これから挽回すればいい。

コリンは胸に手を当てると、恭しく一礼を試みせた。

「大変失礼しました、フレデリカ教官。お会いできて、とても光栄です」

「ふむ。教官と呼ばれるのには正直慣れないね。年もそこまでは離れていないし、ボクのことには気安く先輩とでも呼びたまえ。これから君はボクの生徒であると共に、職場の部下であり、後輩でもあるからね。ま、よろしく頼むよ」

「え？ 何の話ですか？」

「聞いてないのかい？ しっかりしたまえよ。情報伝達の速さは、戦場じゃ命に関わるよ」

フレデリカが何を言っているのか理解できない。

顔合わせの挨拶ぐらいにしか思っていなかったコリンだが、本人の知らないうちに、話は予想外の方角でまとまっている様子だった。

「コリン・イングラム。軍務省作戦局の試用員を命ずる。所属は特務本部四課だ。おめでとう。就職活動をスルーして、いきなり任官決定だよ。普通は建前だけでも、試験や面接といった過程を踏むものだけだね。ま、親の七光りに感謝するといい」

「はあ」

コリンが曖昧に頷く。

父からは何も聞かされていなかった。

恐らく忘れた頃にでも、事後連絡の書簡が届くのだろう。
父上らしい、いつもの進め方だった。

「そう不安な顔をしなくても大丈夫だよ。学生の君に、いきなり実戦任務は無理だ。ボクにしたって、こちらの士官学校に出向してきただけだからね。しばらくは教官として授業を持ちながら、法術研究に取り組むつもりだ。君にはそのアシスタントをお願いしようかな」

「分かりました。その程度でしたら、何でも手伝いますよ」

フレデリカの発言に、少しだけ安心する。

どうやら士官学校を中退して、いきなり作戦局に行けという話ではないらしい。

教官の研究室に所属して、その手伝いをしながらノウハウを学ぶことは学内でも推奨されていた。

師弟制度の簡易版みたいなものだ。

ついでに特定の教官に師事することで、卒業後の就職口を紹介してもらえろという役得もある。

冷静に考えてみれば、今回の件も決して悪い話ではなかった。

「それじゃ早速だけど、全裸待機しておきたまえ。ボクはこれから準備がある」

「すみません。意味が分かりません」

フレデリカからの唐突すぎるオーダーに、思わずコリンは素で返事をしてしまった。

「おや、帝国語が通じなかったかい？ 身につけている衣服を全て

脱いだ上で、しばらく待っているという意味なんだけど」

「単語の意味ではなく、意図が理解出来ません」

実年齢はともかく見た目が女の子なフレデリカと、全裸になって密室で二人きり。

誰かに見られてもしたら、間違いなくコリンの方が露出狂として逮捕されてしまう状況だ。

公爵家の跡取り息子、全裸で学内大暴走！ 校内新聞にそんな記事でも載れば、さすがのコリンも社会的に抹殺されてしまう。

「ああ、ボクのことなら心配しないでくれたまえ。君のことは、研究用マウスと同程度にしか見ていないからね。今さら男性の裸を見たところで、悲鳴を上げたりはしないよ」

「先輩が大丈夫でも、俺の方が抵抗ありますよ！ これ何の罰ゲームっ？」

「ふむ。美人すぎるこのボクを、異性として意識してしまうのは仕方ないことだね。しかしそれでは仕事にならない。そうだね。ボクのことは、美人教官型の自動測定装置とでも思っておきたまえ。君だって体重計を相手に、羞恥心など感じないだろう？」

「そんな体重計があつてたまるか——ッ！」

思わず突っ込みを入れるコリン。
初突っ込みだった。

まさか将来、フレデリカ専属の突っ込み要員になるとは、この頃のコリンは予想もしていなかった。

「ごちゃごちゃうるさいね。男の子だろう？ 往生際が悪いよ。天才法術職人であるこのボクが、君が宝の持ち腐れにしている素質を開花させてあげると言っているのだよ。ほら、全てをボクに委ねるといい。悪いようにはしないさ」

うわあ、自分で自分を天才と言っちゃったよ、この人！ 可愛い顔立ちしているのに勿体ない。

残念系美少女だった。

それにアシスタントをお願いしたいなどと言っていたが、それは明らかに言葉の綾。

人体実験臭がぷんぷんする。

もはやコリンには、嫌な予感しかなかった。
にじり寄るフレデリカ。

後退るコリン。

どん、と背中にドアが当たった。

退路はない。

「ひいっ」

「それともあれかい？ 君はボクみたいな美人のお姉さんに、無理矢理脱がされるとハアハアするタイプなのかな？ やれやれ、仕方ないね。今回だけはその変態趣味に付き合ってあげるとしよう。こんなサービス、滅多にしないんだからね！」

「何その取って付けたようなツンデレ属性！ あと先輩には、先輩が思っているほどお姉さん属性ありませんから！ あああああッ、パンツは！ パンツだけは許してーーーーッ！」

外見年齢ティーンエイジャーの女の子に、全裸に剥かれるという経験は長くコリンのトラウマとなる。

とにかくフレデリカ先輩は、初めて会った時から自由奔放な人だった。

それまで順風満帆にエリートコースを歩んできたコリンの人生は、この出会いから大きく道を踏み外したと言っても過言ではないだろう。

爵位を継ぐ嫡流に当たるコリンと、そうではない非嫡子のフレデリカ。

同じ公爵家でも、立場は微妙に異なる。

しかし、その辺りの事情を差し引いたとしても、先輩のフリーダムさは行きすぎだ。

公爵家の人間に、こんな自由人がいるとは驚きだった。

コリンの身柄を、フレデリカに預けた父上の思惑は明白だ。

情報収集や作戦立案を担当する軍務省は、帝国軍上層部のデスクワーク部門に当たる。

作戦実行部隊である各騎士団への任官に比べると、戦死の可能性は著しく低い。

大切な跡取り息子を、戦場で失いたくないという親心。何事にも慎重な父上らしい判断と言えた。

今ならコリンは、その父上の判断は大間違いだったと断言出来る。父上はフレデリカ先輩のことを何も分かっていない。

先輩と行動を共にするぐらいなら、戦場の方がよっぽど安全だ。

そもそも先輩が、士官学校での法術研究だけで満足する訳がなかった。

コリンの配属となった作戦局特務本部は、文官組織の軍務省では唯一例外的な実戦部隊。

正規軍では対処の難しい、非正規戦を専門としていた。

結局のところ、コリンの士官学校卒業を待つて、フレデリカ先輩は原隊復帰することになる。

正式に四課班員となったコリンは、先輩に連れ回されて何度も死にそうなる目に遭ってきた。

ひどい話した。

トラブル続きの職場にコリンがすっかり馴染んでしまった頃には、フレデリカ先輩との出会いから既に三年が経過していた。

第1話 - 02 異端者狩り1

白い崖と碧い海。

初夏の日差しが照りつける中、飛び交うカモメ達の鳴き声を掻き分けながら、大型の帆船がゆっくり港へ入ってくる。

棧橋では日に焼けた荷役人夫達が、接岸準備で慌ただしく走り回っていた。

大型商船のすぐ脇を擦れ違いで出港していくのは、海軍の戦列艦だ。

決して狭くない港湾は、大小多様な船舶で溢れ返っていた。

擦れ合うようにして交差する大型艦の足下を、小さな漁船が巧みな操船ですり抜けていく。

港湾都市フローマス。

それがこの港の名であり、コリン達の新しい任地だった。

帝国本島の南端に位置し、旧王国連合領とは海峡を挟んで向き合っている。

気象に恵まれていれば、王国側の港まで半日程度の航海で辿り着けることだろう。

別名、帝国本島の表玄関。

世界中からかき集められた富のおよそ半分が、この港を中継して帝都をはじめとする各都市へと運ばれる。

フローマス湾には二つの河川が注ぎ込んでおり、丁度Y字を描くようにして水域が市街地を三つのブロックに区切っていた。

そのうち東地区は、いわゆる貧民街と呼ばれるエリア。

隣接する南街区から橋を一本渡っただけで、同じ都市とは思えないほど街の雰囲気ガラリと変わる。

今にも崩れそうな木造平屋がぎつしりとひしめき合い、整備されていない道が複雑に入り組んでいた。

治安レベルは最悪。

不慣れた旅人が東街区に迷い込んでしまつて、身ぐるみ剥がされたという逸話には事欠かない。

「見たまえ、この混沌っぷりを！ 素晴らしいと思わないかい？ まさにフローマスの魅力は、この街区にこそ濃縮されているという訳だね。さつき地元騎士団の兵士から貰った手配書の参考人も、きっとこの辺りに潜伏しているはずだよ」

確かにこの東街区は、社会底辺者達にとつての楽園でもあつた。濫立する安宿やパブは、どこも荒っぽい船乗りや港湾労働者達で大賑わいだ。

酒や賭博に女とクスリ。

合法、違法を問わず、あらゆる娯楽がこの街では提供されている。特に東街区のブラックマーケットは有名で、金とツテさえあれば買えないものはないとの評判だ。

「はあ、そうですか」

馬上で大喜びのフレデリカ先輩に対して、コリンの反応は冷めたものだった。

青地に金の縁取りがされたコートに、羽付きのつば広帽子。

コリン達が身につけているのは、軍務省作戦局の制服だ。

貴族趣味全開な装備品は、薄汚れた東街区の雰囲気において周から浮きまくっている。

これでは身ぐるみ剥いでほしいと言っているようなものだ。

「ここは帝国内でも三箇所しか認められていない、聖絶指定種の保

護特区でもあるからね。異端者狩りを専門とするボくらには、ぴったりの任地だ」

「……それで、先輩。この道は東街区のどの辺なんですか？」

「むぐっ」

無秩序な街並みを見渡したコリンの問いに、先輩が言葉を詰まらせる。

「コリン、君はいつからそんなに冷たい口をきく人間になってしまったんだい？ 出会った頃は、先輩、先輩って、尻尾を振ってボクに懐いてくれていたのに。ああ、あの頃の君は可愛かったなあ」

「そんな思い出はありません。で、やっぱり道に迷ったんですね？」

「失敬な！ まさか君は、このボクがそんな初歩的なミスをするとも思うのかい？ そんな訳がないだろう！ 見たまえ、地図だってちゃんと持ってきている！」

語気を強めながら懷から地図を取り出す先輩を、コリンは無言のまま半眼で見つめ続ける。

その視線から逃れるように顔をそらすと、先輩は聞き取れるかどうかといった小声でぼそぼそと呟いた。

「ふむ。実は持ってきた地図が使い物にならないと、つい先ほど気付いてしまった訳だけどね。この辺りの地区では、建物の増改築に地図の更新が追いついていないようだ」

例えば地図が不正確だったとしても、最初からしっかり見ていれば

現在地を見失うことはなかったはずだ。

あまりの自信満々な様子に、先輩を信じて地図を預けてしまったのが失敗だった。

ただでさえ狭い街路は、露店やゴミの山などに不法占拠されており、場所によつては完全に道を塞いでいる。

おかげで街全体が迷路のようだ。

馬首を巡らせながら、どちらに進めば元来た大通りに戻ることが出来るのか記憶を探り返す。

「何だい、その諦めきつた顔は！ 不安になる要素など何処にもないよ！ 砂漠の真ん中で遭難している訳じゃないんだ。道ならその辺りの住民に聞けば済む話しさ。いや、決して道に迷った訳ではないけどね」

「確かにそれしかなさそうですね……でもこの辺りって移民街みたいですよ？ まさか帝国語が通じないなんてオチはないでしょうね」

場違いな二人は、住人達からの注目を一身に集めていた。

遠巻きにこちらを観察する人々のヒソヒソ声は、王国語のように聞こえる。

コリンの不安に、先輩はきよとした顔をしてみせた。

「？ 君はもしかして、王国語だとか問題でもあるのかい？」

「すみませんね、どうせ俺は王国語そんなに得意じゃありませんよ」

気まずそうに唇をとがらせたコリンに、先輩が勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

形勢逆転。

道に迷った原因が自分であることは、すっかり忘れてしまったらしい。

この上なく嬉しそうに先輩がコリンを責め立てる。

「呆れた！ これは心底驚いた！ パブリックスクールと士官学校の十年間、王国語は必修科目だったはずだろう？ 帝国の教育システムが問題なのかい？ それとも君がバカなだけなのかい？ 仕方がない。ここはこのボクが、流暢な王国語によるコミュニケーションの見本を見せてあげよう。君は先輩の偉大さに感涙しながら、せいぜいボクの人心掌握術を学ぶといい」

コリンが王国語を苦手としていることは知っていたはずなのに、ひどい言われようだ。

颯爽とコートを翻した先輩が、周囲を見渡し声を掛けるターゲットに目星を付ける。

先輩が選んだのは、住人達の中でもフードを被りこそこそと路地裏に消えようとしていたひとりの若者だった。

『おい、その君。止まりたまえ！』

騎馬したままの上から目線。

人にものを頼む態度ではなかった。

しかしフレデリカ先輩の場合、それが様になっているから困る。貴族オーラというやつだろうか。

凜とした先輩の声に、フードの若者の動きがビクリと止まった。

『どうした？ それでは顔も見えないだろう？ こちらを向きたまえ』

フードを深くかぶり、背を向けたままの若者を先輩が叱責する。

いきなり上級貴族に声を掛けられて、緊張でもしているのだろうか。

様子がおかしい。

見るに見兼ねたコリンが、下馬してフードの若者に近づこうとする。

先輩に任せておくよりは、片言しか話せない自分の方がまだマシそうだという判断だった。

剣の間合いに一歩足を踏み入れたその瞬間、若者の振り向き様に放った閃光が爆音と共に炸裂した。

第1話 - 03 カントリーハウス1

なだらかに連なる丘陵を、若緑色の草原が続いていた。

意図的に残された群生林が、単調になりがちな景観にアクセントを加えている。

季節の花が、所々で控えめに咲いていた。

市街地での騒動も、この敷地までは届かない。

港灣からの潮風も薄れ、新緑の香りがさわさとそよぐ。

程よく手入れの行き届いた緑地を、うねりながら一本の道が伸びていた。

その先に建っている邸宅が、ハイウッド家のカントリーハウスだった。

白塗りの壁に、青い屋根。

張り出したバルコニーの下は、テラスになっていた。

木造造りの二階建て。

使用人スペースである屋根裏や半地下階まで含めると、実際には四フロア構造となる。

中央棟を挟んで東棟と西棟が、コの字の形に並んでいた。

屋敷の現主人の名は、シェリー・ハイウッド。

フローマス領主である伯爵の末娘であり、ハイウッド家の幼き当主代行だった。

ストレートの金髪と、少し吊り目な翠の瞳は、いかにも貴族のお嬢様といった顔立ち。

伯爵の親バカぶりは社交界でも有名で、我が娘の愛らしさを語らせるとしばらくは止まらない。

しかし、身内の鼻屑目を抜きにしても、実際にシェリーは容姿の整った少女だった。

「シャルロが居ないぞっ、どーいう訳だーっ？」

ヘイウッド邸の玄関ホールに、ご主人様であるシェリーの可愛らしい声が響き渡る。

二階から一階まで吹き抜けになっているホールは、中央にドンと大階段が構えていた。

その大階段を、シェリーは一息に駆け下りる。

ドレスの裾がはしたなく翻るが、そんなことを気にしている余裕はなかった。

さらさらと細い金髪が、シェリーの背を追うようにして流れる。

「あら、お嬢様。シャルロちゃんがどうかしましたか？」

代表して声を掛けてきたのは、彼女達を総括するメイド長だ。

ホールの清掃をしていたハウスメイド達も、掃除の手を止めて御主人様へと視線を集める。

黒のワンピースに白いエプロンとカチューシャという、オーソドックスなメイド服。

すらりと背の高いメイド長は、長めのロングヘアをサイドテールにまとめいてた。

「執務室や屋根裏部屋も探してきたが、シャルロの姿がどこにも見つからないのだっ！ は！もしかしてあまりの可愛さに、誘拐されたのではないかつ？」

自らの想像に、シェリーが顔を真っ青にさせる。

子供らしい想像力豊かな表現に、ほんの少し苦笑を浮かべながら

メイド長が応じた。

「ご心配なく。今の時間、シャルロちゃんもメッセンジャーの仕事で街に出掛けているだけです。それよりお嬢様、本日の講義はもう良かったのですか？」

「社交ダンスのレッスンは中止になったのだ。市街地の方で事件があつて、北街区への通行が規制されているのだろう？ その影響で演奏役の何人かが来られなくなつたらしい」

「ああ、なるほど。それなら今日はもう、舞踏室は使いませんよね。そっちの掃除から先に済ませちゃおうかしら」

思案顔になるメイド長。

抗議の声を上げたのは、大階段に座り込んだツーサイドアップの少女だった。

「うえー。これ以上まだ掃除すんのー？ もういいじゃん。お客さんだって、そんな細かいところまで気にしないって」

シェリーと同世代の彼女は、ハウスメイド達の中でも最年少。メイド長の実妹で、名はリリ。

年が近いこともあり、シェリーとの関係は主従というより友達感覚だ。

そんな妹の態度に、メイド長がゆらりと振り返つた。浮かべるのは物騒な笑み。片手で器用に、モップをくるりと回転させてみせた。

「へえー。このあたしに口答えするなんて、あんたも随分と立派に

なったものね。ちょっと再教育が必要かしら？」

「ひいつ、姉ちゃん待って！ 暴力反対！」

「問答無用っ！」

神速の踏み込み。

メイド長の放ったモップの突きは、見事の一言に尽きた。しかしそれを紙一重で躲したりりの反射神経も、なかなかのものだ。

摩擦熱に焦げた毛先にぎよつとしながらも、リリが大階段を転げるように姉の間合いから逃れようとする。

もちろん容易く逃がすようなメイド長ではない。

空かさず二撃目を見舞おうとして、メイド長はその足を止めた。

「あの、お嬢様？」

振り返るメイド長。

すっかりスルーされてご機嫌を損ねたシェリーが、メイド長のスカートを掴んでいた。

「私の質問に答えるのだ。それでシャルロは、何時に帰ってくるのだ？」

「え？ それはちょっと分からないですね。きっと市街地の方は、乗合馬車の運行も規制されているでしょうし」

「何だそれはっ！ 困るぞ！ 私は今すぐシャルロと遊びたいのだっ！」

シェリーは、ばふばふとメイド長のスカートを扇ぎながら叫んだ。もちろんメイド長に八つ当たりしたところで、意味がないことなど理解していた。

外出してしまったシャルロには、そもそも連絡を取る手段すらない。

ふと気が付くと、シェリーを見つめるメイド長が、自らの鼻先を押さえながら呻いていた。

「う、駄々っ子なお嬢様も、超絶可愛い……」

「姉ちゃん、鼻血！ 鼻血！ あと口元もやばい！」

身の危険を感じたシェリーは、思わずメイド長のスカートから手を離してしまう。

愛でるのは好きだが、愛でられるのは苦手だ。
気を落ち着かせたメイド長が、ハンカチで鼻血を拭って場を仕切り直した。

「分かりました。それでは至急、シャルロを呼んで来させましょう」

「本当かつ？ そんなことが出来るのかつ？」

我が儘も言ってみるものだ。

内心、諦め掛けていたシェリーは、希望に瞳を輝かせた。

「もちろんです。お嬢様のためならば、無理を通すのもメイドの役目。リリ、あんたちよつと街まで行って、シャルロちゃん探してきなさいよ。辻馬車を使っていいから。ミスタに通行許可証を発行してもらおうわね」

「無茶振り来たー！ーッ」

当然のように指示を丸投げしたメイド長に、リリが驚愕のあまり目を剥いた。

ぶんぶんと手の平を左右に振る。

「いやいやいや！ 無理だって！ シャルロちゃんの居る場所だって分からないのに！」

「そうでもないでしょ。メッセージの配達先は分かっているんだし。それにほら、シャルロちゃんって街に出た時にはいつも、東街区の露天市場に寄るじゃない？ そこを狙えば会えるって」

「会えないって！ あそこの市場、すごい混雑するんだから！ 人ひとり見つけ出すなんて絶対無理！」

何とか抵抗しようとするリリを、メイド長がぎろりと睨んだ。
うぐっ、とリリが怯む。

「いいから黙って、言うことを聞きなさいよ。可愛くないわね。はあ、あんたにシェリーお嬢様の十分の一でいいから、可愛げがあれば良かったのに」

「ここでそんな残念そうな顔されても！ 良く見て！ あたしだってそれなりに可愛い方だよ！」

「ええー！？ だってあんたの顔って、何故かあたしに似てるのよね。真似なの？ パクってんの？」

「それはそうだよ！ 妹なんだから！」

リリの拒絶に、メイド長は深々と溜息を付く。

そしてシェリーに向き直ると、申し訳なさそうに苦笑してみせた。

「申し訳ありません、お嬢様。やっぱり駄目みたいです」

うるつとシェリーの瞳が潤む。

下手に期待してしまった分、落胆は大きい。

そして絨毯の上に転がると、シェリーは手足をばたばたと振り回した。

「やだやだやだーっ！ 今すぐシャル口と遊べないなんてやだー
ーっ」

貴族令嬢としての品位など完全に消失している。

普段は大人顔負けに貴族然とした態度で振る舞うことも出来るシェリーだったが、大好きなシャル口のことを聞くと、途端に年相応のお子様以下だった。

「どーすんのよ、これ。こうなっちゃうとシェリーちゃん、しばらく落ち着かないよ？」

「あーん、たまんないわー。幼児退行しちゃったお嬢様も、可愛らしいっ。あたしとしてはこのまま、シェリーお嬢様のあられもない姿を觀賞していたいところなんだけど」

「まじで？ 姉ちゃんの趣味おかしいよっ？」

「でもまあ、そうも言ってられないわね。仕方ない。あんたに任すわ」

やれやれといった様子でメイド長が、ぽんとリリの肩を叩いた。子供のことは、子供に任せておくのが最適との判断。つまりは事実上の全権委任だった。

「やつほーい！　じゃあ、あたしは掃除しなくてもいいよねっ？」

「はいはい。後はあたし達でやっておくから。あんたはシャルロちゃんか帰ってくるまで、シェリーお嬢様の相手をして差し上げなさい」

「了解でありますっ」

敬礼の真似事をするリリ。

床で駄々をこねていたシェリーは、リリに無理矢理引き起こされた。

「ほらほら、涙を拭いて鼻もかんで。シャルロちゃんが戻ってくるまで、あたしと遊ぼう」

「うぐ。しかしシャルロも居ないのに、何して遊ぶのだ？」

「ふふ、甘いわねシェリーちゃん。シャルロちゃんの居ないうちにしか、出来ないことがあるじゃない」

リリが人差し指を唇に当てて、にんまりと微笑んでみせた。自信満々な表情が心強い。

鼻をすすり上げながらも、シェリーはこくりと頷く。

行動派のリリは、いつでも子供達のリーダー役だ。

もちろん引っ張り回したり、トラブルメーカーになることが多い

のだが、そんなリリがシェリーは嫌いではなかった。

「さあ！ 姉ちゃんの気が変わらないうちに、早く行こ！」

リリに手を引かれながら、シェリーは玄関ホールを後にする。
先ず向かうのは、おそらくキッチンの洗い場だろう。

かつてのシェリーは、教科書通りに模範的な貴族の令嬢だった。
当時は身分違いのリリ達と遊ぶようなこともなかった。

父兄から溺愛を一身に受け、その期待に応えることだけが自らの
存在価値。

ノブレス・オブリージュ。

高貴なる義務に対するプレッシャー。

感情を押し殺し、人形のように過ごす空虚で退屈な日々。

全ての価値観が一変したのは、シャルロと出会った事件がきっかけだ。

シェリーが思い込んでいたより、世界はずっと広くて刺激に満ち
ていた。

狭い世界に引き籠もっていた、あの頃にはもう戻らない。

幼年期に失われた子供らしさを取り戻すように、シェリーは遊ぶ
時はいつだって全力であろうと心に決めていた。

シェリーを見送ったメイド長の傍らに、そそとパーラーメイド
が寄り添ってくる。

ハウスメイド達のシンプルな制服と違って、フリルやレースに彩
られたビジュアル重視なメイド服。

胸元や背中の露出度も高く、着る人間を選ぶデザインだ。
明らかに作業向けではない。

それもそのはず、彼女に与えられた本来の主業務は接客。

たまたま今は、掃除の手伝いに駆り出されているだけに過ぎない。

「あらあら。シェリーお嬢様も、恋に恋するお年頃になられたのですね。これはわたくし達も、負けてはいられませんの」

「何の話よ？」

パーラーメイドに意味深な眼差しを向けられ、メイド長がたじろぐ。

「嫌ですわ、お姉さま。今夜からいらつしゃるといってお客様、かなり高貴なお方なのでしょう？ それもわたくし達に近いお年頃だとか。これはもう、上流階級に入り込む千載一遇のチャンスですよ！」

「何であんた、そこで胸元を広げるのよっ！」

「いえ、ここは一つ、お色気で愛人の座でも狙おうかと」

パーラーメイドが悪戯っぽい目で微笑む。

ただでさえ豊満な胸元が、今にも溢れそうだった。

同性であるメイド長でさえ、思わず視線のやり場に困ってしまう。

確かに彼女が指摘する通り、訪れるのは公爵家に名を連ねる客人だ。

それも二人。

四大公爵家のうち、二家の関係者が揃うことになる。

そこまでの要人が、領主不在のオフシーズンに長期滞在するなどかなり珍しい。

興味はあったが、メイド長としては深入りする気もなかった。

立場は弁えている。

「あんだね、身分違いの恋なんて、成功例が少ないからこそ物語になるのよ？ 相手はシェリーお嬢様みたいに、純粹無垢な子供じゃないんだからさ。あまりお勧めはしないわね」

「うふ、まあ見て下さい。次々期公爵様の愛人になった暁には、お姉さまをハウスキーパーとして雇って差し上げますわ」

「その自信は、どこから出てくるのよ」

呆れたように嘆息するメイド長。

ただ、パーラーメイドの人生だ。

彼女の好きにさせるしかない。

それでもメイド長として、釘を刺しておくことだけは忘れなかった。

「ひとつアドバイスしておく、今回のお客様は男女ペアだからね。あんたの入り込む余地なんてないかもよ？」

「略奪愛！　ますます燃えますわ！」

「……あんたもいい根性してるわよ。ま、がんばって」

駄目だこれは、重症だ。

夢見る乙女は止まらない、ロマンチック症候群だろうか。

気合いを入れるパーラーメイドとは対照的に、メイド長は疲れ切った様子でがつくりと頂垂れた。

貴族に弄ばれて、救貧院まで身をやつしたメイドの話など、それ

こそ掃いて捨てるほど有り触れている。

現実には恋愛小説ほど甘くはないのだ。

パーラーメイドも一度くらい、痛い目を見た方がいいかもしれない。

もちろん取り返しが付かなくなる前には、止めてやるつもりだった。

「さあ、無駄口はお終いにして、仕事仕事！ ミセスに怒られるの、あたしなんだからね」

「へーい」

緩んだ空気を引き締めるように、メイド長が手を打ち鳴らす。

同僚のメイド達が気の抜けた返事をして、それぞれの持ち場に戻っていった。

パーラーメイドも布はたきを持って、調度品が並ぶ棚へと駆けていく。

「身分の壁を越えた大恋愛か。あたしなら願い下げね」

別にメイド長は、貴族の全てが嫌いという訳ではない。

フローマス伯爵家の人々のことは敬愛しているし、下級貴族である地元騎士団には顔見知りだっている。

それでも、大して交流のない上級貴族に対しては、身構えてしまうというのが本音のところだ。

仕事として割り切れればもちろん失礼なく接してみせるが、プライベートでまで関わり合いになりたいとは思わなかった。

それに爵位持ち貴族には、トラウマ級の苦い想い出だって抱えている。

「お客様には、心から尽くすように。なんてみんなには教えているけど、あたしもまだまだ精進が足りないわよね。貴族アレルギーも、そろそろ本気で治さなくちゃ」

理屈では分かっているけど、そう簡単に直せないのが気持ちの問題というやつだ。

メイド長は部下達に聞こえないように、そっとひとり呟いた。

第1話 - 04 カントリーハウス2

ヘイウッド邸の応接間は、玄関ホール奥の食堂から扉をひとつ越えた先にある。

本来の用途は、食堂で晚餐会を楽しんだ客人が、男女に別れてひと息入れるための部屋だ。

今夜の夕食会は略式のため、朝食室を使う。

そのため応接間の用意は、後回しにされていた。

シェリー達の遊び場として解放されているのは、そんな理由だ。

「第十三回、シャルロちゃん攻略会議〜っ」

リリの宣言に、シェリーがぱちぱちと手を叩く。

「シェリーちゃん、まだ諦めてなかったの〜？ ああ、またどうせ失敗するんだあ」

ネガティブな意見を挟んできたのは、スカラリーメイドのエリカだ。

年齢が近いせいで、リリやシャルロと同じく、シェリーの遊び相手を務めることが多い。

メイド服は薄い水色。

くせつ毛にメイドキャップを付けている。

かなり控えめな性格で、いつもシェリーやリリに振り回される立ち位置だった。

「前回のお医者さんごっこでは、作戦の開始前に逃げられてしまった。あまり露骨なのは、警戒されるようになってしまった。これは由々しき事態だ」

「だから言ったのにつ！ これもシェリーちゃん達が、えっちなことしすぎたせいだろう」

「む、どれのことだ？ 前々回の王様ゲームのことか？ それともその前の、着せ替えごっこか？」

「全部だよっ！ シェリーちゃん、もうちょっと自重すべきだろう。このままじゃ本当に、シャルロちゃんに嫌われちゃうよ？」

エリカの指摘は、もつともだ。

押すばかりでは相手に引かれるばかり。

理屈ではシェリーだって分かっている。

しかしこの情熱を抑えることなど出来そうにはなかった。

「確かにシェリーちゃんは貴族のご令嬢なんだから、もっとエレガントな遊びを追求すべきよね」

「リリまでそんなことを言い出すのか。私はもっとストレートに、シャルロといちゃいちゃしたいぞ」

しかしシェリーの不満は、杞憂だった。

リリが、にやりと口角を上げる。

「乗馬ごっこか、貴族っぽくない？」

コイントスの結果、最初の馬役はエリカになった。
騎手役がシェリーだ。

遊びに関しては、貴族と使用人の身分など関係ない。

子供の遊びにに、大人の事情は持ち込まないこと。

それはシェリー自身が取り決めたヘイウッド家のルールだった。

ふかふかな絨毯の上、四つん這いの姿勢になったエリカに、恐る恐るといった様子でシェリーは跨った。

お尻の下にエリカの背中を感じる。

「おおー、いいんじゃないかつ？ 何だか興奮してきたぞ！」

「やっぱりわたしが馬役なんだ。うう、どうせこうなるってことは、分かってたんだ」

ぶつぶつ文句を言いながらも、結果には渋々と従うエリカだった。ネガティブな言動の目立つエリカだったが、実のところ付き合いは良い。

小さな背中が揺れて、シェリーの上半体がふらついた。

「何だろう、この高揚感。支配している感じが素晴らしいぞ！ シャルロに恥骨を押し付けていると思うと、想像だけでたまらんな！」

「シェリーちゃん、あんまり腰を動かさないで。くすぐりたいよ」

鼻息も荒く興奮するシェリー。

対してシャルロの身代わりになっているエリカは、ドン引きだ。それでもエリカは、部屋を一周してくれる。

元の位置に戻ってくると、シェリーはエリカから降り立った。

「なかなか面白かった！ シャルロが帰ってくるのが楽しみだな！」

リリの発案を聞いた時には、正直、そんな子供っぽい遊戯なんて思っていた。

しかし、嗜虐心の刺激により、新たな快感に目覚めてしまいそうになる。

何より、下半身を密着させつつの上下運動という行動が、たまらなく背徳的で素晴らしい。

「ふへ、ふへへ」

妄想に頼がだらしく緩む。

一方、起き上がってスカートの膝を払っていたエリカが、作戦の決定的な問題点を指摘した。

「シャルロちゃん、きっと馬役なんてしてくれないよう？ それにコイントスで勝てるとは限らないし〜」

「む。それは確か、手品用のコインがあったような……」

「それ詐欺の手口だからねっ？」

「シャルロとえっちなことをするためなら、手段は選ばないぞ！」

「ふっふー。二人とも甘いわね」

シェリーとエリカのやり取りを、リリが鼻先で笑った。

ソファにふんぞり返って、まるで演劇に出てくる悪者の親玉みたいな貫禄だ。

「偶然の要素に頼るなんて、作戦としては下策よ。相手に与える選択肢をさりげなく絞り込んだ上で、どっちに転んでも勝てるようにしないとね」

「何だ？ リリには良いアイデアがあるとも言っただけ？」

「もちろん。あたしがお手本を見せてあげる」

自信満々にリリが立ち上がった。

「じゃあ今度は、あたしとエリカちゃんでも組もうか」

「えー、わたしもう疲れた。リリちゃんとシェリーちゃんでも遊んでよう」

エリカが渋る。

それはそうだろう。

コイントスに負ければ、また馬役をしなければいけなくなる。エリカの気持ちは、シェリーでも何となく分かった。

「そんなこと言わないで。ほら、あたしが馬役をするからさ」

「本当？ そーいうことなら」

コイントスなしで騎手役になれると聞いて、エリカが心変わりする。

四つん這いになったリリの背中に、エリカが小さなお尻を乗せた。お馬さんの姿勢になったまま、リリがシェリーに尋ねてくる。

「シェリーちゃん、乗馬ごっこでは騎手役になった方が勝ちだって

思ってるでしょ?」

「それはそうだろう? 何故に好き好んで、馬にならんといかんだ?」

「ふふ、その先入観が大間違いなよ。まあ、見てなさい。エリカちゃんのことをシャルロちゃんと思っておくと、あたしの言ってる意味が分かってくるから」

そう言うなりリリは、いきなり嘸き声を上げて仰け反った。慌てたのはエリカだ。

「ちょ、リリちゃん! 暴れないで!」

「ひひーん! ひひーん!」

昂ぶるリリから落ちないようにと、エリカが慌ててその身体に抱き付いた。

リリが暴れるほど、ぎゅーっとエリカの抱き付きが強くなる。両手両足で絡み付くように抱き締められても、リリはますます荒ぶったままだ。

「なるほど! その手があったか!」

シェリーは手を打って納得した。

今まではシャルロに抱き付こうとして、逃げられてばかり。逆に抱き締めてもらった記憶など、ほとんどない。

抱かれない。

ぎゅーっと潰されるような激しさで、抱き締めてほしい。

シャル口の身体の柔らかさ、香り、体温。
駄目だ。

妄想しただけで、涎が出てきた。

「ほらほらっ、騎手なら鞭を入れてくれないと！ あたしのお尻を叩くのよ！」

「え？ えええ〜？」

「遠慮しないで！ 早く！」

急かされたエリカが、目を回しながらもリリのお尻を触る。

「ちツがーう！ そこはもっと、ぱしーんって感じで！」

「こ、こおっ？」

かなり良い音が響いて、エリカの平手がリリのお尻に炸裂した。

「あひいッ」

「だ、大丈夫っ？ 強すぎちゃった？」

叩いたエリカの方が驚いて、リリに尋ねる。

しかし、ハアハアと荒い息で頬を上気させるリリの表情は、何故か恍惚としていた。

「どお？ シエリーちゃんにもこの遊びの楽しみ方が分かった？」

「流石だ、リリ！ その極意、確かに私にも伝わったぞ！」

瞳を爛々と輝かせるシェリー。
シャル口にお尻を叩かれる。

そんなシチュエーションなど、妄想の中だけかと思っていた。
それが、現実になる。

これはもう、一気に大人の階段を駆け上るチャンスだ。
考えるだけで、むずむずと抑えきれない感情が沸き上がってくる。

「よし！ リリそこを代われ！ 今度は私が馬役をやるぞ！」

「ええ〜？ あたしはもう休みたいんだけど……」

「何だ？ エリカも馬役をやりたいのか？ それなら公平にコイントスするか？」

「……いえ、騎手役でいいですう」

どうやらお子様なエリカには、リリの伝えたかった楽しみ方がいまいち理解出来なかった様子。

早速リリと交代すると、騎手役の時にはなかった快感が見えてくる。

上に乗られる屈辱感。

背中に感じる、可愛らしいお尻の感触。

馬役のシェリーが暴れるほど、騎手役のエリカは無我夢中で抱き付いてくる。

シェリーの発育途上な胸を鷲掴みにしていることにすら、エリカは気付いていないだろ。

スキンシップされ放題だ。

「いいぞ！ これはいいぞ！ シャル口が帰ってくるまで特訓だ！」

「次はあたしが馬役交代ね」

「もうやだ〜、あたし限界〜」

結局のところ、狂乱の宴は小一時間ほど続くことになった。

絨毯の上に転がる、小娘が三人。

着衣は乱れ、髪もひどいことになっている。

肌は汗にしっかりと湿り、荒い息づかいに小さな胸が上下していた。

「くふふ、これでシャルロがいつ帰ってきても、バッチリだな」

「ちょっとやりすぎたわね。シャルロちゃん帰ってくるまでに、体力回復させなくちゃ」

「うぶ、わたしもう吐きそう。いつそ、殺して〜」

疲れ切っているはずなのに、シェリーとリリの二人には、やり遂げたような笑みが浮かんでいる。

一方のエリカは、息も絶え絶えで顔色も悪い。
水も飲むことさえ辛そうだ。

そんな仰向けに倒れて呼吸を整える少女達の視界に、すらりと長い脚が映った。

視線を上げると、フリルに黒いスカート、そして白いエプロン。

お子様達の様子を見に来た、メイド長だった。

リリの枕元に仁王立ちして、こめかみに怒りマークを浮かべながら物騒な笑顔を浮かべている。

「ねえ、リリ？ あたし、今夜は新しいお客様がいらっしやるって
言わなかったっけ？」

「姉ちゃん、ちょっと待ってて。今あたし動けないから、小言はまた
後で聞くわ」

「それがどうして、こんなに応接間が散らかってるの？ お嬢様に
まですっかり汗をかかせちゃって。これじゃ湯浴みしていただかな
いと、お客様を出迎えられないじゃない。本当にあんたは、余計な
仕事を増やすことについては天才的よね」

「あれ？ もしかして姉ちゃん、怒ってたりする？」

リリの顔が青ざめる。

隣でエリカが、「あーあ、わたし知らな〜い」
と他人事のように息をついた。

「乗馬ごっこだっけ？ とっても楽しそうね。あたしも混ぜてもら
えないかしら？ ほら、さっさと四つん這いになって、お尻をこっ
ちに向けなさいよ。あたしが愛の蹴りをくれてやるから。ふふ、し
ばらくは楽しんで椅子に座れると思わないことね」

「ひいつ、姉ちゃん目が怖い！ 目が！」

仰け反るリリだったが、疲れ果てている今の体力では、いつもの
ように逃げる事が出来ない。

リリがメイド長に叱られるのは、すっかりヘイウッド家の風物詩
の一つだが、今回の件はシェリーにだって責任がある。

乱れたドレス姿のままシェリーは上体だけ起き上がると、メイド

長に嘆願する。

「遊びすぎた件については、本当にすまない。ただ、リリは私の遊びに付き合ってくれただけなのだ。仕置きは見逃してくれないか？」

「シェリーちゃん、ありがとう！ 姉ちゃんにもつと言ってやって！」

対してメイド長は、慈愛に満ちた笑みを浮かべてみせた。
優しく諭すようにして、シェリーに説明してくれる。

「ご心配には及びませんよ、お嬢様。リリはこーいう風に責められるのが、大好きなんですから。むしろご褒美？」

「そ、そうなのか？ 褒美なら仕方ないな」

「シェリーちゃん、そんな簡単に言いくるめられないでー！ーッ？」

リリの悲鳴が、屋敷に響き渡る。
すっかりハイウッド邸の風物詩だ。

白目でぴくぴくと痙攣するリリを横目に、シェリーはメイド長に尋ねた。

「シャルロは、まだ帰ってこないのか？」

「んー、この時間なら配達の仕事は終わっていると思いますよ。今頃、東街区の露天市に寄り道して、お土産でも買っているんじゃないかしら」

「そうか。客人よりも先に帰ってくると良いな」

折角の作戦も、シャルロが居なければ意味がない。客人達が訪れてしまえば、子供の時間は終わりだ。その前に、シャルロには帰ってきてほしかった。シェリーは少し寂しそうに時計を見上げた。

第1話 - 05 フロームス騎士団1

シャルロのお気に入りだという露店市は、東街区の一画にあった。大通りから一本奥に入った裏通り。

公共スペースであるはずの路上には、無認可の不法屋台が所狭しと建ち並んでいる。

悪名高い東街区であっても、露店市の全てがブラックマーケットだというのは偏見だ。

大半の露店で扱っているのは、ごく普通の日用品や食料品の類だった。

『オレンジ一つで銅価一枚ですか。店主、それは適正価格と言えるのですか？ ぶち殺しますよ？』

『勘弁してくださいよ、旦那。うちは産地直送の高品質が売りです。ほら、香りからして違うでしょ？ 一つ差し上げますから、試食どうですか？』

『おや、催促したつもりはなかったのですが。ありがたくいただきます』

果実店の軒先で店主とやりあっているのは、鎖帷子の上から濃緑の制服を着込んだ短髪の女性だった。

生真面目そうな女性で、鋭い目付きに油断ならない光を宿す。

この辺りは東街区でも特に、王国系の移民が多い区画。

交わされる言葉も王国語だ。

オレンジを受け取った女性は、自分の服でこしこしと擦ると皮のまま齧り付いた。

『ん、確かに美味です。まあ、いいでしょう。今日は取り締まりに来た訳でもありませんし』

女性が僅かに口元を緩める。

店主も愛想笑いを返そうとして、顔が引きつってしまった。

フローマス騎士団。

それも正騎士が訪れるなど非常事態すぎる。

騎士団は東街区にうるさく口出しをしない。

代わりにその住民を保護もしない。

それが不文律だったはずだ。

慣習を破って土足で踏み込んでくるということは、それだけ今回の事件に力を入れていることの証。

どんな理由にしても、店主にとっては迷惑な話だった。

正騎士ともなれば、普段この辺りで見掛ける平民出身の徴集兵とは持っている権限が違う。

うっかり対応を誤れば、店主の不法屋台など簡単に取り潰されてしまうだろう。

『本題に戻りましょう。良く見て下さい。その顔、本当に最近は見掛けていませんか？』

オレンジの汁がついた指先を舐めながら、女騎士がチラシを指差しつつ回答を促す。

騎士と言っても、所詮は地方領主に仕える下級貴族。

宮廷で社交ダンスを踊るような優雅さとは無縁だ。

どちらかと言えば、戦場で剣を振るっている方が似合っている。

表情の下からチラリと覗く容赦のなさ、その辺のマフィア顔負けだった。

いや、融通が利く分だけマフィアの方が百倍はマシだろう。
国家権力とは、最強の暴力機関でもある。

店主の手に握られているのは、重要参考人の手配書だ。
そこには若い男の顔が、報奨金の金額と共に描かれている。
見覚えはあった。

以前このストリートに居着いて、似顔絵描きを生業としていた若者だ。

絵描きは移民街でも天涯孤独な身で、店主も特に親しくはなかった。

恨みもないが、助けてやる義理もない。

その所在を知っていれば、店主は尻尾を振って情報提供しただろう。

しかし、本当に知らないのだから提供出来る情報もない。

緊張する店主の表情を、ねっとり睨み付けるように観察する女騎士。

やがてシロだと判断したのだろう。

すつと身を引くと、嘆息混じりに肩をすくめてみせた。

『知らないのならそれで構いません。ただ、もし見掛けたらすぐに連絡を下さい。隠し立てなんてしたら、ぶち殺しますからね？』

女騎士が銅貨を一枚放り投げた。

そのまま果実店に背を見せると、隣りの露店へと足先を向けてくれる。

はーっとして店主は安堵の息を吐いた。

見渡すとストリートには、彼女の部下と思われる傭兵達の姿がちらほらと見える。

かなり本腰を入れた捜査体制を敷いている様子だった。

『あは、店主さん災難だったですね』

騎士達が居なくなつた頃合いを見計らつようにして、果実店の軒先にひよつこりと可愛らしい顔が覗いた。

東街区には珍しい、綺麗な身なりをした子供のメイドだ。

まず目に付くのが、蒼い光を湛えた瞳。

透けるような白い肌は、桃色にうつすらと色付いていた。

日の光にきらきら輝く銀髪を三つ編みにまとめて、ちょこんと力チューシヤを乗せている。

『おう、シャルロちゃんじゃねえか！』

先程までの緊張ぶりが嘘のように、果実店の店主が明るさを取り戻した。

豪快に笑いながら小さな頭を乱暴に撫でつける。

シャルロと呼ばれたメイドが、くすぐったそうに首を竦めた。

シャルロの身につけたメイド服は見るからに高級品で、ボロ布を纏つたガキ共が多い東街区ではかなり浮いている。

それもそのはず。

シャルロはこれでも、子供ながらにしてヘイウッド邸の正式な使用人だった。

『あの、それですね、今日はオレンジを四つほしいですよ』

『はっはっはっ！ 四つなんてケチなこと言わねえで、好きなだけ持っていきな！』

あわわと瞳を白黒させるシャルロから手提げ袋を奪い取ると、店主がはち切れんばかりにオレンジを詰め込んでいく。

そしてシャル口の薄い胸元へ、押しつけるように手渡した。

『おじちゃんの気持ちだからよ！ 遠慮しないで受け取ってくれや！』

『こんなに持てないですよっ』

シャル口が溢れそうなオレンジの山を抱え込み、落とさないよう必死にバランスを取る。

あたふたする小さなメイドを温かな目で見守りながら、店主は満足そうに頷いた。

そんな店主の耳を、ぬっと伸びてきた手が捻り上げる。

『痛ててててて！ 千切れる！ 千切れるってば、おい！』

『あんた、また鼻の下伸ばして！ なに店の商品、勝手にサービスしちまってるのさ！』

店番を交代しに来た女将だった。

尻に敷かれっぱなしの店主と比べて、どっちが店の主なのか分からないぐらいの貫禄っぷりだ。

『女将さん、こんにちです。あの、これやっぱりお返しした方が良いですよね？』

『いって、いって。どうせこのバカが仕入れすぎたせいで、余るんだからさ。屋敷のみんなで食べてもらってよ』

店主には厳しくても、シャル口には優しい女将だった。
不公平すぎる。

この露店市通りにおいて、シャルロは客でありながら看板娘的な扱いだった。

店主連中からだけではなく、女将達からも好かれている。扱いの温度差に、店主は恨めしげな目を女将に向けた。

『そういえばあんた、さっきあの騎士様から何のチラシ受け取ってたんだい？』

『おう、これが』

店主が懐からぐしゃぐしゃになった手配書を取り出した。シャルロと女将がその紙面を覗き込む。

そこには印象の薄い顔をした、若い絵描きの姿が描かれていた。

『ふーん、確かにこの子、近頃は見掛けないね。一体、何をやらかったのやら』

『目撃情報だけで金貨五枚ですか！　すごいのですよ！』

似顔絵の下に記載された金額に、シャルロの目が釘付けになる。ちなみに生け捕りなら金貨二十枚。

貧民街の住人なら一年は軽く遊んで暮らせる金額だ。

殺人事件の容疑者にだって、これだけの懸賞金は付かない。

『ほら、連続騎士襲撃事件が騒ぎになってるだろ？　その関係だって噂だぜ』

声を潜めて店主が囁いた。

フローマス騎士団の関係者ばかりを狙った襲撃事件。

新聞を読めない店主のような下層階級でも、大まかな概要ぐらい

は口伝えで耳にしていた。

手配書の絵描きが事件に関与しているのなら、騎士団の力の入れようも納得がいく話した。

『やだやだ、物騒なことだ。あの絵描き、暴力沙汰に関わるような子には思えなかったけどねえ。人は見掛けに寄らないもんだよ』

『はー、それは恐ろしいお話なのですなー』

『シャルロちゃんも人ごとじゃないよ。あんた身なりもいいし、可愛い顔してるからさ。襲われないように気を付けな。この移民街でシャルロちゃんに手を出す輩は居ないけど、最近は余所者だって増えてるからね』

『おう、仮に襲われそうになったら、おじちゃん達を頼ってくれよ。ストリートの店主連合で、直ぐに駆け付けるからな』

『バカかい、あんた。襲われてからじゃ遅いよ』

『あは、お二人ともありがとなのですよ』

本気で心配をする店主夫婦のやり取りを見て、シャルロがにっこりと微笑む。

天使の笑みだ。

思わず店主の頬もだらしなく緩む。

そんな店主の足下を軽く蹴り上げながら、女将がシャルロを午後のお茶に誘った。

しかし今日は屋敷に新しい客が来るということで、シャルロは早めに帰って準備に掛からないといけならしい。

女将は残念そうな顔をしたが、仕事は大切だ。

無理に引き留めるようなこともしない。

『じゃあさ、今度来る時はゆっくりしていつておくれよ』

『はい！ 必ずなのですよ！』

ぺこりと頭を下げて、シャルロが果実店を後にする。

オレンジを落とさないように、頼りない足取りでバランスを取る後ろ姿がまた可愛らしい。

そんな様子を見送りながら、女将がしみじみと呟いた。

『いやあ、それにしてもいい子だねえ』

『だろ？ まじでシャルロちゃんは俺らのアイドルだぜ』

『だとしても、そのにやけた顔は気持ち悪いから止めな！ この口リコン親父が！』

『痛てててて！ だから何度も耳を引っ張るなって！ もげる！ もげるうつつ！』

シャルロの目がなくなった途端に、容赦のなくなる女将だった。

その手が止まったのは、露店市通りの奥の方から悲鳴と罵声が聞こえてきたからだ。

何事かと顔を見合わせる店主と女将。

騎士団が揉め事を起こしたのかと思ったが、どうやら違うようだ。徐々に騒ぎが近づいてくる。

それほど大きな市場でもない。

騒ぎの元が果実店の前を通り過ぎたのは直後のことだった。

通行人を次々と突き飛ばしながら、一人の若者が果実店の前を走り抜ける。

通行人の一人が屋台へ倒れ込んできて、売りもののオレンジがばらばらと路上に転がった。

『馬鹿野郎！ どこ見て走ってやがる！』

倒れたままの通行人が、相手に怒声を投げつける。

しかし若者の背中姿は、ストリートを端まで抜けて何処かの路地へと消えた後だった。

『速えー。なんつー脚力だ』

店主が呆然と呟く。

怒る気力が失せるほどの、見事な俊足だった。

『ねえ、あんた。今の走ってた子、もしかして……』

『ああ。目撃情報だけでも金貨五枚だっけか？』

女将の声に、店主が頷く。

若者が走り去った後を眺めながら、店主は手配書を握りしめた。

騎士達はいく先程、露店市での聞き込みを終えて撤収したばかりだ。

それほど遠くには行っていないはず。

近くの大通りに馬を用意していないなら、走れば直ぐ追いつく距離に居るだろう。

『あんた！ 早く騎士様を呼んできて！ 金貨五枚だよ！』

『おう！』

露店市に居る誰もが同じ事を考えたはずだ。
皆が一斉に四方八方へと走り出す。

移民街の露店市通りは一瞬で、蜂の巣を突いた様な騒ぎに巻き込まれた。

第1話 - 06 異端者狩り2

港湾都市フローマスの東街区を上空から見下ろすと、無秩序に増殖してきた街並みが広がる。

都市計画に沿って開発された北街区の整然とした景観とは対照的だ。

火事の延焼を防ぐために大通りの幅だけは厳しく規制されているが、それ以外のブロックは小汚い家屋が密集するように犇めき合っていた。

そんな今にも崩れそうなボロ屋の屋根上を、コリンはかなりの速度で駆け抜けていた。

すぐに足場が途切れ、薄汚い通りが眼下に広がる。

しかしコリンに躊躇はない。

通りの幅は数メートル。

屋根から屋根へと、一気に跳躍する。

作戦局の制服である青いコートが大きく翻った。

「いいぞ！ 距離およそ四百メートル！ 目標はすぐそこだよ！>

「了解です！」

脳裏に直接響くのは、後方からコリンを追い掛けているはずのフレデリカ先輩の声だ。

聞こえるのは声だけで、姿は見えない。

返事をしたコリンが、たんつと次の屋根に着地。

勢いを活かしたまま、さらに前方へ跳ぶ。

身体が軽い。

周りの景色が、すっ飛ぶように後ろへ流れていく。

この空を駆けるような爽快感は、コリンが竜騎士になって良かったと思うことの一つだ。

法術。

神が定めた自然法則に干渉する術の総称。
かつて奇跡や魔術と呼ばれていた事象を、ヒトは体系化することに成功した。

記録に残る最初期の研究は、二百年前に著された一冊の禁書だ。教会が公に認めて実用化されたのは、さらに時代が下っておよそ百年前。

急速に開発は進み、三十年前には法術という名の技術革命は、戦場の様相を一変させていた。

各国で繰り広げられる、法術の開発競争。

近年の流行は、竜騎兵と呼ばれる兵科での応用研究だ。

コンセプトは騎兵の突破力強化。

長槍の方陣に対して時代遅れとなりつつあった騎兵は、火器と法術の登場で、再び戦場の主役となった。

<法術の稼働状況、全て異常なし。もう少しだけ出力を上げてみようか？>

「はいっ、お願いします！」

ぐんつと加速度がさらに増す。

竜騎士法術には身体能力の強化法術を中心に、防壁法術、攻性法術、通信法術などがパッケージングされている。

コリンの身体中にも、血管のような緻密さで法術回路が焼き込ま

れていた。

士官学校の在学中に、法術職人でもあるフレデリカ先輩によって設計されたものだ。

会戦での竜騎士法術は、特別な軍馬や馬上槍とセットで運用される。

しかし、コリン達の任務は帝国領内に限られており、前戦での正規戦も想定されていない。

そのため過度な重武装は持ち合わせていなかった。

それでもなお、コリンの単体戦力は常人のそれを大きく凌駕している。

<油断するんじゃないぞ。思わぬところで足下を掬われないように気を付けるんだ>

「もう学生じゃないんですから、分かってますよ!」

開発元の国によって、同じ竜騎士法術でもそれぞれ癖がある。

帝国式における最大の特徴は、騎士と術士とのツーマンセル運用だろう。

二倍の人員が必要という欠点はある。

しかし、それを補って余りある利点があった。

他国の竜騎士法術では、騎士が戦いながら同時に術式制御を行うことが一般的だ。

そのため目の前の戦闘に集中出来ず、仕様通りの性能を発揮出来ない。

もちろん天才と呼ばれるエースは存在した。

しかし、戦争は数の限られる天才だけに依存して行うものではない。

帝国式であれば、騎士は目前の戦闘だけに専念すれば良かった。法術制御は、専属でサポートに当たる術士の仕事だ。だからコリン自身が、複雑な術式を操る必要はない。それらは全て、フレデリカ先輩がリモートで行っていた。

コリンの視覚及び聴覚情報は、リアルタイムで先輩にも共有されている。

個人のプライバシーなんてものは、一切考慮されていなかった。逆に先輩からコリンへの指示は、音声イメージ化された思考伝達のみとなる。

不公平すぎだ。

コリンだって先輩の視覚を盗み見してやりたい。

しかし残念ながら、コリン自身に二人分の情報を処理する能力などありはしなかった。

くどうだい、コリン。初日からターゲットに接触できるなんて、東街区に寄って正解だっただろう？ まさにボクの計画通りだよ！>

声だけしか聞こえないのに、先輩の得意気な顔が目には浮かぶ。

「計画というか、どう見ても悪運が強かったただけでしたよ？ 明らかに先輩、あの人が目標だって分からないで話し掛けてましたよね？」

<いきなりの攻撃には、さすがに驚いたけど。ま、何れにしても逃がしはしないよ>

コーン、コーンと響くように感知出来るのは、フレデリカ先輩が並列起動している測距法術の探查波だ。

コリン達が追跡しているのは、かつて絵描きだった若者。

連続騎士襲撃事件の重要参考人だ。

フローマスに到着して早々に、絵描きと遭遇出来たのは幸運以外の何ものでもない。

突然の不意打ちぐらいはご愛敬。

あの状況から咄嗟にビーコン術式を打ち込めただけでも上出来と言えた。

しかし、生かしたまま捕縛とは面倒だね。ビーコン術式の代わりに攻性法術でも撃ち込んでいれば、こんな手間は掛からなかったかもしれないのに>

「それ大惨事ですから！ 帝国領内の市街地で無茶しないで下さい！ おまけに重要参考人を殺しちゃったら、本末転倒もいいところですよ」

<攻性法術にするべきかどうかは、本当に少し迷ったんだよ？ ポクの見込みではあの絵描き、その程度で死ぬようなタマじゃないからね。あ、目標の進路が曲がった。三時の方向に調整したまえ>

「それにしてもこの法術、すごい便利ですね。先輩のことを見直しました」

<もつと讚えたまえよ！ ま、正直なところ使い勝手はいまいちだね>

確かに万能ではない。

分かるのは、目標までの方角と距離だけ。

そこに辿り着くための道順は、自分で考えるしかなかった。

道に迷っていたコリンやフレデリカにとって、それは致命的な問題。

そこでフレデリカ先輩が指示したのが、機動力に優るコリンを先行させるプランだ。

竜騎士のコリンなら、建物や地形は障害にならない。

最短距離を一直線だった。

「それにしても相手の絵描き、相当に人間離れていますね。走行速度が異常です。単騎のようですし、王国式の竜騎士法術でも使っているんでしょうか？」

「いや、ボクの予測通りなら、どの国の法術にも当てはまらないね。人工のコピー技術ではなく、恐らくは天然。会敵する時には十分に注意したまえ」

いくら絵描きの足が速いと言っても、障害物の多い地上を走るのでは限界がある。

中空をショートカットするコリンは、じりじりと絵描きまでの距離を縮めつつあった。

<距離およそ二百メートル！ 方角、十時に調整！>

「こちらでも目標を捕捉しました！」

コリンの研ぎ澄まされた聴覚が、市場から聞こえる騒ぎを捕らえた。

目標は近い。

懐から単発式の法札を取り出すと、法力をチャージする。

ちなみに貧民街の建物には、木板を貼り合わせただけの粗末な造

りが少なくない。

それも新築から築数十年の腐りかけ物件まで、無秩序に混在している有様だ。

中には当然、数メートルも跳躍してきた人体の衝撃に、耐えられない建物だって少なからず存在していた。

むしろ、ここまでそうしたボロい構造物に当たらなかった事が、かなりの幸運だったと言えるだろう。

「は？」

だからコリンの足下の屋根が、何の手応えもなく破壊されたのはむしろ必然だった。

バキヤツと木片が砕け散り、足場を失ったコリンがバランスを崩して宙へ放り出される。

土地勘のある絵描きが、何故わざわざ地上を走って逃げていたのか。

その理由によろやくコリンは思い至った。

第1話・07 フロームス騎士団2

屋根上を軽快に跳んでいたコリンの足下では、フロームス騎士団の兵士達が、錯綜する情報に翻弄されながら走り回っていた。

『間違いないですね？』

『へへ、もちろんです。それで旦那、目撃情報の金貨五枚ってのはいただけるんですよ？』

果物屋の店主が、代表して尋ねる。

場所は東街区の露天市ストリート。

呼び戻された小隊指揮官である女騎士の周りには、賞金目当ての住民達で人集りが出来ていた。

『当然、支払います。これだけ証人が居れば、情報の確度も高いでしょう。ただ、賞金は目撃者の人数で頭割りですよ？』

『は？』

絵描きはこの露天市のストリートを、端から端まで走り抜けていった。

つまり、この市場に居る全員が目撃者と言っても過言ではない。

一人あたり幾らになるのか、頭で計算を試みる。

そして店主は、がっくりと肩を落とした。

『目撃者は、北街区の騎士団本部まで申請に来て下さい。後日、精算した上で、支払いには応じます』

『ふざけんな!』

『馬車代だつて出ねえよ!』

女騎士の目付きが、凶暴に光る。

その手が腰に携えた剣の柄に掛かった。

『今の文句を言った奴、前に出なさい。苦情は受け付けます。ただし、理屈が通らない苦情を述べる場合は、それなりの覚悟をするこ
とです。舐めた口きくと、ぶち殺しますよ?』

群衆が静まり返り、皆が女騎士から視線を逸らす。

真つ正面で女騎士の威圧を受けることになった果実店の店主が、
一番の被害者だ。

女騎士の迫力に肝が冷える。

喉元まで来ていた罵倒を、口にしないでよかったと心の底から安
堵した。

すっかり氣勢を削がれた住民達が、渋々と解散する。

恐らく賞金は、この辺りを縄張りになっているマフィアが総取りし
て終わりだろう。

店主達の手には、銅貨一枚落ちないに決まっている。

人ごみが散ると、女騎士は法札を地面に放り捨てた。

途端に勢いよく紫色の煙が噴き上がる。

信号煙だ。

街中に分散して搜索活動をしている、指揮下の小隊を招集するの
だろう。

店主が浮かない顔をして屋台に戻ると、店番をしていた女将が迎

えてくれた。

『あんた、おかえり。賞金はどうしたんだい？』

『貰えたように見えるか？』

『まあ、世の中そんな上手い話はないさ。気にするんじゃないよ』

『お前が騎士を呼んでこいって言ったんだろうが！』

その時だ。

何かが空から、もの凄い勢いで露天市に突っ込んできた。

正確には向かいの家屋の屋根を踏み抜いた何者かが、投石機から放たれた弾丸みたいな勢いで路上に激突した。

土煙を巻き上げながら、その身体がバウンドする。

『何だあッ？』

逃げる間もない。

驚きのあまり身体を硬直させてしまった店主と女将の目前で、地面を跳ねた落下者が屋台に吹っ飛んでくる。

砕けた木片が盛大に飛び散り、落下した商品の果物が路上に転がった。

幸い店主夫妻に怪我はなかったが、被害は甚大だ。

何事かと体制を整えつつあった騎士団も駆け寄ってくる。

たちまち店主の屋台は、野次馬達で囲まれた。

一部の物はこれ幸いとばかりに、転がる果物を拾い集めている。

こりゃ死んだな。

誰もがそう思った。

『おい、どーすんだよこりゃ！ 俺達の商売、もうおしまいじゃねえか！』

『慌てるんじゃないよ、あんた！ 見ればこの人、随分と豪華な身なりをしてるじゃない。売れば屋台を建て直してもお釣りが出るぐらいの価値はありそうだよ』

『それはそうだけどよ。どう見たってこいつは貴族だぜ？ 俺らで身ぐるみ剥いじまってるのか？』

騒ぐ店主夫妻の前で、ガラリと木材が動いた。

立ち上がったのは、落下してきた貴族の青年だ。

金の縁取りがされた豪華なコートに、腰から下げた長剣。

あれだけの衝撃を身に受けたはずなのに、何事もなかったかのようになにに付いた汚れを払っている。

『ひひひひひひひッ、蘇ったッッ！』

『あんたが服を奪えなんて罰当たりなことを言うからだよ！』

『それはお前だ！』

腰を抜かす店主と野次馬達。

一方、女騎士は驚きつつも、比較的まだ冷静さを保っていた。

「竜騎士か？ 軍務省作戦局のエリート様が、どうしてこんな場所に？」

立ち上がった竜騎士の青年は、何事か顔をしかめながら独り言を呟いている。

まるで見えない相手と話しているみたいで気味が悪い。

やがて周りの状況に気付いたのだろう。

気まずそうな表情を見せると、頭を掻いた。

「や、ども、お騒がせしてすみません」

どうやら地位的にはフロームス騎士団よりも上のようなのだ。

女騎士が冴えない青年を相手に敬礼をする。

「私はフロームス騎士団所属のメイヴィス少尉です。作戦局の事務官殿で間違いありませんね？ 状況を教えていただけませんか？」

「あ、急いでいるんで、ご挨拶はまた後で。本当すいません。踏み抜いちゃった屋根と壊した屋台については、後でコリン宛に請求してもらえるように伝えて下さい。俺、しばらくヘイウッド邸に滞在予定ですから」

やたらと腰の低い上級貴族の青年だった。

言いたいことだけを一方的に伝えると、青年は身体の調子を確認するようにその場でぴょんぴょんと軽く跳ぶ。

信じられないことに、完全に無傷のようだ。

そして野次馬達に手振りで道を空けるように指示すると、人間業を超えた勢いで地面を蹴った。

『うおあッ』

疾風だけを残し、青年の姿はストリートの彼方に消えてしまう。

さっきの絵描きに匹敵する脚力だった。

取り残された形の女騎士に、部下の兵士が指示を仰ぐ。

「少尉、どうします？」

「どうもしません。我々は我々の任務を続行するまでです。人員が揃い次第、次作戦を展開します」

「味方なんですか、あれ？」

「軍務省の連中ですよ。今回の件で介入してくるとは聞いていたが、早かったですね。面倒な奴らに目を付けられました」

苦々しく吐き捨てる女騎士。

同じ帝国軍ではあるようだが、コートの青年と女騎士達とは組織が違うらしい。

店主の目から見ても、仲が良さそうには見えなかった。

『あの、屋台の修理代はどこに請求すれば宜しいでしょうか？』

緊迫した雰囲気の中、女騎士に、店主がおずおずと尋ねる。

ぎろりと睨まれて、店主が後退った。

その背中を女将が後ろからぐいぐい押す。

『金貨六枚といったところですか。後で騎士団本部に来て下さい』

『それだと逸失利益が回収出来ないんですけど』

『分かりました、甘めに見積もって金貨八枚としましょう。これ以上ゴネると、ぶち殺しますよ？』

『ひいッ、充分です！』

目撃情報の報奨金で金貨五枚貰えるはずが、まさか屋台を潰されるとは思わなかった。

金貨八枚はボロ屋台の補償としては良心的な金額だが、大儲けした訳でもない。

営業中断期間も考えれば、トントンぐらいだ。
気落ちした店主に、女将が慰めの声を掛けた。

『まあ、良かったじゃないか。無料で屋台を新調出来ると思えばさ』

『そうだな。商品もあらかた盗まれちまつたし、今日は店終いしかねえな。こんな日ぐらい、たまには夫婦一緒に飲みにも行くか』

『その調子だよ。頑張るのは明日からでいいさ』

カラカラと笑う女将に、店主は少し救われる。

店主夫妻からすると、今回の事件はこうして幕を閉じた。

しかし、竜騎士の青年や女騎士にとっては、まだ本編が始まってすらいなかった。

第1話 - 08 異端者狩り3

絵描きを追ってきたコリンは、東街区の西の端、倉庫の並ぶ河岸区画に足を踏み入れていた。

潮の香りが近い。

南街区との境目となるレスフォード川は、内陸部とフローマス湾を結ぶ重要な水運経路だ。

コリンが索敵しているのは、東側の荷揚げ区画。

対岸に比べると、見るからにボロい倉庫が多い。

人ひとりが隠れるにはぴったりの場所だった。

< 驚いた！ 本当に驚いたよボクは！ 屋根から落ちる竜騎士なんて前代未聞だよ！ 何かい、君はコメディ俳優でも目指してるのかいつ？ だとしたら自信を持っていい。何なら推薦状を書いてあげようか？ 君はそっち方面の才能だけはあるそうだからね！ >

さつきから脳裏には、フレデリカ先輩の罵声が響き続いていた。思わず顔をしかめるコリンだったが、通信法術をこちらから止める術はない。

何という嫌がらせだ。

「いじめないで！ 俺だつてあれは格好悪かったと思ってますよ！ 穴があつたら入りたい！」

< そのまま埋まってしまうばいよ！ >

「ひどいつ？」

思わず涙目になるコリン。

しかしミスをしたという引け目があるので、あまり強くも言い返せない。

目標である絵描きを見失ったのは、完全にコリンの責任だった。

フレデリカ先輩からの探査波が空しく響くが、ビーコン術式からの反応はない。

コリンがこの場に到着する数十秒前に、絵描きは先輩の感知エリアから消えてしまっていた。

測距法術の探査波から逃れる方法は二つ。

一つは術士から遠く離れて、法術のカバーエリアから外れること。もう一つは探査波の届かない遮蔽物に身を隠すこと。

どちらのパターンでも、見失ったまま一定時間が経過するとビーコン術式は効力を失う。

そんな状況は考えたくもなかった。

エリア外に逃げられたとは考えられない。

見失ったこの地点の近くに隠れているはずだ。

コリンとしては時間切れ前に、絵描きを潜伏場所から引きずり出してやる必要があった。

「そういえばさっき、地元騎士団の方々がいらっしやいましたけど。連携とかしなくて、本当に良かったんですか？」

＜彼女達が絡むと、指揮権の問題が色々と面倒だからね。後でボクが調整するから心配はいらないよ。ふむ、やはりその倉庫が一番怪しそうだ＞

南街区へ渡る橋や、東の街道へ続く関所などは、既にフローマス騎士団が抑えている。

そうなるに絵描きに残された選択肢は、レスフォード川から水上を逃走するか、ほとぼりが冷めるまで東街区内に隠れるか、どちらかしかない。

どのプランを採用するにしても、フレデリカ先輩のビーコン術式を無効化させることが大前提。

有効なままでは、運良く水上に脱出しても船ごと沈められてお終いだ。

実際、先輩ならそれぐらいはやりかねない。

<コリン、ボクがそこに到着するまでまだ少し時間が掛かる。ビーコン術式を解除される前に、何とか絵描きを隠れ場所からあぶり出すんだ>

「了解しました」

答えながらコリンは倉庫の分厚い木製扉に手を掛けるが、びくりともしない。

ぐるりと倉庫を一周して確認したところ、出入り口は三つあった。川側と道路側に搬入出用の大きな開き戸が二つ。

さらに人が出入りするための小さな扉が一つ。

スタツフ用の扉は錠前が壊されていたが、裏側から何かで抑えられていた。

コリンはハンカチのような四角い布を取り出すと、搬入口へと貼り付ける。

緻密な法術回路の描かれた、指向性爆破法布だ。

川側から追い込み、道路側に絵描きが逃げ出してくればビーコン術式が再セットされる。

そうなればひとまず任務は成功だ。

後はフレデリカ先輩やフローマス騎士団の到着を待ちつつ、包囲

してゲームセットという作戦だった。

「コリン・イングラム、突入します！」

法布に法力を流し込んで起爆させると、ゴバアツと盛大な爆音を響かせて砕けた木片が飛び散った。

「抵抗するな！ 帝国軍作戦局だ！」

法札を構えて身を乗り出したコリンが、素早く倉庫の中に目を走らせる。

いた。

物棚に半身を隠れさせるようにしながら、絵描きがこちらを見ている。

手にしているのは、携帯用短法傘。

「ッ？」

パラパラパララッつと、秒間八発の法弾がコリンに襲いかかった。

慌てて飛び退き、地面に転がるコリン。

倉庫の外壁にへばり付くように背を預けると、左胸の辺りを驚づかみにして必死に動機を抑えようとする。

<君の存在に気付かれていたか！>

「死ぬかと思った、死ぬかと思った、死ぬかと思った——ッ」

<撃ち返せ！ プレッシャーを与えて目標を倉庫から外に追い出さなんだ！ そろそろボクのビーコン術式が時間切れだ！>

「ちくしょう！」

突入口に顔だけを覗かせると、構えた法札を弾く。

パパンツと軽い音がして法弾が放たれたが、ろくに狙いもつけることが出来ない状況では当たる訳もない。

直ぐに倍以上の法弾で撃ち返され、慌てて首を引っ込めた。

「駄目です！ 火力が違いすぎる！ 押し切れません！」

単発式法札に法力を込めながら、コリンが叫んだ。

コリン達が携帯する兵装は、必要最低限のレベルに抑えられている。

重武装は嵩張る上に重量があるし、帝国内での運用には交戦規定上の制約が多い。

それがこうした突発的な戦闘では仇になった。

手持ちの飛び道具は、使い捨ての単発式法札が二箱だけだ。

法術回路の焼き切れた法札が足下に散らばり、たちまち一箱が空になる。

残り枚数が心許ない。

せめてもの救いは、相手の武装も携帯式だということだ。

弾数や連射速度はともかく、射程と威力は単発式法札と大差ない。軍用の制式法傘でも持ち出されていたら、シャレにならないところだった。

相手に向けて何発か撃ち、すぐに次の手札に法力を注入するため身を引っ込める。

<コリン！ 投擲法札だ！>

「え？」

シャツと正確に投げ込まれた法札が、起爆する。

竜騎士法術によって強化された瞬発力を最大限まで引き出し、全力でコリンは跳躍した。

その背中を爆風が叩き、コリンの身体が吹き飛ばされる。

<……リン！……コリン、大丈夫か！返事をしたまえよ！>

「え？ ああ、はい。生きてます」

頭を振ってコリンが起き上がる。

自動起動した防壁法術のおかげで、制服はボロボロになったが身体的ダメージはそれほど深くない。

軽傷ならそれほど時間を掛けずに自然治癒する。

これも竜騎士を構成する法術パッケージの一機能だった。

<うん。君の身体をスキャンしたが、致命的な問題はなさそうだね。良かった。君に何かあれば、ボクは君のお父上に顔向け出来なくなるからね。だがしかし、悪いニュースもある>

「何です？ 想像は付いてますけど、一応教えて下さい」

<ボクのビーコン術式が消滅した。方針変更だよ。ボクらがその場に到着するまで、何としても絵描きをそこに足止めするんだ>

「あと何分ぐらい保たせれば良いですか？ 正直、もう単発式法札の残札がありません」

「五分。いや、三分でいい」

「了解です。それぐらいなら何とか」

そつと突入口から覗くと、まさに絵描きが道路側の扉から逃げようとしているところだった。

ビーコン術式が解除された以上、この倉庫に留まっている理由は絵描きにとって何一つない。

コリンからの攻撃が止んだ隙に、再び逃走を図るつもりだろう。そうはさせない。

すらりと長剣を抜いたコリンは、絵描きの注意がこちらに向いていないことを確認して、お返しとばかりに投擲法札を投げつけた。

爆音。

物棚が崩れ、土煙が倉庫内を覆う。

既にコリンのことは排除できたと思いついていたのだろう。

不意を突かれた絵描きが、携帯用短法傘を見当違いの方向へ乱射する。

巻き上がった粉塵にまぎれて一気に距離を詰めたコリンが、倉庫の壁を蹴って跳躍した。

絵描きが驚愕した顔でコリンを見上げるが、遅すぎる。

コリンは確信した。

この絵描き、兵装はともかく戦闘経験は素人だ。

殺してしまわないように気を付けながらも、腕の一本ぐらいはもらつつもりだった。

コリンが一気に長剣を振り下ろす。

「なあッ？」

竜騎士法術の斬撃は、板金鎧すら易々と切り裂く。その一撃を、絵描きは素手で受け止めていた。

剣先を掴まれたコリンの身体が、一瞬だけ宙に止まる。

時まで止まったように感じたのは、コリンの錯覚。

絵描きが乱暴に腕を振り、凄まじい速度でコリンの身体が素っ飛んだ。

倉庫の壁に叩き付けられたコリンが、がはつと血を吐いた。

視界に亀裂が走り、赤く滲む。

有り得なかった。

理解が出来ない。

コリンの戦闘能力は竜騎士法術で強化されているというのに、この差は一体何だ。

防壁法術でダメージの大半を相殺したはずにも関わらず、コリンは身動き一つ取れなかった。

竜騎士法術が自動的に生命維持モードへ移行。

法力リソースの大半が、傷の修復に回される。

重傷だ。

この様子では起き上がるまでかなりの時間を要する。

もちろん相手は、悠長に待ってはくれない。

止めを刺すつもりだろうか。

絵描きが注意深くこちらの様子を伺った。

やばい。

死ぬ。

コリンは直感でそう悟った。

さっきまでとは、絵描きの雰囲気は全く違う。

人間を超越した存在が、そこには居た。

<その通り。そいつこそが法術のコピー元にしてオリジナル。異端者と呼ばれる存在だよ。コリン、よく耐えた。危ないから頭を下げていい>

フレデリカ先輩の声はそれだけ伝わると、それっきりぷつりと通信法術ごと切れた。

ぞくぞくと悪寒が背中を駆け上がる。

これは絵描きの威圧感ではない。

もっと身近で慣れ親しんできた恐怖だ。

「うわあああああーっ」

ほとんど崩れるようにして、コリンは頭を抱えて床に這い蹲った。その直後。

コリンの頭のすぐ上。

倉庫の壁が豪快に吹き飛んだ。

圧倒的な破壊力が、壁や物棚ごと何もかもを押し流す。

熱量がコリンの髪の毛をチリチリと灼いた。

本来は城門を破壊する用途で開発された、攻城級法術。

こんなものを単身で扱える術士など、帝国広しといっても数人しか存在しない。

全ての衝撃が去った後、倉庫の外壁は大きく崩れ、穴が二つ空いていた。

中の様子は廃墟そのもの。

倉庫主には気の毒なことだが、在庫の品は全滅だろう。

「殺す気ですかーっ！」

瓦礫に埋もれていたコリンが、起き上がりながら叫んだ。

崩れた壁を挟んでコリンの真後ろ、倉庫の外に仁王立ちをしていたフレデリカが「ふむ」

と頷いた。

「逃げられたか。この攻城級法術、起動時間に未だ改善の余地があるな」

「本気で死ぬかと思いました！ それも戦死じゃなくて、同士討ちで！ 異端者よりあんたの方がよっぽど危険だよ！」

「せっかく助けてあげたのに、失敬だね君は。そろそろ動けるだろう？ さつさと立ちたまえ。やれやれ、また追跡劇の再開だよ」

「外傷は回復しましたが、法力はそろそろ底尽きそうです」

「法力のスタミナだけが君の取り柄だろう？ 並の人間ならとっくに枯れてる。何世代も計画的に濃縮されてきた、貴族の血つてやつだろうね。生まれながらの才能をくれたご先祖様に感謝することだ」

フレデリカが手を伸ばし、コリンの身体を瓦礫の中から引き摺り起こした。

見渡すとフレデリカの周りには、フローマス騎士団の兵士達が慌ただしく動き回っている。

「目標の絵描きは、船の奪取は諦めてまた東街区に逃げ込んだようだね。ま、後は袋の鼠だよ。掃討戦はボクらとフローマス騎士団の共同作戦と行こうか」

休ませてくれる間は、まだ貰えそうになかった。

第1話 - 09 異端者狩り4

絵描きが逃げ込んだのは、東街区でも建物が密集している区画だった。

フローマス騎士団の二個分隊に、追跡の任務が与えられた。残りの分隊は、包囲網形成に回っている。

コリンは追跡班への配置だ。

異端者相手に生身の兵士では犠牲が増えるばかり。

竜騎士であるコリンと、術士のフレデリカはそれぞれ別分隊のサポートに付いた。

つまりコリンの役目は、異端者と会敵して第一撃を食らうための盾役だ。

役割が嫌すぎる。

裏路地は見通しが悪く、日が差し込まずに薄暗い。

人間が二人擦れ違うぐらいがやっとという、細い道だ。

盾役として隊列の先頭を行くコリンは、感覚を研ぎ澄ませながら慎重に足を進めた。

角を曲がる度に、どっと緊張してしまう。

正直なところ、もう二度とあの絵描きとは戦いたくなかった。

あれに勝てる自分がイメージ出来ない。

出来ることなら、自分以外の追跡班か、包囲班に当たってほしいところだった。

幾つかの角を曲がったところで、ガタツと何かの倒れる音が路地に響いた。

逃げる足音。

地元の善良な住人か、野良犬辺りが立てた物音だと信じたい。信じたいが嫌な予感しかしなかった。

分隊の兵士達と無言のまま頷き合う。

バツと次の角へ身を乗り出すと、ちらりと絵描きの背中が見えた。

「ちくしょう！　うちのチームが当たりかよ！　そんな予感はあるんだ！」

くどくどやらボクらの方はハズレらしい。強運だね、コリン。こっちの隊もそちらに向かうよ。挟み撃ちにしよう>

もはや脇道ごとに探索する必要もない。

足音の方向へと、待ち伏せだけに気を付けながら速度を上げた。

こちらの物音に、相手も気付いたらしい。

絵描きの足音が急に駆け足になる。

「感づかれた！」

「目標に会敵！　友軍へ連絡しろ！」

隣を走る兵士が笛を鳴らした。

別の兵士が投げ捨てた法札からは、色付きの狼煙が勢いよく上空へ噴き上がる。

この状況になった以上、遠慮はいらない。

追うコリン達も全速力だ。

そうは言っても道が狭い上に、ゴミなどが散らかっており足場は最悪。

お互い大通りを全力疾走していた時みたいな速度は出ない。

路地の真ん中に堂々と置かれた得体の知れない木箱を乗り越えた時、先の角からどちゃりと妙な音が響いた。

ぴたりと足を止め、コリンが分隊の兵士達と視線を交わす。

そして皆が何の音か判断つかないことを示すように、首を横に振った。

迷っていても時間をロスするだけだ。

畏だとしても飛び込むしかない。

コリンが長剣を構え直し、そのフォローをするように兵士達が軍用の連弾式法傘を構えた。

中には二人懸かりで操る分隊支援用の重法傘まで混じっている。

絵描きの所有する携帯式短法傘が、子供のおもちゃに思えるほどの重武装。

さすが軍隊。

前衛のコリンとしても、かなり心強かった。

完全な戦闘態勢で身構えたコリン達の目前に、先の角からオレンジが一つ、ころころと転がり込んできた。

「？」

微かに漂う柑橘類と鉄の香り。

ますます角の向こうで何が起きているのか理解できない。

いち早く血相を変えたのは、コリンに同行する兵士達だった。

「事務官殿、こいつは血と臓物の匂いです！ くそ！ 誰が犠牲に
っ？」

「他班が先に会敵したか？ 馬鹿な！」

「包囲班も有り得ない！ 合流ポイントはまだ先のはずだ！」

例えそうだとしても、交戦音すら一切しないのは不自然すぎる。

もしかしたらたまたま居合わせた地元住民が犠牲になったのかもしれない。

<もちろんボクらの班じゃないよ。そちらに到着するには、まだ少し時間が掛かりそうだ>

何れにしても、一刻の躊躇も許されない状況だ。

悠長にフレデリカ先輩達の到着を待つ余裕はない。

意を決して角に飛び込む。

「動くな！　こちらは帝国軍作戦局及び、フローマス騎士団だ！」

むせ返るような死臭と、一面に広がる血の海の中。

小柄なメイドがぼつりと立ち尽くしていた。

歳は十歳前後だろうか。

紅血に塗れた陶器のように白い肌。

空虚に澄んだ蒼い瞳は、大きく見開かれたまま固まっている。

メイドの立つ位置は路地裏でも開けた場所にあるらしく、演劇のスポットライトみたいに日の光が射し込んで、銀髪の三つ編みがきらきらと輝いた。

「天使……？」

兵士の一人が、魂を抜かれたような表情で呟く。

心奪われる光景に、コリンも思わず同意しかけてしまった。

それほどメイドの美しさは圧倒的で、現実離れしていた。

しかしそれは、触れれば消えてしまいそうに儚げな美しさでもあった。

やがてこちらに気付いたのだろう。

メイドが首を傾げ、小さな唇を僅かに開く。

「あは、コリン・イングラム様なのデスね？ 港湾都市フローマスへ、ようこそなのデスよ」

人形に命が吹き込まれたようだ。

メイドがにつこり微笑んだ。

白い肌に生気が戻り、ほんのり桃色に色付く。
はにかむような笑顔が瑞々しい。

戦意が抜けて、コリンの剣先もゆっくりと下がる。

メイドの可愛い微笑みだけが、周りの情景から著しく乖離している。

非日常に、無理に日常を押し込んだような違和感。

コリンにはメイドが、現実を見つめていないように感じた。

平和を享受しながら、繁栄を続けてきた港湾都市フローマス。
それがこの一画だけ、まるで戦場を切り出してきたような凄惨な情景。

数十メートルも離れた通りでは、何も知らない人々が今も日常生活を営んでいる。

その事実が信じられない。

メイドの抱えた袋からこぼれ落ちたオレンジが、血溜まりに転がっていった。

<コリン、ぼーっと突っ立たないで周囲を索敵！ いや、今のは無しだ。撤回するよ。他所様の隊から、戦死者を出す訳にもいかないからね>

フレデリカ先輩からの声が、すごく遠くに聞こえる。

我に返った兵士の一人が、慌てて首元にぶら下げていた笛を吹いた。

ピー、ピーーーーーッという甲高い音が路地裏に響く。

作戦終了の合図だ。

同時に打ち上げられた照明法弾が、強烈な青白い光を放ちながら宙を漂った。

止まっていた時が動き出したように、慌ただしく兵士達が各々の仕事に取り掛かる。

飛び散る血とへしやげた肉片。

白く覗くのは砕けた骨。

どれほどの力が作用したのか分らないが、壁にへばり付いていたのは、かつて絵描きだったモノの残骸。

既に原型は留めていない。

熟れた果実を思い切り壁に投げつければ、このような凄惨な姿にもなるのだろうか。

「君、気をしっかり持つんだ!」

コリンは自分の派手なコートを外すと、棒立ちになったままのメイドの細い肩へ優しく掛けてやった。

安心したように、ふらりと力の抜けたメイドを慌てて抱きかかえる。

こうしてコリンは、路地裏の戦場でシャル口と出会った。

第2話・01 回想（帝歴261年冬）

帝国と王国連合の戦争が始まって、既に八十年近くが経過している。

小休止を挟む度に、参戦国の顔触れや敵味方は目まぐるしく入れ替わり、開戦時の大義名分などはどこかへと消えてしまった。

根底にあるのは、帝国に代表される海洋勢力と、それに抵抗する大陸勢力との経済戦争だ。

一進一退の争いを続けてきた二者だったが、近年のパラーバランスは帝国優勢へと傾きつつある。

勢いに乗る帝国は、数十年振りに王国連合の盟主国領内へと軍を侵攻させた。

城塞都市ローアン。

盟主国の王都目前まで迫った帝国軍ではあったが、一つの地方都市がその進撃を足止めした。

当初三ヶ月で陥落すると見込まれた城塞都市は、予想に反して一年以上の強硬な抵抗を見せる。

その間、帝国軍の司令官が交代すること三回。全て王国側の仕組んだ暗殺作戦が原因だった。

現在の師団司令官代行は四人目となる。

彼の名は、ウィリアム・ヘイウッド。

フローマス伯ヘイウッド家の長子としてエリートコースを進んできた、折り紙付きの帝国軍人だ。

階級は少佐。

二十九歳。

本来であれば少将級のポストである師団司令官としては、異例の若さだった。

「いい夜だ。そうは思わんか、軍曹」

「全くです、少佐。月明かりどころか、星ひとつ見えない。例え太陽が出ていたとしても、この吹雪なら二百メートル先の灯りすら見えなんでしょうな」

近年稀に見る、記録的な猛吹雪。

肌を刺す冷気と雪の飛礫が、若き司令官とその副官のフードを激しく叩く。

騎馬がぶると唸り声を上げ、白い息を荒々しく吐いた。

兵士達が首を竦めて極寒に耐える中、馬上で堂々と背筋を伸ばしたウィルの表情はどこまでも晴れ晴れとしている。

ウィルが直接率いるのは、実父であるフローマス伯爵から預かってきた歩兵連隊二千名。

さらに他家が所有する二個歩兵連隊と法兵連隊及び竜騎兵連隊が、吹雪に晒されながらも所定位置で待機中。

予備兵力を含めて合計一万名近い帝国軍一個師団が、今やウィルの指揮下にあった。

対する城塞都市ローアンの守備兵力は僅か二千強。

残りは素人同然の市民兵ばかり。

しかも長期の包囲戦により、精神的にも肉体的にも彼らは極限まで追い込まれていた。

兵力差は圧倒的。

それでもなお、ウィルは非情なまでに一切の手心を加えない。

伝令兵と何事が言葉を交わしていた軍曹が、ウィルへ報告する。

「少佐、内通者からの合図を確認。城門は予定通り、我らの手に落ちました」

「上出来だ、軍曹。プランAからの変更はなし。この戦には随分と投資したからな。そろそろ回収させてもらおうでしょう」

「了解です、少佐」

オーケストラ指揮者のような優雅な仕種で、ウィルが腕を頭上へ掲げた。

一瞬、吹雪が収まる。

それはただの偶然。

しかしその光景は、ウィルの手刀が雪雲を切り裂いたかのようなだった。

「武運を祈る！ 全ては、女王陛下のために！」

ウィルの手を振り下ろされるのと同時に、信号法弾が放たれた。稜線に伏せていた兵士達が、迷彩用の白いフードを脱ぎ捨て一斉に立ち上がる。

「女王陛下万歳！」

「女王陛下万歳ッ！」

抜剣する刃滑りの音と鬨の音が、一万名の軍勢へ波紋のように広がっていく。

城塞都市ローアン側からも照明法術が次々と打ち上げられ、強烈

な青白い光が帝国軍の全容を照らし出した。

警鐘が鳴り響き、慌てて反撃に転じるローアン守備軍。

しかしその反応はあまりに鈍い。

ローアン守備軍の組織的な斉射が始まる頃には、既に帝国軍の先鋒は城壁まで二百メートルという距離まで接近していた。

帝国竜騎士の馬上槍から放たれた法撃や攻城級法術が、幾重にも張り巡らされた城塞都市ローアンの防壁法術に衝突。

オーロラのような輝きを放ちながら、防壁法術が砕けていく。

飛び交う弓矢と攻性法術。

幾人かの帝国兵士が雪上に力尽きていくが、帝国軍は意に介さない。

脱落者を踏みつけて進むような勢いで攻め続けた。

そして、城門が内側から開かれる。

後は文字通り圧倒的な展開だった。

城塞都市に広がる戦火が、天を覆う雪雲を赤く染め上げる。

交戦開始から、わずか十数分しか経過していなかった。

第2話 - 02 異端者狩り5

ローアン攻城戦から五年。

旧王国連合領から海峡を挟んだ向かい側、帝国本島の南端に位置する港湾都市フローマスでは、連続騎士襲撃事件で街中が騒然となっていた。

交通規制を実施してまで強行された重要参考人の捕縛作戦は、完全に失敗。

参考人である絵描き自身が殺害されるという形で幕を閉じた。その舞台となった東街区の路地裏は、野次馬達が集まってちよつとしたお祭り騒ぎだ。

現場検証中の騎士団が、押し寄せる市民達を懸命に追い払っている。

「はー、それではコリン様も、あの襲撃事件を解決するためにフローマスまでいらっしゃったのデスねー」

「そうなんだ。俺達は軍務省作戦局の所属だね。地方騎士団だけでは手に負えない難事件の、火消し役を務めてる。特に特務四課では、法術に関わる事件や異端者対策を扱っているんだ」

絵描きの殺害現場からほど近いパブ、王国の夕暮れ亭。

湯を借りていた一人のメイドが、タオルで頭を拭きながら作戦局の青年から事情聴取を受けていた。

聞き取り役になっている青年の名はコリン。

栗色の髪をした、いかにも頼りなさそうな若者だった。

それでもスリス公爵家の、次々期後継者と目されている。

現在の軍務省所属という地位は、箔を付けるための実地研修みたいなものだっただ。

一方、絵描きの殺害現場に居合わせたメイドは、シャル口と名乗った。

まだ十歳前後に見えるぐらいの、幼さを残す子供使用人だ。本来なら三つ編みにされているはずの銀髪を、今は解いていた。

「はふー、ようやくひと息ついたのデスよー」

タオルから顔を離すと、シャル口がまったりとした声を伸ばす。無防備すぎるその表情に、コリンは息を詰まらせた。保護欲を掻き立てる、尋常でない可愛さだ。

その上、湯上がりのせいだろうか。

シャル口のほどけた銀髪からは、とてもいい匂いがしていた。思わず深呼吸をしてしまうコリン。

シャル口が、きょとんとした無垢な表情を向ける。

「あの、コリン様？　どうかされたデスか？」

「いやいやいや！　違う！　別に見惚れてたとか、そーいう訳じゃないから！」

慌てて両手を振って誤魔化すコリン。いけない。

初対面同然なのに、これでは危ないお兄さんだ。

シャル口に無用な警戒心を持たれるのは非常に宜しくない。

「ちょっと待ちたまえ、コリン。君は何か、決定的な勘違いを犯していないかい？」

「は？ 何ですか先輩。急に口を挟んでこないで下さい」

脳裏に響くのは、離れた現場で検証作業をしているフレデリカ先輩の声だ。

通信法術は遠隔地からの意思疎通を可能にする。

欠点は、コリンの側からは通話を切断することも出来ないということだ。

通話権限は、一方的に先輩だけが有している。

<ボクも君の視覚を通して見ているけど、確かにそのシャルロちゃんも可愛いね。なかなかお目に掛かれないレベルだよ。でもね、彼、男の子だよ？>

「はっはっはっ。嫌だなあ、先輩。こんなに可愛い子が、男の子な訳じゃないじゃないですか」

「いえ、わたし男の子デスよ？」

「え？」

お風呂上がりの色気を醸すプラチナブロンド。

透き通る蒼色の大きな瞳。

小さく整った鼻と口。

白い肌はうっすらピンクに色付いて、発育途上な身体は絶妙なラインを描いている。

どこからどう見たって、美少女だ。

こんな美少女、コリンの人生で見たこともない。

「あは、初対面だとたまに間違えられちゃうデスけどね。でも、本当に男の子デスから。ほら、触ってみますか？」

シャルロがコリンの手を取って、自分の胸元に当てる。
ぺたんとした真っ平らな胸。

しかしコリンの年頃なら、あまり証明になっていない気がする。

「ほら、お分かりになったデスよね」

「嘘だーーーーーーッ！」

コリンが絶叫がパブに響いた。

見るに見かねたシャルロの顔見知りだというウェイトレスが、コリン達のテーブルにやってくる。

「信じたくないのも分からなくはないけどね。でも、シャルロちゃん真正銘の男の子よ？　それが逆に萌えるんだけど！　やーん、お風呂上がりのシャルロちゃんも、かーわーいーいー！」

「ちょっとリュシーさん、止めて下さいなのデス！　ほら、騎士様がびっくりして固まっているのデスよ！」

「シャルロちゃんの性別でびっくりする人なんて、いつものことじゃない。事実を受け入れられない男って、格好悪いわよねー」

「そのウェイトレスが言う通りだよ。ほら、いつまでもショックを受けていないで、さっさと働きたまえ」

何ということだろうか。

コリンの中で価値観がガラガラと音を立てて崩れていく。

シャルロが男の子だなんて、おかしすぎる。

神様が何か決定的なところを間違えてしまったに違いない。

何だかもう事件のことなんて、コリンの中ではどうでも良くなってきた。

そんなことよりシャルロちゃんだ。

「事務官殿、何なら聞き取りは私が行いましょうか？」

同席するフローマス騎士団の兵士が、控えめに尋ねる。

彼はシャルロの性別を知っていたらしく、それほど衝撃を受けていない。

やばい。

軽蔑の眼差しがコリンに集中する。

歳は若くても階級が上の人間として、ここは毅然とした態度を取る必要があつた。

「いえ、取り乱しました。もう大丈夫です」

過去形じゃないけどね！ 絶賛、今も取り乱し中だけどね！ 等
という心の声は、微塵も表に出す訳にはいかない。

平静を取り繕って、聞き取りを再開する。

シャルロの職場はヘイウッド邸だということは、既に聞いた。

雇用主はフローマス伯爵。

港湾都市フローマスの領主様だ。

シャルロ自身の身元確認は、省略しても構わなさそうだった。

彼の仕事は、領主から届いた私的な書簡の配達だという。

美少年をメッセンジャーに採用するのは、貴族達には良く見られることだ。

「うちのメッセンジャーはこんなに可愛いんだぞー」
と、対外的にアピールする目的もある。

いやだから、可愛すぎだつてと内心でツツコミを入れざるを得ない。

初対面のコリンを、いきなり名前で呼んできたことも納得だ。

何しろヘイウッド邸には、しばらく滞在させてもらう予定でいる。そこで働くシャルロが、コリンのことを知っていたのは不思議でもない。

今日も午後から、シャルロは各地の名士達へ書簡を配達していたという。

そして配達も終わり、いつものように馴染みである東街区の露天市に訪れた。

果実店ではオレンジを購入。

その後、乗合馬車に乗るために、近道である路地裏を歩いていたところ、事件に遭遇という流れだった。

コリンや騎士団が繰り広げていた、追走劇には気付いていたらしい。

「ただ、あんまり気にしていなかったのデスよ。ほら、この街では強盗や殺人なんて日常茶飯事デスから。自警団に追われる犯人さんなんて珍しくもないのデス」

「そんな物騒なところ、ひとりで歩いちゃ駄目じゃないか！ 誘拐されたらどうするの！ いやむしろ、俺なら誘拐してお持ち帰りするね！」

コリンが今さらながら激昂して犯罪宣言をする。

改めて考えてみればとんでもない話しだ。

大人にとっても危険な貧民街。

いつ首締め強盗や人攫いに遭っても不思議ではない。

シャルロのような子供のひとり歩きなど、格好の餌食になってしまふ。

ところがシャルロは、にっこり笑うとコリンの注意を軽くスルーしてみせた。

「あは。ご心配ありがとなのデス。でも、わたしにとっては第二の故郷みたいなものデスから。この移民街は、同胞には優しい街なのデスよ」

「それにしたって、無防備すぎるよ！ 屋敷の人達は、何も言わないの？」

「あ、でも、帝国の方にはちよっぴり危険かもしれないデスね。コリン様がこの街を歩く時には、気を付けてほしいのデス。武装しないまま、ひとり歩きしちゃ駄目なのデスよ？」

「逆に心配されたッ？」

そこから先の話は、コリンの記憶とも一部が重複する。

残念ながらシャルロも、犯人の顔は見えていないらしい。

シャルロの歩いていた路地に逃げ込んだ絵描きは、そこで待ち構えていた何者かに出会い頭で殺害された。

その瞬間を、シャルロは目撃してないそうだ。

「ローブみたいのを被った人が、逃げていく背中を見た記憶があるのデス。確信は持てないのデスけど、女性のような肩幅だったのデスよ」

コリン達がやってきたのは、その直後だったという。
ちなみにコリンは、そのような人物は見えていない。
現場に足跡も残っていないかった。

ただ、相手は異端者を一撃で葬るような化け物だ。
常識で考えて意味があるとは思えなかった。

直ぐに周辺を索敵しなかったのが悔やまれる。
中断したのは確か、フレデリカ先輩の指示だ。
客観的に見て、その指示は正しかった。

上位の異端者や聖絶指定種が相手だった場合には、当時のコリン達の装備では逆に全滅していた危険性が捨てきれないからだ。
犯人と邂逅しなくて救われたのは、もしかしたらコリン達の側だったのかもしれない。

シャルロも無事で良かった。

「そうそう、もう一つ覚えているのデス」

「うん、どんな些細なことでもいいから教えてくれると助かるよ」

「『助けて』
と」

「え？ もう一回お願い」

「帝国語に訳すと、助けてという意味なのデスよ。とっても切実な声色だったから、耳に残っているのデス。ただ、もしかしたら聞き間違いなのかもしれないデスけど」

「犯人は、絵描きの身内だったのか……？」

そう考えるのが自然だ。

通りすがりの子供でしかないシャルロに助けを求めるとは思えない。

異端者の中には、通信法術と同系統の能力を使う者達も存在すると聞く。

絵描きは現場まで誘導されて、その上で犯人に口封じされた可能性にはかなり真実味がある。

<コリン、シャルロちゃんをこっちに連れてきてもらうことは出来るかい？ もちろん無理そうならまた後日でいいよ。君の判断に任せる>

再びフレデリカ先輩からの通信法術。

何しろシャルロは、人が死ぬところを目前で見たばかり。

トラウマになっていてもおかしくない。

しかしあの場でかなり弱っているように見えたシャルロも、今はすっかり立ち直っている様子だ。

王国出身のシャルロにとって、戦場は見慣れた光景だったのかもしれない。

これだけ元気なら、シャルロを現場に連れて行っても問題なさそうだった。

「あ、はい。一応は本人に聞いてみます」

「あは、わたしなら全然へっちゃらなのデスよ。記憶が薄れないうちに、早く済ませちゃうのデス。ただ、あんまり帰りが遅くなると、屋敷のみんなを心配させちゃいそうデスけど」

「それなら俺達の馬車に相乗りしていけばいいよ。どうせ行き先は

ヘイウッド邸だろう？ 乗合馬車よりは早いはずだ」

「わあ、それは大助かりなのデスよ！ ありがとなのデス！」

無邪気に喜ぶシャルロは、やはり底なしに可愛かった。

これで男の子だなんて、やはり信じられない。

労働者階級の中では、領主の屋敷に雇われているシャルロは間違
いなく勝ち組に属する。

最底辺に近い貧民街の住人から、妬みの対象になっていないのが
不思議だった。

そんな疑問も、シャルロの笑顔を前にすれば一発で氷解してしま
う。

移民街のアイドル的存在な男の娘。

ファンクラブがあるのなら、コリンも是非入会したいところだっ
た。

本当にそんなクラブが存在し、本当に入会してしまったのはもう
少し後日の話だ。

第2話 - 03 異端者狩り6

絵描きの殺害された現場には、未だ生々しい痕跡が残されたままだった。

血に塗れた壁の前。

二人の女性が並んで立っている。

周りでは兵士達が、地面に這いつくばって遺留品を捜していた。

「最初の一人は、通常の殺人事件として処理されました。軍務省にも、定型的な報告しかしていません」

連続騎士襲撃事件の概要を説明しているのは、地元フロームス騎士団の女騎士。

名はメイヴィスという。

髪の毛を短く刈り上げ、褐色に灼けた肌を持つ女性だ。

二十代半ばにして一個小隊を率いる士官であり、階級は少尉。

元は偵察飛行隊の所属だった。

おかげで同世代でも軍歴は長く、昇進のスピードも頭ひとつ早い方だった。

隣りに並んでいる軍務省の女性事務官は、フレデリカ・ショータ
I。

小柄な上に童顔のため、外見だけだと子供にしか見えない。

階級は確か、上級二等官だったはず。

武官なら中佐クラスに相当する。

少尉のメイヴィスからすると、実感が沸かないほどの階級差。
こうして直に話をしていることが信じられない。

これが上級貴族の特権というやつか。

若干の妬みを自覚しつつも、表面上は上官への礼儀を保ちながらメイヴィスは説明を続けた。

本来なら軍務省の相手など、大尉辺りに対応してほしい。

しかしこの場に居る士官は、メイヴィスだけなのだから仕方なかった。

「私達が事態の深刻さを認識したのは、二人目の犠牲者が出た後です。初動の遅れについては、返す言葉ありません」

「別にボクは、君達を責めるために来た訳じゃないからね。そんなに緊張しないでくれたまえ。それに帝国騎士が殺されるなんて、そこまでレアなニュースでもない。当時の対応としては適切だったと思うよ」

確かに帝国騎士の絡んだ殺人事件なら、これまでも稀に発生していた。

しかし、連続殺人となると話は全く違ってくる。

特に問題視されたのは、二人目の犠牲者が不意打ちではなかったこと。

正面から交戦したと思われる痕跡が残されていた。

「三人目と四人目が行方不明になってから先は、既にレポートを上げている通りです。ご存知の通りフローマスは、法術関連の規制が緩く、聖絶指定主の保護特区にもなっています。残念ながら、治安状況は良くありません。それでも今回のように、ここまで堂々と我々が狙われた事例は初めてです」

四人目の犠牲が出るに至り、フローマス騎士団の団長であるウィリアム・ヘイウッドは事態の公表を決断した。

領内の恥を外部へ晒すことになり、その決断には賛否が分かれる

ところだ。

フローマス騎士団からの報告に、帝国軍上層部は衝撃を受けた。三人目と四人目の犠牲者は、ツーマンセルで行動していた竜騎士ペア。

つまり、帝国陸軍の主力である竜騎兵法術が、敗北したことを意味する。

これは地方騎士団だけの問題に留まらない。

直ぐに本件の扱いは、帝国軍全体を巻き込んだ重大懸案事項へと格上げされた。

軍務省作戦局の介入は、遅かれ早かれ避けることは出来なかっただろう。

「ウィルは火消しに戻ってこないのかい？　ボクが思うに、この件は彼の詰めの甘さが原因だよ」

フレデリカはウィリアム騎士団長とも旧知であるらしい。信じられないことに、愛称を呼び捨てだった。それだけでもメイヴィスとの絶望的な身分差を痛感させられる。

ウィリアム本人は現在、港湾都市フローマスを留守にしていた。ローアン政務長官として長く海外に駐在しており、帰国は難しい。フローマス連隊の主力三個大隊も、ローアンに外征したままだ。つまり連続騎士襲撃事件は、ウィルの留守を狙って引き起こされたという見方も出来る。

「団長は本件について、フローマス駐屯大隊だけで対処可能と見通しています。現在までに確認された犠牲者は八名。この絵描きを含めても九名に過ぎません。ローアンで日々増え続けている戦死者数

を鑑みれば、外征中のリソースを本国に呼び戻す余裕はないと判断しました」

「ふん。確かに数字だけ見ると、その答えで正しいけどね。ま、彼らしい考え方だと言っておこうか」

小馬鹿にしたような物言いに、メイヴィスのこめかみがピクリと反応する。

ここで怒っては駄目だ。

自制しろ。

軍組織において階級は絶対。

小娘みたいな童顔をしていても、フレデリカは階級だけならウィリアム団長よりもさらに格上だ。

唐突にフレデリカが、目の壁へと手を伸ばした。

既に絵描きの遺体そのものは回収されているが、それでも血や肉片はこびりついたまま洗い流されてはいない。

半乾きに凝固した血液を指先で拭くと、それをフレデリカは自らの口で舐め取ってみせた。

もこもこ咀嚼すると、そのまま路上に吐き捨てる。

隣のメイヴィスは、驚きのあまり目を見開いたまま硬直していた。

メイヴィスだって帝国騎士の一員だ。

前線経験もあり、死体には慣れている。

そのメイヴィスから見ても、フレデリカの行動は常軌を逸していた。

ナプキンで口元をぬぐうフレデリカは、あくまで平然としたものだ。

「ふむ。彼は異端の力に目覚めてから、まだ日が浅いね。交戦時に

手応えがなかった訳だよ」

異端者に対抗することを主任務とする特務四課は、異端者並の化け物揃いという噂は本当だったのか。

思い返してみれば、河岸の倉庫区画で放たれた攻城級法術だって通常の運用では考えられない。

フレデリカという事務官は、何もかもが常識外すぎた。

メイヴイスは生唾を飲み込むと、質問を重ねる。
声が震えていないか心配だった。

「覚醒したきっかけは分かりますか？ 取替子？ それとも聖絶指定種との接触でしょうか？」

「接触タイプだ。君達の期待通りの答えだろう？」

見透かしたような目付きで、フレデリカがにやりと笑う。
そして壁の血痕を親指で示しながら宣言した。

「間違いない。この絵描きを下僕にしたのは、ローアンの魔女だよ」

「ッ！」

凶星だ。

まさにそのキーワードこそが、フローマス騎士団が追い求めている答えだった。

ローアンの魔女。

ローアン攻城戦において、立て続けに帝国側の司令官を暗殺した聖絶指定種の通称だ。

戦後に姿を消し、現在まで消息は掴めていなかった。

ローアンの魔女が、フロームス騎士団を襲撃することは正当な理由がある。

故国を滅ぼされた復讐。

大義として不足はない。

上等だ。

受けて立ってやる。

フロームス騎士団にとっても、ローアンの魔女には多くの戦友を討たれてきた。

復讐が復讐を呼び、片方が滅びるまで永遠に終わることのない争いの輪廻。

何と素晴らしいことだろうか。

「やけに嬉しそうだね？」

「任務に私情は挟みません」

こみ上げる歓喜を抑え込みながら、しれっとメイヴィスは答えた。しかしそんなメイヴィスの内心も、隣の事務官を見た瞬間に凍り付く。

フレデリカ事務官の童顔に浮かんでいたのは、戦慄を覚えるほどの狂喜。

本能的な恐怖に、メイヴィスの背筋がぞくりと震える。

メイヴィスは理解した。

この事務官は、メイヴィス達と同類だ。

魂が遠い戦場に縛られている。

くく、とフレデリカが喉の奥で笑った。

「皮肉なものだ。表舞台から退場したはずのボクに、再び機会が巡ってくるとはね。ずっとローアンの地で彼女を追っていたウィルは、どんな顔をするだろうね？」

息苦しいほどに重い空気を振り払ったのは、場違いに平和ボケした掛け声だった。

「あ、先輩。シャルロちゃん連れてきましたよー」

間の抜けた印象の青年がこちらに手を振っている。

事前に通知されていた資料には確か、フレデリカ上級二等官の補佐要員として記載されていなかった。

宿泊先となるヘイウッド邸なら、貴族名鑑などで詳しい情報を調べているだろうが、メイヴィスにとってはさほど興味もない。作戦局所属というだけで、どこか上級貴族のご子息様だろうと予想は付く。

「それでは私は、これで失礼します。何かあればお声掛け下さい」

メイヴィスは敬礼をすると、やってきた竜騎士の青年と入れ違いにフレデリカの隣りから離れた。

青年が連れてきたのは、事件の目撃者でもあるヘイウッド邸のメイドだ。

早速フレデリカは、メイドに聞き込みを始めていた。

現場から離れたメイヴィスに、歩み寄った伍長が押し殺したような小声で囁いた。

「少尉、あいつら一体何者ですか？」

フレデリカが上級貴族だということは、一目で分かったのだろう。そのため彼女から、メイヴィスが離れる頃合いを見計らっていたらしい。

下級貴族のメイヴィスでさえ、物怖じしてしまう身分差だ。平民身分である下士官や兵士達が、フレデリカを避けるのは当然と言えた。

「彼女はフレデリカ・ショーター。名高きルーンベリー公ショーター家のご令嬢にして、軍務省作戦局から派遣されてきた特務四課の事務官です」

歩きながらメイヴィスが応じる。

帝国軍の内部には、大きく分けて二つの組織が存在する。

まずは作戦実行部隊。

実際に戦場に投入される際には、諸侯が所有する様々な兵科の連隊を組み合わせて、師団や方面軍を構成することになる。

戦場で血を流すのが、彼らの仕事だ。

メイヴィス達はこちらに属する。

もう一つが軍務省。

彼らが戦場に立つことは稀だ。

封臣会議で示された方針に基づいて、情報を収集し、具体的な作戦を立案する。

予算と人事権を握っているため、実質的には作戦実行部隊よりも上位組織と言えた。

フレデリカ達が所属する作戦局特務本部は、正規軍では都合の悪い不正規戦を専門とする組織だ。

メイヴィス達があくまでフローマス伯爵に仕える立場なのに対し

て、フレデリカ達は女王陛下直属とも表現出来る。

そのため軍務省に勤めるのは、エリート中のエリート。
爵位持ち上級貴族の人間が多い。

「お偉いさんって訳ですか。そいつは面白くない話っすね」

伍長の率直すぎる発言を、メイヴィスは聞き流したふりをした。
本来なら懲罰ものの失言だが、メイヴィスも本心では全くの同意
なのだから達が悪い。

しかし部下に同調して不満を増大させたところで、百害あって一
利無し。

少なくとも立場上は、軍上層部と上手く連携してみせる模範を示
す必要があった。

メイヴィスは足を止めると、わざとらしい仕種で肩を竦めてみせ
る。

「まあ、要は付き合い方ですよ。特務四課は、使徒教会の異端審問
官に相当する魔女狩り専門の部隊。残念ながら異端者や聖絶指定種
については、我々よりプロフェッショナル集団ですよ。せいぜいそ
のノウハウを学ばせてもらおうとしましょう」

おまけに付いてきた竜騎士の青年はともかく、フレデリカの実力
は本物だ。

ただの貴族令嬢じゃない。

好き嫌いで相手の能力を見誤るのは、愚か者のすることだ。

「ただし、これは我々の戦争です。他の誰にも譲るつもりはありま
せん。そのことを忘れたら、ぶち殺しますよ?」

「はッ。了解です！」

敬礼する部下を、メイヴィスは満足そうに眺めた。

軍務省がどれだけ現場に介入してきたところで、メイヴィス達の目的は微塵も揺るがない。

ローアンの魔女の首を獲る。

それだけが目的だ。

結果的に目的を達成できるのなら、手柄など軍務省にくれてやっても構わなかった。

第2話 - 04 カントリーハウス3

「くはーっ、この愛くるしさは反則だね！ 男の子だというギャップがまた、ポイント高いよ！ ヘイウッド家の使用人なんて辞めて、是非、我がショーター家に来たまえ！」

「はうあーっ、くすぐったいのデスよ！」

フレデリカ先輩にすっかり気に入られたシャルロが、抱きつかれて全身もみくちゃにされる。

シャルロが男の子ということは、これはもう立派なセクハラではないだろうか。

羨ましい。

先輩がシャルロをいつまでたっても離さないという小さなトラブルはあったが、現場検証そのものは滞りなく終わった。

後の調査はメイヴィス達に任せると、コリン達は騎士団の手配してくれた馬車に乗り込んだ。

コリン達の馬や積荷は、後で騎士団が回収して屋敷まで届けてくれるという。

馬車で小一時間ほど揺られていると、車窓の景色が混沌とした貧民街から閑静な高級住宅地、そして緑豊かな庭園へと移り変わっていく。

やがて青い屋根をしたカントリーハウスの前に辿り着いた。

停まった馬車からまずはシャルロが飛び降りる。

続いてシャルロにエスコートされながら、フレデリカとコリンも馬車を降りた。

「ふむ。ボクは久しぶりに来たけれど、相変わらず素敵なデザインの館だ」

「住みやすそうなカントリーハウスですね。うちの実家なんて、城塞スタイルだから見た目だけで息苦しくなっちゃいますよ」

「君のところは年季が入っているからね。帝国本島にも戦乱の時代があったことを示す、貴重な歴史的建造物だよ。見学するには興味深いけど、ボクなら住みたいとは思わないね」

「先輩の実家だって、似たようなもんじゃないですか」

ヘイウッド邸は、帝国内でも比較的新しい部類に入るカントリーハウスだ。

住みやすさを最優先した造りからは、平和な時代に設計されたことが良く分かる。

白塗りの外壁に、青い屋根。

シンプルで爽やかな印象を与える外見は、古い城館にありがちな威圧感など全くない。

若草色に覆われた周りの景觀に良く調和していた。

「あれ？ 出迎えがないなんておかしいデスね？」

ドアノッカーを叩きながら、シャルロが小首を傾げた。重ねてノックを繰り返す。

やがてドタバタと物音がして、ようやく扉が開かれた。中から姿を現したのは、女性にしては長身のメイドだった。長い髪をサイドアップにまとめている。

肩で息をしながらも、彼女は営業スマイルを浮かべてお辞儀をし

てみせた。

「い、いらっしやいませ、フレデリカ・ショーター様。それにコリン・イングラム様も。お待ちしておりました、どうぞお入り下さい」

メイドに招かれて、コリン達は玄関ホールへ足を踏み入れた。

ホールは吹き抜けになっていて、開放感を演出している。

正面には大階段が据えられていて、来客者を二階の客間へと誘っていた。

コリンの背後で、メイドとシャルロがひそひそと言葉を交わす。

「ちょっとシャルロちゃん、到着するの早すぎない？ 東街区まで迎えに行っただけの、ミスタと一緒にじゃないの？」

「あは。だからスージーお姉ちゃん、そんなに慌ててたのデスね」

どうやらメイド達にとって、コリン達の到着は予定外だったらしい。

東街区にコリン達が現れたという第一報を聞いて、接客責任者であるバトラーは迎えに行ってしまったようだ。

騎士団の高速馬車でやってきたコリン達とは、入れ違いになってしまったというオチだろう。

「シャルロ！ ようやく帰ってきたか！」

大階段の上から、少女の声がホールに響きわたった。

見上げると、ふわふわのフリルに彩られたドレスで身を包んだ女の子が駆け下りてくる。

流れるような金髪に、猫耳のようなリボン。

助走を付けた勢いのままシャルロに抱きつこうとした少女だった

が、ぎよつとしたシャルロがコリンの背中に慌てて隠れる。

「何故逃げる！」

「いやだってシェリー嬢様！ その手に持っているのは何デスカっ？」

完全にびびった様子で、コリンを盾にしながらシャルロが突っ込みを入れた。

シェリー嬢様と呼ばれたこの少女こそが、ヘイウッド家の当主代行。

随分と可愛らしい御主人様だった。

ストレートの金髪と、少し吊り目な翠の瞳は、いかにも貴族令嬢といった顔立ちだ。

鋭い質問を受けたシェリー嬢は、手にした乗馬用の鞭をきよんとした顔で見つめる。

「む？ お馬さんごつこの小道具だが？」

「何デスカ、そのSMっぽい遊びは！ 痛いのか嫌デスよ！」

「はー、シャルロはわがままだなー。しかしその程度のリアクション、私達は既に予想済みだぞ。仕方ない、馬役は私がやろう」

シェリー嬢が鞭をシャルロに手渡した。

何気なく受け取るシャルロ。

そしてシェリー嬢はくると背を向けると、小さなお尻をぐいぐいとシャルロに押し付ける。

「さあ！ 思いつきり叩くがいい！ 遠慮は無用だ！」

「何でーッ？」

涙声で叫ぶシャルロ。

しかしシェリー嬢は、むふーと期待に鼻息を荒くしながら、今か今かと一撃を待っている。

シャルロが何か言いたそうに、コリンを見上げた。

「いや、そんな目で俺を見られてもね？」

助けてあげたいのは山々だったが、状況がいまいち理解出来ない。やがて観念したように溜息をついたシャルロは、ほんの軽くシェリー嬢の小さなお尻を鞭で撫でた。

「あひゃんっ」

「へ、変な声出さないでほしいのデスっ。何だかわたしがえっちなことしてるみたいじゃないデスカ！」

シェリー嬢の過敏な反応に、シャルロが耳まで真っ赤になりながら狼狽える。

そんなお子様二人のやり取りを眺めていたメイドが、頭痛に耐えるような顔をしながら口を挟んだ。

「シェリーお嬢様、お客様が既に到着しています。お喜びになるのは分かりますが、少しでも自重して下さい。それにその鞭、一体どこで入手されたのですか？」

「うむ、リリから貸してもらったのだ。乗馬ごっこには必需品だと聞いてな。他にこんなのも借りたぞ！」

嬉しそうにシェリー嬢が取り出したのは、猿ぐつわだった。

メイドがこめかみに怒りマークを貼り付けたまま、凄味のある笑顔を浮かべる。

「シャルロちゃん、お客様の案内は任せていい？　あたしは別の仕事ができちゃった」

長身メイドから立ち上る殺気のオーラに、驚いたシャルロが目を丸くした。

止めるのは無駄だと判断したのだろう。

せめて死人が出るのだけは避けようと思ったのか、フロアの奥に向かって大声で叫んだ。

「リリちゃん逃げてー！ーっ！　本気で逃げてー！ーっ！」

途端に、大階段の陰に隠れていた子供メイドがひょっこりと顔を出す。

髪型をツーサイドアップにした、いかにも悪戯好きそうな少女だった。

「てへ。やりすぎちゃった？」

そしてそのまま、ドタタタと猛ダッシュで逃げていく。

「逃がすかーっ」

間髪入れずに雷光のような勢いで、長身メイドが少女の後を追った。

すっかり取り残された格好のフレデリカ先輩が、しみじみと呟く。

「ふむ。ボクも随分と変わり者だって言われるけどね。そんなボクから見ても、この屋敷の住人はおもしろい人間が多そうだ」

「あ、先輩。変わり者の自覚はあつたんですね」

先輩が無言でコリンの臍を蹴り飛ばした。

激痛に足を押さえながら、コリンが床を転がる。

「だ、ただ、大丈夫デスカっ？ 何だか凄い音がしたデスよ！ 包帯とかいるデス？ ミセスーっ、誰かミセスを呼んでーッーッー！」

「うわあっ、こいつ私のスカートを覗こうとしたぞ！ 変態かっ？」

「シェリー嬢様！ 足下へ転がってきたお客様の顔面を、そんな風に踏みつけちゃ駄目デスよっ！ 死んじやう！ コリン様が、死んじやうーッーッーっ！」

右往左往するシャルロ。

シェリー嬢に頭を踏まれて、顔面をカーペットに埋めるコリン。そんなコリンを涼しい顔で見下すフレデリカ先輩。

到着早々、何でこんな目に遭わないといけないんだろっ。コリンはあまりの理不尽さに、赤い絨毯を涙で濡らした。

第2話 - 05 カントリーハウス4

ヘイウッド邸の朝食室。

テラスからは星空の下に広がる夜の庭園を見渡せた。

白と水色を基調とした爽やかな内装で、豪華な大食堂で食事をするより肩が凝らない。

そのためヘイウッド家では、身内だけの食事は夕食でも専らこの朝食室で済ませてしまうという。

食卓に着いているのは、シェリー嬢、フレデリカ先輩、コリンの三名だけ。

確かにこの人数なら、朝食室で充分だろう。

本来は地元の有力者達を集めて夕食会を催す予定だったらしいが、先輩が事前に断っておいたらしい。

今回はショーター家の令嬢としてではなく、あくまで軍務省事務官として訪れているというのが建前上の理由。

本音のところでは、社交界的な付き合いが面倒だったと見える。その点はコリンも全くの同意だった。

兎のテリーヌ。レタスのコンソメスープ。カレイのムニエル。仔羊のゆで脚、ケッパーソース添え。フレッシュサラダ。カシスのシヤーベツト。カスタードタルト。

並べられたのは異国の様式が取り入れられたコースメニュー。

さすが貿易を生業としている領主の屋敷だ。

大味な帝国料理と違って、舌が肥えているはずのコリンも満足出来る味わいだった。

デザートの小皿も下げられて、食後の紅茶が淹れられる。

コリンの給仕には、唯一メイド服を着ていない女性使用人が付い

てくれた。

メイド達の管理責任者である、ハウスキーパーだろう。

一方、フレデリカ先輩の給仕には、背筋をピンと伸ばした初老の男性が付いている。

彼が接客責任者のバトラーだ。

ちなみにシェリー嬢には、シャルロがくつついて給仕をしていた。

もちろん使用人は給仕係の三人だけではなく、他のメイド達が忙しなく部屋を出入りしている。

料理や食べ終えた食器を運ぶのは、彼女らの役割だ。

美少女揃いなメイド達を見やって、フレデリカ先輩がふとした疑問を口にする。

「それにしてもこの屋敷のメイド達は、とても若い子が多いね。シャルロちゃんのような子供も働いているみたいだし、何か理由でもあるのかい？」

確かにそれはコリンも気になっていた。

とにかくヘイウッド邸の使用人は、年若い女性に偏っている。

コリンの実家に居たメイド達は、ベテランのおばちゃんも少なくなかった。

一般的なカントリーハウスでは、それが普通だ。

ヘイウッド邸の場合、女性最年長であるはずのハウスキーパーでさえ、見た目の年齢は二十代後半ぐらいに見える。

「理由というほどのことでもない。先代当主であるお爺様が、早々に引退してしまったからな。昔から仕えていた使用人達は、お爺様のいる別邸へ移ってしまったただけの話だ」

澄ました顔でシェリーが淡々と答えた。

玄関ホールでの騒動が嘘のように、今のシェリーは落ち着いている。

子供らしさをどこかに置き忘れてしまったかのように、大人ぶった姿勢を維持していた。

礼儀作法は完璧ながら、活き活きとしていたシェリーを見た後だと、どこか無理しているように見てしまう。

「それなら男手も足りなくて大変だろうね？」

「いや、特に困ってはいない。確かに今は社交シーズンで、父上と共に使用人の半数も、帝都へ出掛けたままになってはいるが」

フレデリカ先輩の唐突な台詞に、意図を掴みかねたシェリーが怪訝そうに眉を顰める。

ハイウッド邸に着いてから、屋敷内でコリンの見た男性使用人はバトラーたった一人だけ。

もちろん男の娘なシャルロちゃんも別枠なので、男性使用人としてはカウントしない。

だからと言って、ハイウッド邸のサービスに劣ったところは見当たらなかった。

メイド達だけでも、問題なく屋敷の運営は回っているように見える。

やばい。

この流れは、先輩が良からぬことを企んでいるパターンだ。

コリンの不安を裏付けするように、先輩はシェリーの反応をさらっとスルーして、話だけを先に進めた。

「ボクには一つ、気に病んでいたことがあってね。しばらくシエリ―殿のところに世話になるというのに、使用人のひとりも連れてこなかったのは、本当に申し訳なかった。ボクとしたところが、やや常識に欠けていたね」

フレデリカ先輩が常識を語り出すとか、食事に何か変なものでも混ぜていたのだろうか。

客先に長期滞在する時には、自分の身の回りの世話をさせるため、使用人を同行させるのが社交界でのマナー。

しかしそんな常識に捕らわれたことを、この先輩が気にするはずもない。

これは畏だ。

コリンの直感が囁く。

「だから提案なんだけど、うちのコリンを、使用人として引き受けてはもらえないだろうか？」

「異議あり！ ちょっと先輩、いきなり何を言い出しているんですかッ？」

コリンが挙手して、断固抗議した。

何か怪しいと思っていたら、やっぱりだ。

この先輩、とんでもないことを思い付きやがった。

もちろんコリンの反対意見に、先輩が耳を貸すはずもない。

援護射撃は、予想外の方面からやってきた。

「ミセス、どう思う？」

「とてもありがたいお申し出ですわ。フレデリカ様、お心遣いありがとうございます」

シェリーから発言を許可されたハウスキーパーのミセスが、にっこりと微笑む。

「ただ、コリン様には家事のご経験はあるのでしょうか？ 一朝一夕で身に付くものでもありませんし。ご本人もあまり乗り気でない様子。お嬢様、今回はお気持ちだけいただくということで、いかがでしょうか？」

いいぞ、もって言ってやってくれ。

もちろんコリンに、家事の経験などない。

コリンだけが特殊なのではなく、帝国貴族なら誰だって似たようなものだ。

ところがそんな反論で挫けるフレデリカ先輩ではなかった。

「あー、ちょっと物言いが恩着せがましかったね。言い直すよ。この屋敷でコリンに、使用人として労働者階級の生活というやつを経験させてほしいんだ」

先輩が切り口を変えて攻める。

コリンのことを指差しながら、それらしい説明を重ねていく。

「コリンは箱庭育ちの世間知らずでね。このままでは公爵家の後継者としては心許ない。何とかしてやってくれと、彼の父上からも頼まれているんだ。そのためには是非、ヘイウッド家にも協力してほしい」

「はあ。確かに以前は、貴族のご子息が使用人の仕事で社会経験を積むことは、一般的でしたわね。そのような理由でしたら、特にお断りする理由はありませんが」

「折れちゃった！」

この場で唯一の味方が、あっさりと引き下がる。

ハウスキーパーも、結局のところは市民階級ではない。

フレデリカ先輩のような上級貴族から強く頼まれれば、断れるはずもなかった。

後はもう、コリン達と同じ上級貴族の一員であるシェリーに期待するしかない。

「そうか。ミセスがそう言うなら、私は構わないぞ。フレデリカ殿の提案を受け入れよう」

「ありがとうシェリー殿。感謝するよ」

興味もなさそうに言い捨てたシェリーに、先輩が握手を求めた。

「どーいっつもりですか、先輩！」

くうるさいね。ボクには考えがあるんだ。自分の勉強のためだと思って、素直に受け入れておきたまえ。これは特務四課としての正式な命令だよ>

「うぐっ」

わざわざフレデリカ先輩が、声に出さないうで法術通信で釘を刺してくる。

何を目的としているのか、さっぱり検討が付かない。

とりあえず先輩がハウスキーパーに説明した内容が、嘘っぱちだということだけは確かだ。

命令と断言されてしまったのは、コリンに逆らう術はない。

「あは。それならわたしは、コリン様の先輩になるのデスね」

心の救いになったのは、シャルロの笑顔だった。

両手を合わせたポーズで、にこにこ嬉しそうにしている。

先輩の狙いは分からないが、あまりネガティブに考えても仕方ない。

唐突すぎる展開ではあったが、ここは割り切りが大切だろう。

「わかりました。経験不足は否認ませんが、どうかよろしく願います」

コリンは椅子から立ち上がると、シェリーやミセス、バトラーに頭を下げた。

帝国には二つの国民が居るという台詞は、誰の言葉だったか。階上の世界と、階下の世界。

コリンは階級社会という階段を、ゆっくりと下り始めた。

第2話・06 フロームス騎士団3

王国の夕暮れ亭は、東街区でもっとも繁盛していると評判のパブだ。宿屋や夜のサービスも兼ねているだけあって、規模も大きい。王国系移民が経営しているだけあって、食事の美味しさには定評があった。日の沈んだこの時間帯は、仕事を終えた労働者達で賑わっている。

そのパブには現在、物々しい一団が訪れていた。人目を引く彼らは、隠されるようにして素早く奥のVIP室へと通される。

「今月分の寄付です・どうぞお納め下さい」

不景気そうな顔をした中年の男が、皮袋を客人に差し出した。身につけた上等なスーツが、貧相な風体にはひどく似合っていない。男はこのパブのオーナーにして、東街区の移民街を縄張りとするマフィアの幹部だった。

「おや、先月より軽くありませんか？ 街中を回った様子では、それなりに景気は良さそうに見えましたけど？」

袋に詰まった金貨の重量を確かめながら、客人が言った。部下の兵士を引き連れて店にやってきた客人は、フロームス騎士団所属のメイヴィス少尉。ソファに座っているのはメイヴィス一人で、兵士達はその背後に立ってマフィア共に無言の圧力を掛けている。

受け取った金貨は、寄付という名の上納金。東街区では非合法なビジネスが横行している。その金の流れは膨大だ。しかし元が非合法なので、税金を取り上げるための根拠がない。

そこでマフィアの出番だった。蛇の道は蛇。金の臭いを敏感に察知する彼らの取り立て能力は、正規の徴税官などよりずっと優秀だ。マフィアの不法行為に目を瞑る、その代償がこの月々の寄付金だった。東街区には、こうした不文律のルールが数多く存在する。

メイヴィスに凄まれた幹部が、はは、と薄ら笑いを浮かべる。

「景気が良くなるのと、うちの収益はまた別の話ですから・最近

余所者が増えた上に、隣りのファミリーがうちのシマを荒らしてしましてね・こっちは商売上がったります・旦那のお力を借りることが出来れば、簡単に解決できる話なんですけどね？」

寄付金の増額と引き替えに、暗に協力を求める幹部。メイヴィスにはつこりと微笑んでみせた。

「そいつは愉快なお話ですね」

次の瞬間、テーブルの上のグラスが弾け飛んだ。身を乗り出したメイヴィスが、幹部の髪を鷲掴みにする。ぎりぎりと捻り上げられ、幹部の後退しつつある貴重な髪の毛が今にも引きちぎれそうだった。「マフィア間の抗争には不介入・それがルールでしょう？ 都合の悪くなった時だけ助けを求めるなど、ぶち殺しますよ？」

「ひいっ」

マフィアの暴力など、所詮はアマチュアレベルだ。戦争を生業とする騎士団にとつては、都合良く仕える手駒の一つでしかない。ただ、絞り上げすぎて潰してしまつのも、何かと面倒だった。メイヴィスは幹部の薄い頭髪から手を離すと、出来るだけ柔和な笑みを浮かべてみせた。

「まあ、魚心あれば水心とも言います・こちらの件で協力してもらえれば、寄付金については相談に乗ってあげましょう」

「はは、そいつはどうも」

乱れた髪とスーツを整えながら、引きつった顔で幹部が応じる。そうしてメイヴィスが差し出したのは、真新しい似顔絵だった。賞金首のチラシ。殺害された絵描きとは違う、別の女性の顔が描かれていた。記載された賞金額を見て、幹部がごくりと唾を飲み込んだ。

「賞金はフローマスからだけではありません・軍務省、聖書教会からも、別々に提供されます・中型の商船ぐらいなら、軽く買えますよ・夢があると思いませんか？」

「悪夢ですね」

幹部が額に冷や汗を浮かべながら呻く。さすがはマフィアの金庫番金額だけに目が眩むことがなく、想定されるリスクを正しく推測し

ていた。

「ローアンの魔女・伝説ならオレも聞いたことがあります・そんなお伽噺を相手に、オレ達に何をしろと？ 旦那にはオレが教会の祓魔師にでも見えましたが？」

「お伽噺ではありません・実在する聖絶異端種ですよ・何も貴方達に退治しろと言っている訳ではありません・ただ、情報を集めてくれればそれで構いません・居所さえ掴んでくれたら、そこに書かれている金額の十分の一を支払います」

「こんな大物が、東街区に潜伏していると？ 例の連続騎士襲撃事件の絡みですか」

「詳しく説明しましょう」

メイヴィスはローアンの魔女について、幹部に説明をする。似顔絵に描かれたのは、五年前の姿であること。当時の姿は大人の女性で、攻城戦の際に片眼を失っていること。現在は姿を変えている可能性が高いこと。通常の竜騎士法術程度では太刀打ち出来ないこと。話を聞くほどに、幹部の顔色が悪くなっていく。

「もちろん協力は惜しみません・しかしこの件なら、オレ達よりも自治会の方が適任では？」

東街区は微妙なパワーバランスの元に成り立っている。建前上の統治者であるフロームス騎士団は、間接的にしか関わっていなかった。代わりに住民間のトラブルを処理しているのが、小地区を縄張りとする数多くのマフィア組織だ。ここの幹部もそうしたマフィア構成員の一人になる。

さらに自治会というものが別に存在していた。聖絶指定種の保護特区という側面を持つ東街区を、そちらの方面から治めているコミュニティだ。メイヴィスも全容を掴めていないが、会員の多くが異端者級の化け物だという。幹部も指摘する通り、今回の件には彼らの協力も不可欠だった。

「もちろん自治会にも声は掛けます・ただ、彼らは単独行動の傾向が強く、組織への帰属意識が薄いですから・こうした情報収集には

不向きでしょう」

さらに騎士団との繋がりも弱い。どちらかと言えば、教会やフレデリカ達の専門分野だろう。幹部は受け取った賞金首のチラシを部下に渡すと、話をまとめてに掛かってきた。

「とりあえず義眼にしている可能性も含めて、隻眼の女性を捜してみます・他の手掛かりは、五年前から連続襲撃事件が始まった頃までの間に、この街にやって来た人物ってところですか」

「期待していますよ」

「誠意ある対応をお約束しますよ・それではお互い、良いビジネスを」

握手はない。

メイヴィスは立ち上がると、兵士達を連れて部屋を後にする。しかし、言い忘れていたことを思い出し、足を止めて振り返った。

「そうそう、もう一つだけ・現在、この街にはショーター家のご令嬢がいらっしゃっています・目的は私達と同じく、ローアンの魔女の首・近いうちにこの店にも来るでしょう・せいぜい気を付けることです」

「ご忠告どうも」

「彼女に比べたら、私達なんて可愛いものですよ」

フレデリカがどのように動くのかは、メイヴィスも興味があった。幹部が勘弁してくれという風に、天を仰いだジェスチャーをしてみせる。幹部にはせいぜい、苦労してもらうしかない。その結果、どれだけ彼の禿げが進行したところで、メイヴィスにとっては関係のない話だった。

第2話・07 メイド長1

夕食と入浴を済ませたコリンは、シャルロに屋敷内を案内してもらえることになった。

貴族の住まうカントリーハウスには、二つのエリアが存在する。コリン達がこれまで目にしてきたのは、屋敷における一部分ではない。

それとは別に、貴族階級の人間なら普段は立ち入らない区画があった。

表舞台と、舞台裏。

その二つは物理的にも、明確に区分されていた。

ヘイウッド邸もその例に漏れず、屋敷中の至る所にバックヤードへの入口が隠されている。

コリンにとっては使用人区画に入るだけでも、貴重な体験だった。好奇心が刺激される。

「すごい！ まるで秘密基地みたいだ！」

「あは、そんなにいいものじゃないと思うデスよ？」

シャルロに案内されながら、東棟にあるキッチンから地下階へと降りる。

バックヤード区画は、表のフロアとは別世界だ。質素という表現が一番ぴったりする。

内装は実用性とコストを最優先。

絨毯はもちろん、壁紙すら貼られていなかった。

「この薄暗さが雰囲気出てるね！ でもこれ、仕事する時に支障ないの？」

「んー、わたし達には普通なん德斯けどね」

地下フロアは半地下構造になっていて、一応は天井近くに採光用の窓は付いている。

しかし日の沈んでしまったこの時間帯では、わずかに灯されたランプの光だけが頼りだった。

「さて、ここが使用人ホールなの德斯よ」

階段を下りてすぐに位置する大部屋は、使用人達の食堂を兼ねているだけあって、広さはそれなりにある。

中で待っていたのは、コリン達がヘイウッド邸へ到着した時に、出迎えてくれた長身のメイドだった。

「スージーお姉ちゃん、コリン様をお連れした德斯よ」

「お疲れ様。案内ありがとうございます」

スージーと呼ばれたメイド長が、暖かみのある笑顔でシャル口に労いの言葉を掛ける。

それから表情を仕事モードに切り替えると、コリンに向かって優雅に一礼してみた。

「ご足労ありがとうございます、コリン様。あたしは当家でメイド長を務めさせていただいております、スージーと申します」

オーソドックスなメイド服。

長めのロングヘアを、サイドテールにまとめていた。
とにかく足が長い。

腰の位置の高さが、ファッション雑誌のイラストみたいだ。
胸の厚みがやや足りない点を除けば、スタイル抜群の美人さんだった。

「話はミセスから聞いております。使用人生活を体験されたいということで、承知致しました。ご要望などありましたら、何なりとお申し付け下さい」

コリンは何となく違和感を覚える。

礼儀正しいスージの対応には、全く文句の付けようがない。
しかし、同じ使用人仲間を相手にした態度とも思えなかった。
あくまでコリンのことは、客人として見なしているようだ。

フレデリカから言われたセリフが頭に浮かぶ。

「いいかい、コリン。君が使用人になる目的はね、身も心も労働者階級の人間に成り切ってもらったためだよ。特務四課の班員として、そろそろ君にも複数の顔を使い分けてもらいたい。大切なのは、相手と同じ目線に立つことだ。この経験は将来、君が公爵になった後にもきつと役に立つはずだよ」

急に使用人になれと言われた時は、単なる嫌がらせじゃないかと疑いもした。

しかし先輩もそれなりには考えていたらしい。
とにかく最初のミッションは、このメイド長と打ち解けることだ。
そのためにも先ず、緊張を解いてもらわないといけない。

コリンはその場で膝を付くと、恭しくスージの手を取ってみせ

た。

そしてそのまま、手袋に優しく口付けをする。
コリンにとっては、最大級に敬愛の意志を示したつもりだった。
顔を上げると、につこりと爽やかな笑顔を演出する。

「お会いできて嬉しく思います、ミス・スージー。これからしばらくお世話になります」

しかしスージーのリアクションは、完全に予想外。

「ひいつ、きもいッ！」

ぞわぞわっと身震いしたスージーに、コリンの手は乱暴に振り払われてしまった。

隣ではシャルロも、目を丸くしている。

何か失敗してしまったのか？ スージーは手袋を脱ぐと、ぺしゃりとコリンの顔面に投げつけてきた。

おかしい。

確か手袋を投げつけるのは、決闘を申し込む時の正式な作法だったような気がする。

「有り得ないからッ！ あーもう、最悪！ まだ寒気が収まらないわ！ 何なのこいつ、生理的に受け付けられないんだけど！」

「お姉ちゃん、お姉ちゃん！ 本音がただ漏れになってるデスよ！ 深呼吸するのデス！」

慌ててシャルロがフロアに回る。

スージーは何故か、かなりの大ダメージを負った様子だった。
シャルロに渡された水の入ったグラスを受け取りながら、スージー

ーがぶつぶつと何事が呟く。

「ありがとう、シャルロちゃん。大丈夫、あたしはやればやれる子よ。これぐらいの試練、見事に克服してみせるわ……！」

「その意気なのデス！ 頑張るのデスよ！」

まるでコリンが何か悪いことをしてしまったかのような。
淒くこの場に居づらい。

スージーは呼吸を整えると、意を決したように再び姿勢を正してコリンに向き直った。

「話はミセスから聞いております。使用人生活を体験されたいということで、承知致しました。ご要望などありましたら、何なりとお申し付け下さい」

「何事もなかったことにされたー……ッ？」

「はい？ どうかされましたか？」

につこりと微笑むスージー。

作り笑い感が半端ない。

営業スマイルが痛々しすぎて、見ているこっちが辛かった。

「いえ、あの、ご迷惑お掛けしてしまってるみたいで、本当すいません」

ぺこりと頭を下げるコリン。

何か言いたそうなスージーだったが、必死に言葉を飲み込んでいる。

コリンは手招きしてシャルロを呼ぶと、耳元でこっそり尋ねてみた。

「あのさ、何となく俺、あのメイド長に嫌われてない？」

「え？ あれ？ ま、まさか、そんなはずがないのデスよ？ あはははは」

目線を泳がせながらシャルロが答える。

嘘の付けない良い子だった。

そんなところもいちいち可愛い。

男の子なのが本当に残念だ。

そしてどうやら最初のミッションとして、スージーはかなり手強い相手らしいということも分かった。

何か作戦を考えないと、すぐには心の壁を開いてくれそうにはない。

「そうだシャルロちゃん。コリン様をベッキーのところに連れて行ってくれない？ 新しい制服を用意させてあるから。そいつと同じ空気吸ってたら、本当に気持ち悪くなってきたわ。早いところ、さっさと外に連れ出しちゃって。その間にあたしも立て直すから」

「聞こえてるからね？ というか本音を隠すつもり、実はないでしょ？ 俺、泣いちゃうからねっ？」

「いえ、お気になさらず。コリン様には申し上げておりませんので」

「その理屈は無茶すぎる！」

「あは。それじゃコリン様の制服を取りに行くのデスよ」

後味の悪さを残しながらも、コリンはシャルロに背中を押されながら使用人ホールを後にした。

第2話 - 08 メイド紹介1

使用人ホールを追い出されるようにやってきたのは、ヘイウッド邸の洗濯室だ。

かき混ぜ棒付きの洗濯槽に絞り器、アイロン台といった様々な用具が所狭しと並んでいる。

屋敷で使用する熱湯を供給するための、ボイラーも設置されていた。

「そつえばさ、シャルロちゃんって男の子なんだよね？」

「もちろんなのデスよ」

何故か得意気に胸を張るシャルロ。

もちろんという表現には、かなり強い抵抗がある。

「だったら何で、メイド服を着てるの？　ずっと疑問だったんだけど」

「あは。それは単に、わたしのサイズに合う男の子向けの制服がないからなのデス。本当ならわたしも、ちゃんとしたテールコートがほしいのデスけど」

「騙されてるーッ！　それ絶対に、シャルロちゃんにメイド服を着せるための口実だから！　ヘイウッド家ぐらいの規模なら、制服を仕立てるお金ぐらいケチらないって」

「だけとお屋敷によっては、制服って支給してもらえなくて自分の費用で用意するものデスから。贅沢は言えないのデスよ？」

おそらくは当主代行であるシェリーの仕業。

シャルロに女装させて喜ぶなんて、まだお子様だというのに何という変態淑女だろうか。

しかしコリンとしても、その方針には大賛成だった。

コリンの財力でもテールコートをプレゼントしてあげるぐらいは容易いが、ここはシェリーに便乗しておく。

シャルロのメイド服が見られないなんて、絶対に嫌だった。

「それにしてもここの洗濯室、誰も居ないね。時間帯にもよるんだろうけど、俺の実家ならもつと騒がしい場所なんだけどな」

器具だけは揃っているが、人の気配がない。

部屋から回収されたと思われるシャツも、隅に置かれたままだ。

アイロン台に置かれているのは、シャツ類ではなく新聞紙。

インクを乾かすための作業に使ったのだろう。

「それはねっ、うちでは洗濯の大半は、外注さんをお願いしているからさっ」

澁刺とした声に顔を向けると、ふわふわのドレスを山ほど抱えたランドリーメイドが、向かいの衣装室から出てくるところだった。

ぼふつと中央の作業台にドレス類を放ると、メイドは片手を上げて自己紹介をする。

「や！ おいらはベッキー。ハイウッド邸のランドリーメイドさつま、そんな肩書きは名目だけで、実際は裁縫や帽子作りをしている方が多いけどね！」

ボーイツシュで澁刺とした女の子だった。

耳にかかる程度の長さで短くカットした栗色の髪に、眼鏡を掛けている。

帽子作りなど本来ならレディーズメイドの仕事。

しかしシャルロの解説によると、ハイウッド邸における衣服の管理は、全て彼女に一任されているということだった。

ベッキーは手慣れた様子でメジャーを引き出すと、コリンに向けて、にかつと笑ってみせた。

「君がコリンくんだね？ スーギーくんから聞いてるよつ。軽く採寸するから、ちょっと脱いでくれる？」

紳士に向かっていきなり脱げとは、まるでフレデリカ先輩みたいだ。

学生時代のコリンなら、年頃の娘にそんなことを言われたら赤面してしまうシーンだろう。

しかし先輩のおかげで、コリンの羞恥心は鋼のように鍛えられた。一片の躊躇もなく、ぶわつと優雅に上着を脱ぎ捨てるコリン。

ダンスでも踊るかのような仕種でベルトを引き抜き、ズボンに手を掛けたところでベッキーが制止の声を上げた。

「いやいや！ 全裸になってくれとは言っていないからね！ シャツとズボンはそのまま結構だよ！」

「あ、そうなの？」

「何でそんな残念そうな顔をするかな！ 君は露出すると興奮するタイプなのかいっ？ ほら、もういいから手を挙げて！」

万歳のポーズを取ったコリンの胸板に、ベッキーがメジャーを回

す。

ベッキーの頭が、コリンの鼻先に近づいてシャンプーの香りがふんわりとした。

抱かれるような姿勢になって、少し恥ずかしい。

「シャルロくん、読み上げた寸法をメモしてくれるかな！ 今日のところは既製品で我慢してもらうけど、近いうちにオーダーメイドで仕立てるからね！」

「オーダーメイド？ この屋敷ではみんなそうなの？」

「そんな訳がないさ、コリンくんだけの特例だよ！ スーギーくんからは、予算上限なしで注文されているからね！ おいらとしては男物よりメイド服の方が、デザインするのは楽しいんだけどさ！」

「何だか悪いね。シャルロちゃんなんて、既制服のサイズが合わないって困ってたのに」

他のメイド達も居る手前、自分だけが特別扱いというのは気が引ける。

かと言って断るのも失礼に当たりそうで、コリンとしては悩みどころだった。

「あは、わたしのことなら気にしないでもいいのデス。実はわたし、子供用のコートを自分でも買えるように、頑張ってお金を貯めてるのデスよ。もちろんまだ、布代にもなってないデスけど」

シャルロの気遣いが、逆に切ない。

コリンにとっては端金でも、シャルロ達のような労働者階級の人間にとっては服の値段というのは大金だ。

特にヘイウッド邸という格式に見合うだけの制服となれば、それなりの上等品。

シャルロの給料で何ヶ月分になるのか、金銭感覚に疎いコリンには想像も付かなかった。

「そんなシャルロに、私からプレゼントだ！」

明るい声に振り向くと、洗濯室の入り口に金髪碧眼の少女が立っていた。

フリルのドレスに猫耳っぽいリボン。

ヘイウッド邸の当主代行であるシェリーだ。

シャルロにメイド服を着せて喜んでいる張本人でもある。

夜も更けてきたというのに、元気いっぱいだった。

「シャルロの男装趣味は、前から知っていたからな。密かにベッキーに命じて、作らせていたのだ。ベッキー、もう出来ているのだから？」

「もちろんさ！ おいらはこれでもプロだからね、一度約束した納期は守るよ！」

「何故そんな余計なことをしたーーーーーッ！」

シェリーに裏切られた思いで、コリンが涙声を上げた。

そんなことをすれば、シャルロのメイド服が見られなくなってしまふ。

横槍を入れられた格好のシェリーが、不愉快そうに片眉を動かす。

「何だ、コリン殿も居たのか。貴殿の懸念も分からないではないが、まあ、私に任せておけ」

「おやおや、シェリーちゃんは何を言っているんだい？ 俺は別に、シャル口ちゃんのメイド服が見られなくなることを、残念がったりはしてないよ？」

表向きは紳士のふりを忘れないコリンだった。

「わあ、とっても嬉しいのデスよ！ シェリー嬢様、ありがとなのデス！」

「シャル口に喜んでもらえると、私も嬉しい。ほら、早く着て私にも見せてくれ」

ベッキーに連れられて、うきうきとした足取りでシャル口が向かいの衣装室に引き込む。

ところがベッキーだけが、黒のテールコート一式を持って洗濯室に戻ってきた。

「危うく忘れるところだったよ！ はい、これがコリンくんの制服さ！ とりあえずは仮だけどね！ 適当にぱつと着替えておいておくれ！」

そして再び衣装室に消えてしまった。

もそもそと使用人服に着替えるコリン。

隣には期待に目を輝かせるシェリーが居たままだったが、コリンの存在など最初から眼中にない様子。

シェリーの視線は、シャル口の出ていった扉に釘付けになったままだった。

「さあつ、お待ちかね！ シャル口くんの、新作衣装のお披露目だ

よ！」

ババーンっと効果音を口にしながら、ベッキーが洗濯室の入り口を開けた。

一拍置いて、着替えたシャル口がもしもし内股で恥ずかしそうに姿を表す。

「キターーーーーーッ！」

「こ、これは……っ」

歓声を上げるシェリー嬢と、息を飲むコリン。

衣装デザイナーでもあるらしいベッキーは、得意気な顔をしてシャル口の隣で胸を張っていた。

シャル口の新しい制服は、確かにズボンタイプ。

ただし、ギリギリまで丈を短くした短パンに、ニーソックス。

シャツは胸元を辛うじて隠すばかりで、おへそが覗く大胆なデザインだ。

「おかしいデスよねっ？　これ、わたしが思ってたイメージと全然違うのデスよっ？　明らかにメイド服の時より、露出が増えちゃってるデスから！」

「うはーーーーっ、たまらんな、これは！　ベッキー、ナイス仕事だ！」

「もちろんさ！　何しろおいらの自信作だからね！　シャル口くんという最高の素材を活かす仕事ができ、おいらも誇らしいよ！」

「コンセプトからして大間違いなのデスよっ？ コリン様から何も言ってやってほしいのデス！」

「え？ ああ、うん。とっても男らしいと思うぜ！」

親指を立てて、ばっちりウィンクするコリン。

「嘘つきさんデスー！ー！ やっぱりわたし、着替えてくるのデス！」

「ああーっ、何でー！ーっ？」

羞恥に耳まで真っ赤になったシャルロが、衣装室へと逃げ込んでしまう。

再び姿を現した時には、すっかりいつものメイド服姿に戻っていた。

疲れきった様子で、ぼつりと呟く。

「シェリー嬢様に期待したわたしが、浅はかだったのデス。やっぱり地道にお金を貯めて、自分で制服を買うのデスよ」

「何ということだ！ ベッキー、どうやらまた失敗したようだぞ！」

「うーん。なかなかシャルロくんのご要望は難しいね！ まあ、次があるさ！」

「次はないのデスよ！ というかこれでわたしの制服、何着目デスかっ？ いい加減、もったいないのデス」

男物の制服を持っていないシャルロだったが、メイド服だけは何

着も所有しているらしい。

後で聞いたところによると、屋根裏にはシャルロ専用の衣装部屋もあるという。

ただ、ほとんどの服が一度着られたきりで、二度と出番はないようだ。

「だったら着たらいんじゃないかな！　その方が服だって喜ぶよ！　シャルロくんは贅沢ものだね！」

「うう。ならせめて、リリちゃんやエリカちゃん達にあげてほしいのデス」

「そいつは難しい相談さ！　リリくんは古着屋に売っ払おうとするし、エリカくんは恥ずかしがって着てくれないからね！　何ならシャルロくんが、リリくん達を説得してくれたらいいよ！」

「リリちゃん達でさえ着ない服を、わたしに着せないでほしいのデス！」

どうやらシャルロが希望する制服を手にするのは、かなり先になりそうな様子だった。

しばらくはシャルロのメイド服姿を愛でることが出来そうで、コリンは安堵する。

落ち着いたところで、コリンはふとした思い付きを口にしてみた。

「ところでさ、俺も使用人服に着替えてみたんだけど、どうかな？　似合う？」

「黒いな。ああ、シャツは白いか」

「既制服だけど、生地と仕立ては悪くないね！　流石は一級品だよ！」

コリン本人の存在自体には、興味ゼロの女性二人だった。

「あは、わたしはとってもお似合いだと思っのデスよ？」

取って付けたようなシャルロのフォローが、空しく聞こえる。
落ち込むコリンの耳に、ジャラリと鍵束の音が響いた。
その音にびくりと反応したのは、シェリー嬢だ。

「あら、お嬢様。こちらにいらっしやったのですね。もうお休みの時間ですわ。さあ行きますわよ」

につこり微笑を浮かべた、パーラーメイドのミセスがそこには立っていた。

言い訳をしようと口をばくばくとさせたシェリー嬢だったが、やがて力なく項垂れると、すぐごとミセスに付いて出て行ってしまった。

去り際に名残惜しそうに振り向いてきたが、シャルロの完璧な笑顔に弾かれてしまう。

「シェリー嬢様、おやすみなさいなのデス」

「うつ、シャルロの薄情者」

少しだけシェリー嬢が可哀想に見えた。

コリンも子供時代は、ナースメイドに厳しく躾けられたものだ。

「さて、コリン様の制服も用意出来ましたし、わたし達も寝る用意

をするのデスよ」

「そういえば俺って、どこで寝たらいいんだろう？」

「んー、コリン様用の客室も、事前に用意はしてあったのデスけど」

しかしもちろんそれは、客人向けの豪華な部屋なのだという。

まさかコリンが使用人の仲間入りしてくるとは、完全にシャルロ達にとっても予定の範囲外。

今頃はメイド長が、慌ててコリンのための部屋を選んではずだとシャルロが説明してくれた。

第2話 - 09 メイド長2

使用人ホールに戻ってみると、メイド長は先程の動揺からすっかり立ち直っていた。

いかにも瀟洒なメイドさんという雰囲気だ。

とてもコリンに手袋を投げつけた人とは、同一人物とは思えない。

「コリン様のお部屋をご案内する前に、少々立ち入ったご質問をさせていただいても宜しいでしょうか？ 色々と気を配るのにも疲れたので、もうストレートに聞いてしまおうかと」

「はあ、それはもちろん構いませんけど」

表向きは丁寧な物腰なのに、投げやりっぷりが隠し切れていないメイド長だった。

「えー、コリン様は、フレデリカ様と恋仲という認識で宜しいんですよね？」

「ねー！ーよッ！ なにその発想、気持ち悪い！」

コリンは脊髄反射的に叫んでいた。

ちらりと想像しただけでも、血の気が引く。

「本当に勘弁してくれないかなッ？ 俺と先輩との間に、そーいうのは一切ないから！ どっちかと言うと俺の位置付けは、先輩の保護者とかそんな感じだよ！ 危なっかしい娘を見守る、お父さんのな？」

<人がいないと思って、好き勝手言うのは止めたまえ！ 誰がボクのお父さんだよ！>

脳裏に響くフレデリカ先輩の怒声。

どうやらコリンの聴覚情報に、接続したままだったらしい。

割り当てられた客室に居る先輩の怒りが、地下室の使用人ホールまで通信法術でダイレクトに伝わってきた。

「先輩、俺の感覚に無断で接続するの、止めてもらえませんか？俺にも気の休まる時間ってやつが欲しいんですけど」

<は！ 君にそんな時間がある訳ないだろう！ とにかく君の暴言については、深くボクの心に刻みつけておいたからね。後で覚えておくといい>

ぶつり、と通信法術が一方的に切断される。

しかし監視されているような視線は、相変わらず背中中に貼り付いたままだ。

こんな化け物みたいな相手に、恋愛感情を抱くなど有り得なかった。

そんなコリンの反応を見て、メイド長が残念そうに視線を落とす。

「そうですか。一応はフレデリカ様の隣の部屋を用意してあったのですが。ドントディスターブカードを掛けておいてもらえれば、お二人の邪魔も致しませんし」

「いらない気遣いすぎる！」

「それでは本当に、私共と同じ使用人部屋で宜しいのですね？ 貴族育ちのコリン様にとっては、決して寝心地も良くありませんし、

何かとご不便かと思えますよ?」

「ここまで来て、悪あがきはしないよ。こうなったら徹底的に、同じに扱ってくれていいから」

「いや、そんなに強がらなくてもいいんですけど。まだ引き返せませんからね?」

やけに抵抗するメイド長だった。

正直なところコリンは、貴族にしては質素な環境への耐性に自信がある。

学生時代は寄宿学校での集団生活だったし、卒業してからフレデリカ先輩に連れ回されて野外サバイバルの経験も少なくはなかった。

まさか廊下で寝るなどとは言われないだろうが、ある程度までの覚悟は出来ている。

コリンの意志が変わらないと見ると、メイド長は諦めたように溜息を付いた。

「分かりました。仕方ありません。それではコリン様は、シャルロちゃんとの相部屋でお願いします」

「……え?」

「わあ、それは素晴らしいデスよ! これで何時でも、わたしと一緒にデスね!」

笑顔を輝かせるシャルロ。

コリンはと言うと、いまいち理解が追いついていなかった。

「あれ？ え？ ちょっと待って、それってマズくね？」

「もちろん、あたしとしては大反対です。しかし残念ながら、男性使用人の部屋割りにはバトラーであるミスタの管轄ですから」

女性使用人と男性使用人とは、指揮系統が違う。

そしてメイド長は、女性使用人の中間管理職だ。

ミスタの采配には口が挟めないらしい。

メイド長が心配そうな顔をして、シャルロの頬を優しく撫でる。

「ごめんね、シャルロちゃん。阻止してあげられなくて。何かあったら、すぐにあたしに言うのよ」

「あは、くすぐったいのデスよ。それにわたしは、人数の関係ですつと一人部屋だったデスから。ルームメイトが出来るのは本当に嬉しいのデスよ」

名残惜しそうにシャルロの頬から手を離れたメイド長は、きつ、と親の敵でも見るような目付きでコリンを睨み付けてきた。

「いくらシャルロちゃんが可愛いからと言って、いかがわしい行為に及んだら許しませんからね。いくら貴族様でも、不慮の事故があるということ覚えておいて下さい」

「そんなことしないから！ あとマジな目で脅すの止めてくれないかな！ 本気で怖いから！」

メイド長の目付きが殺る気満々すぎる。

とりあえずコリンが全く信用されていないことだけは良く分かつ

た。

フレデリカ先輩からは、労働者階級の人間に成り切るためにも、メイド達と早く打ち解けるようにと指示をされている。それは初っ端から、かなり難航しそうだった。

明日から頑張ろう。

コリンは自分に言い聞かせた。

第2話 - 10 カントリーハウス5

ヘイウッド家では、女性使用人の部屋は使用人ホールと同じ半地下フロアに配置されている。

メイド達のことを、階下の人々と呼称する由来がここにある。ちなみに男性使用人の部屋は屋根裏。

シャルロに案内されて、コリンは男性使用人区画まで上がってきた。

「さ、どうぞ。遠慮なく入ってくださいデス！」

「失礼しまーす」

騎士団が運んできてくれた自分の荷物を部屋に持ち込む。

とてもシンプルな部屋だった。

屋根裏ということで壁の一部が傾いており、慣れるまでは圧迫感を覚えてしまう。

ただし出窓が付いているので、採光や換気の面では地下室より恵まれていた。

贅沢は言えない。

今も月の光が射しているおかげで室内は明るく、満月の夜ならランプなしでも平気そうだった。

寝るためだけの場所という表現がぴったりする。

部屋にも本当に何もなかった。

スペースの大部分を占有しているのは、木製の二段ベッド。他には小さな机と、洗面台がひとつだけ。

壁にはシャルロのメイド服がひと揃いぶら下っていた。

コリンは持ち込んだ荷物から寝間着代わりのシャツを取り出すと、残りをベッド下の収納スペースへ放り込む。

テールコートを脱ぐと、それを壁の余っていたハンガーに掛けた。ふと見ると、シャルロも同様にメイド服から寝間着へ着替えようとしている。

「ッ？」

カチューシャとエプロンを外し、上着を脱ぐ。

そしてコリンの視線を気にすることなく、スカートもあっさりと外してしまった。

慌てて目をそらしたコリンだったが、一瞬だけ視界に入ったシャルロの肌色が網膜に焼き付く。

駄目だ。

男の子だと頭では理解していても、本能がその答えを拒絶していた。

「あ、そういえばコリン様。二段ベッドはどちらを使うデスか？」

メイド服を畳みながらシャルロが振り向いた。

アンダーシャツにパンツだけという、あられもない格好だ。

お願いだから、早く上に何か着てほしい。

とりあえずコリンのスペースは、下の一段目に決まった。

出来るだけシャルロの方を見ないようにして、ベッドに潜り込む。シーツを頭から被ると、ほっとコリンは息を付いた。

シャルロとの共同生活は、精神力を鍛えないと理性が崩壊してしまいそうだ。

「シャルロ！一緒に寝よう！」

勢い良く開いたドアから現れたのは、シェリーだった。

兎のぬいぐるみを脇に抱えて、目を爛々と輝かせて使用人部屋に躊躇なく足を踏み入れてきた。

寝間着に着替えていたシャルロが、目を丸くする。

「シェリーお嬢様、どうしたのデスカっ？」

「うむ！ なかなか寝付けなくてな！ シャルロと寝に来た」

「女の子がそんな無防備なことしちゃ駄目なのデスよ！ わたしだって男の子なんデスから！」

「え？」

「え？」

「とにかくご自分の部屋に戻って下さいなのデス！」

何とかシェリーを追い返そうとするシャルロ。

もちろんシェリーが聞く耳を持つ訳がなかった。

ずいずいと部屋に入ってくる。

「心配するな。前みたいにシャルロのシーツに入ったりはしない。空いてる方のベッドで寝かせてもらうだけだ。シャルロはどっちを使うのだ？ いや、夜這いなんてしないからな？」

「夜這いする気、満々デスよねッ？ って、何でいきなり脱ぎだしてるデスーッ？」

「寝るときは全裸に決まっているだろう！ それともシャルロは自分で脱がせる方が好きか？ ふふ、仕方ないな。リクエストには応えてやるっ」

「あ、シェリー嬢様、一段目のベッドには」

シャルロの忠告は間に合わなかった。

いそいそとベッドに入ろうとするシェリー。

しかしそこには既に、先客のコリンが潜り込んでいた。目と目が合う。

「ぎゃーーーーーッ」

「ぎゃーーーーーッ」

シェリーとコリンの悲鳴が、見事にハモった。

「ご機嫌モードだったシェリーが一転、顔を真っ赤にさせて狼狽する。」

半脱ぎだったパジャマの襟元を慌てて隠す様を見る限り、シャルロ相手以外では羞恥心も人並みにあるらしい。

「な、ななな、何でコリン殿が、この部屋に居るのだッ？ ここは私とシャルロの秘密の花園だぞ！」

「だってここ、俺の部屋みたいだし？」

「有り得ーーーーんッ、ミスタは何を考えているのだ！ そんなことが許されるなら、私だってシャルロと同じ部屋がいいぞ！ コリン殿、私と代われ！」

地団駄を踏みながら羨ましがるシェリー。

残念ながら、これはコリンの役得だ。

いくらシェリーが齒ぎしりをして悔しがったところで、代わってやることなど出来ない。

シャルロが何とかシェリーを宥めようとしていたところへ、勢い良くドアが開き、さらに二人のパジャマ少女が現れた。

「やつほー！ シャルロちゃん遊びに来たよー！」

「ごめんね、迷惑だよ。でもリリちゃんがどうしてもって強引に」

サイドアップの元気な女の子と、気の弱そうなくせつ毛の少女。年の頃はシャルロやシェリー達とほとんど変わらない。

みんなお目当てはシャルロのようだった。

コリンがロリっ娘好きな変態でなくて良かった。

おかげで女の子に囲まれたシチュエーションにも取り乱すことなく、紳士的な対応が出来る。

コリンは片手を挙げると、爽やかに挨拶をした。

「やあ、こんばんは」

「ぎゃーーーーーーッ！ 変な人が居るーーーーッ？」

元氣一杯に入ってきた女の子が、コリンの存在は完全に予想外だったらしく悲鳴を上げる。

氣弱そうだった方の少女などは一目散に逃げていつてしまった。慌てたのは取り残された元氣娘だ。

「エリカちゃん、逃げるの早ッ！ シャルロちゃんまたね！ 撤退ーッ」

「ちょ、待つのだ、リリ！ 私を置いていくな！」

釣られるようにしてシェリーも、パジャマ少女達を追い掛けて部屋から退散してしまった。

騒がしい女の子達だった。

男の子であるはずのシャルロの方が、よっぽどお淑やかなのはどういうことだろう。

開いたままになったドアが、ぎいぎいと揺れる。

片手を挙げたポーズのまま固まったコリンが、顔を引きつらせた。

「コリン様っ、すごいデスよっ！」

胸の前で両手を合わせたシャルロが、尊敬の眼差しでコリンを見上げる。

「リリちゃん達を、目を合わせただけで撃退しちゃったのデス！いつもスージーお姉ちゃんが来るまで、絶対に帰らないのに！コリン様が居てくれれば、いたずらに怯えることなくぐっすり安眠なのデスよ！」

シャルロが喜んでくれるのは嬉しい。
嬉しいがしかし、純粹には喜べない。

「俺ってそんな、怖がらせるような顔してるかなあ？」

思わず泣いてしまいそうだった。

こんな調子で明日からの使用人生活は、本当に大丈夫なんだろう
か。

おやすみの挨拶を交わし、シャルロがランプを消す。
使用人の夜更かしは推奨されないし、明日の朝も早い。
不安を抱えたまま、コリンの夜は更けていく。

窓から聞こえる微かな森の音。

ヘイウッド邸は緑に囲まれた静かな環境だ。

シャルロはすぐに寝入ってしまう。

その寝息や衣擦れの音が気になって、コリンが全く寝付けなかつ
たのは、ある意味で幸せだった。

第3話・01 回想（帝歴261年冬）

火の回りが意外と早い。

城館に火を放ったのは、守備側であるはずのローアン騎士団だ。むざむざ帝国軍の手に渡すぐらいなら、という事だろう。消火活動に法兵連隊の大部分を回す。

この火災で一体どれだけの損失が出ることか。頭の中で試算したウィルは、うんざりして顔をしかめた。

扉の前で、血煙を上げて敵兵が倒れる。

それなりに優秀な騎士だったのだろうが、覚悟だけでは埋められない力量差というものがある。

刃にこびりついた血を片腕で振り払った軍曹が、ウィルに道を空けた。

敵兵の屍を跨ぎながら、ウィルは書斎へと足を踏み入れる。

『お久しぶりです。ローアン伯』

奇跡的なことに、書斎までは火が回ってきていなかった。

壁一面の蔵書と、部屋の正面に据え付けられた机。

その椅子に座っているのが、城塞都市ローアンの領主だ。

戦火の直中だというのに、日常そのままの雰囲気ですべてを読んでいる。

戦いの騒音が、やけに遠く聞こえた。

『やあ、ウィル殿か。あと数ページなんだ。すまないが、少しだけ待ってられないか』

『ええ、構いませんよ。それぐらいの余裕はあります』

領主のページをめくる音だけが、静かに響く。

やがて読み終えたのだろう。

本を閉じた領主が、ゆっくりと顔を上げた。

『どのような本をお読みになっていたのですか？』

『ああ、ただの娯楽小説だよ。意外かい？ 私はこのシリーズのファンだね。完結まで見届けられないのが残念だ』

聖本が何かだと思っていたウィルは、少し意表を突かれる。

領主が見せてくれた背表紙に書かれたタイトルは、流行に疎いウィルでも知っている作品だった。

帝国で大ブームになっている怪奇冒険ミステリーで、王国語にも翻訳されているらしい。

『さて、久しぶりだね。開城交渉以来になるのかな？』

『そうですね。本当はもっと早くこの日を迎えたかったのですが。ローアン伯のおかげで、下準備に随分と手間取りました』

『まだ対話による交渉の余地はありそうかい？』

『いえ、現段階に至っては残念ながら。私共の開城勧告に従わないと、どのような結果を招くのか。そのことを他の諸侯達にも理解してもらう必要があります』

『だろうね。まあ、当然の判断だ。それではせめて、最期ぐらいは格好付けさせてもらおうか』

領主が立ち上がる。

そして机に立て掛けてあった、抜き身の大剣を掴んだ。

刃面に刻まれた法術回路に、領主の法力が注ぎ込まれる。

攻撃力向上のみに機能を限定した、簡易的な竜騎士法術の一種だ。

「軍曹。お相手をして差し上げろ」

「は」

ウィルの指示で、軍曹が一步、足を進める。

全身鎧の表面にはやはり、法術回路が刻まれていた。

ウィルが手帳のようなものを開くと、制御支援用の法術インターフェイスを展開する。

宙に光の軌跡が幾何学模様を描き出した。

帝国式の竜騎士法術は、二人一組での運用が基本だ。

天才と呼ばれる術士なら、コマンドをイメージするだけで術式制御する。

しかし、ウィル自身は、法術のスペシャリストという訳ではない。本来のパフォーマンスを十全に発揮するには、制御支援法術によるグラフィカルインターフェイスの助けが必要だった。

制御支援法術の展開は、それだけ本気で相手をするということの意思表示。

ところが領主には、その辺りが微妙に伝わらなかったらしい。決闘相手を心配するような台詞を口にした。

『大丈夫かい？ その竜騎士、かなりの重傷じゃないか』

『心配には及びません。確かにウィッチとの戦闘で受けたダメージは深刻です。しかしその事実を差し引いても、私の手札では彼こそが最強のカードですよ』

軍曹の有様は、正に満身創痍という言葉がぴったりだった。

鎧も傷だらけで、法術回路群の半分以上から応答がない。

鎧の中身も、立っているのが不思議なほどの重傷。

特に失われたばかりの左腕は、法術で強制的に止血しているだけの状態だった。

それでもなお、ウィルの指揮下に、彼を超える単体戦力は存在しない。

魔女殺し。

それが軍曹の二つ名だった。

『いざ！』

先に動いたのは領主。

彼の全身全霊を掛けた踏み込みは、軍曹にとって哀しいほどに稚拙だった。

領主の優秀さは政治力で評価されるべきであり、個人の武勇としては一般人の域を出ていない。

命のひとつやふたつを引き替えにしたところで、軍曹との絶的な力量差は覆りようがなかった。

そうでなければウィルも、領主との決闘を受け入れる訳がない。

剣を振るった軍曹は、一步も足を動かしてはいなかった。

鮮血をまき散らしながら、領主が床に沈む。

致命傷。

こぼれ落ちた領主の大剣を、軍曹が蹴飛ばして相手を無力化する。

『言い残すことは？』

傍らに屈んだウィルが、領主の最期の言葉を引き取るうとした。命の灯火が消えようとしている領主を、軍曹が油断なく見つめている。

「娘を、娘だけは、どうか見逃してやってくれないか」

息も絶え絶えな、最期の懇願。

領主の延ばした手が、ウィルの胸ぐらを掴んだ。

『お願いだ。幼いあの娘には、何の責任もない。希望ある子供の将来を、大人だけの事情で閉ざさないでやってくれ』

ウィルは微笑むと、領主の手に優しく自らの手を重ねた。

『分かりました。約束しましょう。貴方は、尊敬に値する私の敵でした』

『ありがとう』

ウィルが軍曹に目配せする。

無言で頷いた軍曹の剣が領主の首を斬り飛ばし、彼を苦痛から永遠に救済した。

「少佐、本当に娘は見逃すのですか？」

領主の首を丁寧に取りながら軍曹が尋ねる。

ウィルは平然とした様子で答えてみせた。

「まさか。助命したところで、私に感謝しながらどこか田舎で平和に過ごしてくれるとでも？ それはない。逆に父の敵を討つべしと抵抗勢力の旗印に担がれるリスクを考えるべきだ。ならば私が指示するのは、たった二つ。見つける。そして殺せ」

「は！」

直立した軍曹が、ウィルの指示に敬礼して応える。

領主に対して付いた嘘に、ウィルは全く心を痛めていなかった。契約や約束は必ず守るという信条は、死人相手ならいくら曲げても構わない。

死にゆく相手に真実を伝えて苦しめたところで、ウィルにとってメリットはないだろうとの判断だった。

「夜が、明けますな」

「吹雪も止んだか。これからが本番だ。軍曹、もう少しだけ付き合ってもらうぞ。限界はとつくに越えているだろうが、倒れるのはまだ待ってくれ」

「は。全ては少佐の意のままに」

戦況は既に掃討戦へと移っている。
組織的な抵抗は最早ない。

今後は地下に潜った残存勢力との、長期的な非対称戦になるだろう。

気の長い話だ。

ゲリラ化した敵との戦いは、何年も掛けながら地道に行うしかない。

民衆の人心さえ得てしまえば、そうした勢力も徐々に足場を失って雲散霧消するはずだ。

「さあ、儲けさせてもらおうか」

まずは目先の消火活動が最優先だ。

次に他家の連隊が、略奪行為をエスカレートさせないように牽制しておく必要がある。

城西都市ローアンは既に女王陛下の都市であり、市民は女王陛下の民だった。

無為な損失は避けなければならない。

戦争という最大の投資フェーズは完了した。

次には戦後処理という大仕事が待っている。

投資に対する利益回収は、さらにその先の話だった。

第3話 - 02 メイド紹介2

小鳥の囀りに、青年コリンは重い瞼をつつすらと開いた。
見えるのは、木板。

コリンが寝ていたのは二段ベッドの下だから、木板はそのまま上段の寝床になっていた。

もちろんスプリングは仕込まれておらず、羽毛入りマットなど望める訳もない。

木板に毛布を敷いただけの、質素極まりない寝床だった。

竜騎士法術を使用すると、その日は深い泥に沈むような昏睡に陥ってしまう。

何とか二度寝の誘惑を振り払い、コリンは枕元に置いておいた懐中時計を手に取った。

「ああああーッ、やつちまったー！ー！」

飛び起きた勢いで、天井の木板に頭を強く打ち付ける。

ベッドの中、コリンは涙目で頭を抱えた。

二段ベッドの下段。

この狭いスペースだけが、ヘイウッド邸でコリンに許された唯一のプライベート空間だった。

時計の針は九時を大きく回っている。

確か本来の起床時間は朝の五時前だったはず。

使用人生活の初日から、完全な寝坊だった。

当然、ルームメイトのシャルロは部屋に居ない。

「置いていかれちゃったかな。起こしてくれたら良かったのに」

おそらく疲れていたコリンに、気を遣ってくれたのだろう。ベッドを抜け出すとコリンは、室内に置かれた洗面台の前に立った。

張られたお湯には、まだ温もりが残っている。

シャルロが用意してくれたものらしい。

身だしなみのために鏡を覗くと、栗色の髪をした若者が眠そうな顔で立っていた。

コリン・イングラム。

スリス公爵家の次々期当主だ。

昨日までの身分は、作戦局特務四課の三等事務官。

エリート貴族の跡取り息子に用意された地位としては、悪くない肩書きのはずだった。

それが昨夜からは、いきなりフットマン兼務という訳がわからない肩書きがもう一つ増えている。

貴族階級から、労働者階級へ。

全ては上官であるフレデリカ先輩の思い付きだった。

愚痴ったところで、何も始まらない。

昨夜のうちに気持ちの切り替えは済んでいるつもりだ。

コリンは手早く身の周りを整えると、制服である黒のテールコートを着込んだ。

まずはシャルロ達と合流しなければいけない。

何処にいるんだろう？ と疑問符を頭に浮かべながら、コリンはバックヤードの階段を駆け下りた。

コリンとシャルロの寝室は屋根裏、つまり三階だ。

使用人ホールがあるのは地下一階。

階段を下りる途中の一階に、ヘイウッド邸のキッチンが配置されていた。

カントリーハウスの設計としては、珍しい部類に入る。

使用人区画であるキッチンは通常、御主人様達の生活エリアとは離れた別棟に配置するのがセオリーだからだ。

ところがヘイウッド邸では、住人の生活に関わる施設が、まとめて東棟に集約されていた。

キッチンを遠ざけるより、温かい食事を生活スペースに素早く提供することを優先したのだろう。

大寝坊の結果、コリンは朝食準備の時間に間に合わなかった。

台所を覗いても、キッチンメイド達が調理をしている様子はない。片付け始めているところを見ると、既に朝食は運ばれてしまった後のようなのだ。

「はあー、初日から失敗したなあ。これからどうしよう？ シャルロちゃんのを場所を聞きたいんだけど、みんな忙しそうだ。この屋敷で知ってる人って、シャルロちゃん以外にはメイド長とランドリーメイドぐらいしか居ないんだよね。んー、誰に聞こうかな？」

きよろきよろとキッチンを見渡すコリン。

ふと、裏口に屈む小さな背中が目についた。

シャルロと似たような年頃の女の子で、見たところ十歳ぐらいだろうか。

シャルロ達の制服が黒を基調にしているのと違って、少女のメイド服は水色だ。

ふわふわした髪に、カチューシャではなくメイドキャップを被っている。

「あの娘は確か」

そうつと覗き込んでみると、猫たちに残飯をやっているらしい。裏口には、色とりどりの毛色をした十匹以上の猫が集まっていた。食欲旺盛な猫たちの様子を、幸せそうに見つめる少女。その小さな肩に、ぽんとコリンは軽く手を置いた。

「やあ、ちよつといいかな？」

「はわあーーーーーッ」

びっくりした少女が、跳び上がって悲鳴を上げた。猫たちが蜘蛛の子を散らすように逃げ去ってしまう。残っているのは黒猫一匹だけだ。

「あああああ！ ごめんなさい、ごめんなさい！ サボってた訳じゃないんです許して下さい！」

可愛そうになるほど怯えてしまった少女が、扉の影に隠れてぷるぷると震える。

コリンは内心で苦笑を浮かべてしまう。怖がらせないように出来る限りの猫なで声を出すと、優しく少女に話し掛けた。

「君さ、昨日の夜にシャルロちゃんの寝室に遊びに来た娘だよね？ エリカちゃんだっけ？」

「ひいっ！ 何でわたしの名前を知ってるの？ ストーカーさんっ？」

「いや、シャルロちゃんに聞いたんだけどさ。俺はコリン。これからよろしくね」

コリンが手を差し伸べると、少女はおずおずとその指先を握り返してくれた。

しかしそれも一瞬で、ぱっと直ぐに手を離してしまう。
かなり人見知りをする女の子らしい。

「あの！ その！ とにかくごめんなさい！」

パニックになった様子で、落ち着きなく少女が頭を下げる。
そしてそのまま、キッチン中央に据えられた作業台へと逃げてしまった。

いや、正確には逃げたのではなく、コリンを案内してくれたつもりらしい。

「おや、エリカ。猫の世話は終わったのかい？」

エリカがしがみついたのは、三白眼をした職人肌な女性だった。
エリカと同じメイド服を来ているので、キッチン部門のメイドだということとはひと目で分かる。

その堂々とした立ち振る舞いから、彼女こそがキッチンの主だと判断出来た。

「あ、どうも。俺はコリンって言います。昨日のディナーを作ってくれたのも君かい？ あれはとても美味しかったよ、ありがとう」

「あんたが噂の、使用人ごっこをしたがっているという貴族の坊ちゃんかい？ 何でわざわざ、そんなことするのやら。金持ちの考え

ることは良く分らんね」

齒に衣着せずにズケズケと物を言う女性だ。

そのことに自覚はあるのだろうか。

付け加えるように、「悪いね」と女性がコリンに謝る。

「あたいはスージーと違ってさ、接客には慣れてないんだ。口が悪くても、悪気はないから勘弁しておくれよ。そうそう、あたいも自己紹介しなくちゃね。キッチンメイド筆頭のメリッサだ。コックが不在だからさ、今はあたいがキッチン部門を取り仕切ってる。よろしくな」

メリッサと名乗ったキッチンメイドは立ち上がると、そのまま自分の座っていた木製の椅子を空けて、コリンをやや強引に座らせた。

「え？ いや、俺はシャルロちゃんの居場所を聞きたいだけなんだけど」

「シャルロなら、今は給仕の工作中さ。それよりあたいは、あんたが来たら旨い朝食を食わせてやることになってるんだ。まずはあたいの仕事を先にさせてくれよ」

狼狽えるコリンにも、メリッサは有無を言わせない。

キッチンの作業台という実用性だけが追求された殺風景なテーブルに、ずらりと朝食のコースが並べられた。

予め準備してあったのだろう。

ほとんど待たされることもなかった。

小腹が空いていたこともあり、コリンはメリッサに勧められるままナイフとフォークを手取る。

オレンジジュース、薄切りのトースト、カリカリのベーコン、付け合わせの焼きトマトとビーンズ、ぷるぷるの白身と、とろり濃厚な黄身の目玉焼き。

典型的な帝国式の朝食メニューだ。

おいしい。

おいすぎる。

あつと言つ間に平らげてしまった。

目を丸くしたのは、給仕をしてくれたエリカだ。

「ひい！　すごい食べっぷり！　その飢えた狼みたいな勢いで、わたし達も食べられちゃうんだ！」

「いいねえ、いいねえ！　あんた見込みあるよ！　そこまで旨そうに食ってくれると、作つた甲斐もあつたつてもんだ！」

メリッサが豪快に笑つ。

ばんばんと上機嫌にコリンの背を叩くので、危うく食後のミルクティーを吹いてしまうところだった。

エリカが食器類を下げて、洗い場へ運んでいく。

洗い物はスカラリーメイドの仕事。

それは分かっていたが、せめて自分で食べた片付けぐらいは手伝おうと腰を浮かしたコリンを、メリッサが引き止めた。

「こらこら、自分の仕事を間違えるんじゃないよ。あんたは、客人付きのフットマンつてことになってるんだろ？　なら、あんたにしか出来ない仕事がある」

コリンの対面に、どかりと腰を下ろしたメリッサが鉛筆を握つた。表情は真剣そのものだ。

「フレデリカとかいう客人の、好きなもの、嫌いなもの、食事の量と腹の減るタイミング、根こそぎあたしに教えな」

「は？」

「は？ じゃないよ。何かあるだろ？ 帝国料理より王国料理の方が好きだとか、辛いのは平気だけど甘いのはダメだとか、人参とピーマンは絶対にNGだとか」

メリッサの要求は至極ごもつともだ。

しかしコリンは返答に窮してしまった。

言われてみると、フレデリカ先輩が好き嫌いしている場面など見たこともない。

何しろ蛇や蛙も捕まえて、そのまま食べてしまうようなサバイバル精神旺盛なお人だ。

「とりあえず出されたものは何でも食べると思っけど？ 少なくとも嫌いなものはないはずだ」

「何だいそりゃ、張り合いないね」

メリッサが顔をしかめる。

料理人にとっては「何でもいいよ」

とオーダーされるほど、困ることもないだろう。

「あは。コリン様、おはようなのデスよ」

耳に心地良い軽やかな声。

振り向くと、台車を押しながらシャルロがキッチンに帰ってきた

ところだった。

三つ編みにした銀髪に、蒼い瞳、ピンクに色付く白い肌。

驚くべき美少女風をしたこのお子様メイドが、実は男の子だと言
うのだから世の中間違っている。

一緒に戻ってきたメイド長がコリンを一瞥すると、腰に拳を当て
てメリッサに状況報告を求めた。

「メリッサ、ちゃんとコリン様に食事させたんでしょうね？ 失礼
な事とかしてない？」

「他の事ならともかく、飯を食わせることに関しちゃ、あたいの方
が専門だ。心配される筋合いはないね」

「まさかこのキッチンで食事させたの？ せめて応接間でも使えば
良かったのに。全くあんたは気が回らないわね」

「は？ うるさいな。別にどこで食わせようが、飯の味は変わらない
いだろ？ むしろ出来立ての方が、美味いってもんだ」

メイド長のスージーが、キッチン部門の長であるメリッサと睨み
合う。

スージーはすらりと長身の女性で、ロングヘアをワンサイドアッ
プにまとめていた。

どうやらこの二人、あまり仲は宜しくない様子。

家事部門と料理部門の対立という構図は、カントリーハウスの伝
統だ。

ヘイウッド邸でもその辺りは変わらないらしい。

「本当はお二人とも、とっても仲良しなのデスよ。ただ、お互い仕

事に真面目すぎちゃって、たまに議論がエスカレートするだけなデス」

「そ、そうなのっ？ 今にもメリツサが、包丁を持ち出してきそう
で恐いんだけど！」

「あは。これぐらいはお二人にとって、朝の挨拶みたいなものデス。
それにほら、包丁を振り回されたぐらいで、スージーお姉ちゃんに
は傷ひとつつけられないデスよ」

どんな挨拶だよ。

と、突っ込みたい気持ちでいっぱいのコリンだったが、周りのキ
ッチンメイドやハウスメイド達も、慣れた様子で上司二人の言い争
いをスルーして、各自の仕事に戻っている。

どうやらヘイウッド邸においては、本当に日常風景の一部らしい。

「コリン様からも、この料理バカに何か言ってやって下さい！」

「おいあんた、朝飯は美味かっただろうっ？ あたいの飯に、何か
文句あったかい？」

「いやいや、俺に振られても！」

とりあえずここは、巻き込まれる前に退散した方が良さそうだ。
飛んできた包丁が、コリンの鼻先を掠める。

柱に突き刺さった包丁が、びいびいびいんと未だに震えていた。
コリンの顔色が青ざめる。

「このままここに居るのは、少しだけ危ないのデスよ。場所を変え
るのデス」

「賛成」

スージーとメリッサの乱闘は、しばらく収まりそうにない。

台所用品を武器のように扱うメリッサもどうかと思うが、それに素手で対抗しているスージーも常軌を逸していた。

関わり合いにならない方が、身のためだろう。

シャルロに先導される形で、コリンはこそそとキッチンから退散した。

第3話 - 03 メイド紹介3

メイドと聞くと、どんな仕事をイメージするだろうか。

料理。接客。洗濯。

もちろんそれらも大切な仕事だ。

しかしコリンとしては、掃除の印象が一番強い。

コリンの実家にも多くのメイド達が居たが、彼女たちのおかげで屋敷はいつも片付いて清潔さを保たれていた。

コリンに与えられた、使用人としての初任務はフレデリカ先輩の部屋の掃除だった。

先輩は騎士団本部へ出掛けてしまったので、今は留守にしている。

シャルロから渡されたメイドボックスを覗き込む。

雑多な道具が詰め込まれていた。

ブラシはともかく、黒鉛や石灰石、金剛砂、紅茶の出洩らしなどは何に使うのか全く分からない。

「紅茶の葉は床掃除する時に撒いておくと、埃を集めてくれて楽なのデスよ。消臭効果もあるから、一石二鳥なのデス。石や砂は磨き掃除に使うのデスけど、素材によって道具が違ってからちよっと扱いが難しいのデスよ。これから少しずつお教えするデスね」

先生役はシャルロだ。

随分と可愛い先生だった。

フレデリカ先輩に割り当てられた客室を見渡してみる。

何から何まで、コリン達の寝室とは別世界だ。

ふかふかの絨毯に、うるさくない程度に上品な装飾の施された壁

と天井。

ソファや調度品が並び、巨大な天蓋付きベッドが強烈な存在感を示している。

眺めているだけで、掃除が大変そうでうんざりしてしまう。

「いやっふー！」

天蓋付きベッドに、小さなメイドが飛び込んだ。
ばふんつとマットに跳ねる。

「リリちゃん、ちゃんと働いてなのデスよ」

「いーの、いーの。どうせ早く終わらせたくところで、他フロアの掃除を手伝わされるだけなんだから」

リリと呼ばれた少女が、気の抜けた声で応じた。

ツーサイドアップの髪型がトレードマークの、最年少ハウスメイド。
ド。

シャルロやエリカと同じ年頃で、メイド長の実妹でもあった。

リリはベッドに俯せに寝転がると、部屋に用意されていたファッション誌を手取る。

駄目だ。

この子は戦力ならない。

シャルロも諦めたらしく、リリのことはスルーしてコリンに掃除の説明を続ける。

「とにかく一番大変なのは、磨き掃除なのデス。暖炉掃除がないだけ、これからの季節は楽デスけど」

「例え寒くなつたとしても、先輩には暖炉を使つなつて言つておくよ」

掃除する側になってみると、暖炉どころかランプでさえ使用禁止にしたいところだ。

コリンがシャルロの見様見真似で掃除をしていると、退屈を持て余したのかリリが声を掛けてきた。

「ねーねー、コリン兄ちゃんつてさ、貴族様なんでしょ？ どれくらい偉いの？ シェリーちゃんより上だつたりする？」

「そいつはまた直球な質問だね」

コリンが苦笑してしまう。

しかし、駆け引きのない純粋な興味に基づく質問に応えるのは、不思議と悪い気はしなかった。

貴族と一口に言つても、その内訳は様々だ。

人数的に大半を占めているのは下級貴族。

彼らは勲位持ちの騎士達で、世襲ではないため狭義では貴族に含まないこともある。

地方領主である諸侯に仕える身分だ。

シェリーのヘイウッド家は、フローマス伯爵位を所有する上級貴族となる。

つまり、当地を治めている領主様だ。

女王陛下に仕える身分であり、封臣会議に議席を持っている。

シェリーの家は伯爵位だが、コリンとフレデリカ先輩は四大公爵家の出身だ。

そのためコリンと先輩は、家格ならシェリー達より上ということ

になる。

さらにシェリーとフレデリカ先輩は、各家の嫡流ではない。
つまり、スリス公爵家の次々期当主であるコリンが、身分的には
最も高いことになっていた。

「え〜？ でもコリン兄ちゃんって、あんまり偉そうじゃないよ
？ 一緒に来たフレデリカさんの方が、貴族っぽいよね」

「ですよ〜！ 俺もそう思うよ！」

さらに説明を付け加えれば、コリンのイングラム家は家柄の古さ
ぐらいしか取り柄がない。

その点、シェリーのヘイウッド家は近年急速に力を付けてきた新
興勢力の筆頭格だ。

ぶっちゃけ財力だけなら、イングラム家はヘイウッド家に太刀打
ち出来ない。

「ふーん、貧乏なんだ。それは残念。色々とおねだりしようと思っ
てたのに」

「リリちゃん、失礼なのデスよ！」

慌てたシャルロを、コリンは笑って止めた。

「はは、いいって。俺としてもリリちゃんぐらい、気さくに接して
もらえた方が助かるよ」

「そつなのデスか？ コリン様、不快にならないデス？」

「むしろ逆だよ。変に気を遣われると疲れちゃうね。シャルロちゃんもさ、コリン様なんて他人行儀な呼び方は止めてくれていいんだよ?」

「はあ、そうデスカ」

シャルロが小首を傾げて考え事をする。

そして上目遣いにコリンを見上げると、もじもじとした仕種で口を開いた。

「コリンお兄ちゃん」

「ぐはーーーーーッッ」

悶絶するコリン。

殺人的な可愛さだ。

あまりの破壊力に心臓が止まるかと思った。

これで男の子だなんて、何もかもがおかしすぎる。

胸元を押さえながら、コリンが息も絶え絶えにリクエストする。

「も、もう一回、呼んでくれてもいいかな?」

「コリンお兄ちゃん?」

「たまたまーーーーんっ、使用人生活最高ーーーーッッ」

「コリン・イングラム様。貴方は何をいらっしゃるのですか?」

「うわあっ?」

絶対零度の声色に、幸せの絶頂にいたコリンの喜びが凍り付いた。恐る恐る振り返る。

部屋の扉には、メイド長のスージーが立っていた。リリが神速の反射神経でベッドから跳び降り、ブラシを手にとり、ていかにも掃除をしているようなポーズを取る。

サボリのプロの動きだった。

スージーに冷たい目で睨まれて、コリンが視線を漂わせる。

「いや、違うんだ、これは」

何が違うのかなんて、コリンにだって分かりはしない。シャルロにお兄ちゃんと呼ばれた時とは、逆方面の意味で心臓がどきどきする。

狼狽えるコリンに、スージーは呆れたように嘆息した。

「そんなに怯えないで下さい。ひとつ用事を伝えに來ただけです」

「ど、どどど、どんなご用件でございましょうか？」

「もう少ししたら、フレデリカ様の日用品を買い出しに行こうかと思ひまして。出来ればコリン様にも、同行をお願いします」

要件だけを伝えと、スージーはさっさと部屋から出て行ってしまった。

ほーっと緊張していた室内の空気が緩む。

「リリちゃんのお姉ちゃんとは仲良くなりたいたんだけど、随分と嫌われちゃったよなあ。嫌われるようなことは、していないつもりなんだけど」

「いやだって、コリン兄ちゃんが存在そのものが嫌われる原因だし」

「まじでっ？」

「あ、誤解しないでね。コリン兄ちゃんの人格というより、上級貴族っていう身分が問題なだけだから」

リリが説明するには、スージーは過去の出来事が原因で、上級貴族にプライベートにまで踏み込まれるのを極端に嫌っているらしい。仕事上で接するだけなら問題ないそうだが、コリンの場合は使用人の世界へ土足で踏み込んでいる。

「姉ちゃんとしても多分、どう接していいのか分からなくて、戸惑ってるだけだと思うよ」

「過去のトラウマって、何があったの？」

「とある男爵様がね、何をトチ狂ったのか姉ちゃんに夢中になっちゃって。かなりしつこく求愛してた。ほら、姉ちゃんは見ただけなら美人だからさ」

「そんなにしつこかったの？」

「変態ストーカーの域に達してたわね！。最終的には姉ちゃんがキレちゃって、半殺しにされてたけど。おかげで姉ちゃん、一時はこのお屋敷をクビになるところだったんだから。そうそう、コリン兄ちゃん、その男爵様に雰囲気似てる」

「失敬な！ 俺は紳士だよっ？ そんな変態貴族と一緒にしないで

ほしいね!」

どこにでも高慢で空気の読めない貴族というのは居るものだ。彼らは平民を、虫ケラ以下としか思っていない。

それも悪意がある訳ではなく、素でそう思い込んでいるのだから達が悪い。

コリンの周りにも、そうした鼻持ちならない連中は大勢居た。

貴族がメイドに手を出しても、何故か被害者であるはずのメイドが罰を受ける。

残念ながらそれが帝国社会の現実だ。

ただ、貴族嫌いの市民というパターンは珍しくもない。むしろ多数派だ。

コリンが使用人になった目的の一つは、そんな市民感覚を共有することにある。

メイド長のスージーに受け入れてもらうこと。

コリンは使用人生活における最初のミッションとして、昨日からそんなお題目を掲げていた。

昨夜は色々と失敗してしまったようだが、これから巻き返せばいい。

「あは。それは素晴らしい目標なのデスよ! でもコリンお兄ちゃんなら、すぐに仲良くなれちゃうと思うのデス」

「そーかなー? 姉ちゃんの貴族アレルギー、意外と根は深いわよ? うーん、コリン兄ちゃんが死ななきやいいけど」

「ええッ? 俺、死ぬのっ?」

リリが語るスージーの無双伝説は、幾ら何でも大袈裟すぎだった。

脚色されたフィクションだと信じたい。

これまでに垣間見せたスージの体捌きから、彼女が武術を嗜んでいることは間違いないだろう。

それでも正規の軍事訓練を受けているコリンからしたら、所詮は素人の趣味レベルのはずだった。

第3話 - 04 魔女の零1

貴族扱いしないで、使用人仲間として受け入れてほしい。

コリンの要望を、スージーは快く承諾してくれた。

そんなスージーが午後の買い物のために手配してくれたのは、二頭立ての四輪箱馬車。

雨にも強い全天候型で、乗り心地も悪くない。

向かい合って配置された四人掛けの席に、コリンとシャルロ、スージーの三人が乗り込む。

ちなみに御者の席は露天だ。

ヘイウッド邸の敷地から中心街までは、馬車で小一時間ほどの距離があった。

徒歩ではキツイ。

聞いてみたところ、シャルロ達も街に出るときはやはり馬車を使うという。

決して特別扱いではないという説明に、コリンも安堵した。

「そんな訳ないじゃん。同じ馬車でもあたし達だけの場合は、乗合馬車なんだから。これだから常識知らずの貴族様は困るわ」

車窓に頬杖を付いたスージーの囁きは、シャルロと話していたコリンの耳には届かなかった。

ヘイウッド邸の位置する郊外の丘から、北街区、南街区へと大通りを南下する。

道路は広く整備も行き届いていて、とても快適だ。

道路に藁の敷かれていた閑静な高級住宅街を抜けると、車窓の景

色が一変してくる。

四階建て以上の、見上げるような石造り建築。

何れもゴシック調の装飾が施され、上品で洗練された都市景観を演出していた。

交通量や人通りも増えてきて、賑やかさでは帝都の繁華街にも負けないだろう。

「この辺りが港湾都市フローマスの中心街です。貿易会社等のオフィスが集中している区画で、大通り沿いの一階には多くのテナントショップが軒を連ねています。高級ホテルや娯楽施設も揃っていますから、ご要望あれば改めて案内させていただきます」

東街区の混沌としていた賑やかさとは、方向性が真逆だ。

同じ都市とは思えない。

都市計画に沿って建築された街並みは整然としており、美しかった。

道行く人々の身なりも立派で、皆が中産階級以上の身分だと想像が付く。

彼らは道なりに連なるガラス張りの高級商店街で、ウィンドウショッピングを楽しんでいた。

「さあ、着きました。まずは軽く、昼食にしましょうか」

コリン達を乗せた馬車が、ある建物の前に横付けされた。

店の前で待っていたらしい黒服の店員が、コリン達に向けて深々とお辞儀をする。

店員のエスコートされて、入店するコリン。

しかしスーゾーとシャルロは、店の入り口から微動だにしないかった。

「あれ？ 二人ともどうしたの？」

「ご心配なく。あたしとシャルロちゃんは、馬車でお待ちしていますから。あたし達のことは気にしないで、どうぞごゆっくりお過ごし下さい」

「あは。このメインストリートは高級店ばかりデスけど、裏通りなら店員さん向けのお店もあるデス。わたし達はそっちでお昼を済ませるのデスよ」

「御者さんも居るから、テイクアウト出来るのがいいわよね。この近くには確か、フィッシュ&チップスのおいしいお店があったかしら。シャルロちゃん、それでいい？」

「はい！ じゃあ、わたしが買ってくるのデスよ！」

「え？ あれ？ じゃあ俺もそっちで」

慌てて回れ右をしようとしたコリンを、黒服の店員が遮った。

「お客様はどうぞこちらへ。先にお食事でも宜しいでしょうか？」

物腰こそ丁寧だが、有無を言わせない圧力がある。

きつと彼らも仕事なのだろう。

ここで席にも着かず入室を拒否すれば、困るのは店員であることぐらいコリンにも理解出来た。

後ろ髪を引かれる思いで、一人きりで店の奥へと誘われる。

思った通り、店は会員制のクラブだった。

読み物や談笑するスペースを提供するのがメインの施設だが、も

ちろん食事もある。

高級レストラン顔負けの料理は、確かに素晴らしかった。

しかし、使用人の制服を着たままのコリンは、店内ではどうしても目立ってしまう。

「新顔だな。誰の紹介だ？」

「伯爵家の馬車が停まっていたぞ。しかしどうして使用人風情が、客人扱いされているんだ？」

「大貴族のバトラーなら、それなりの待遇も受けるだろう。屋敷の決済権を持っているなら、ビジネスチャンスになるかもしれない。名刺ぐらい渡しておくか？」

居心地の悪さが半端ない。

動物園で見せ物になっている気分だ。

好奇の視線に晒されながら、大慌てでで前菜、肉料理、デザート掻き込む。

料理人には悪いが、味を堪能する余裕などなかった。

食後のコーヒーと葉巻は遠慮して、店員に多めのチップを握らせると、コリンは逃げるようにして店から飛び出した。

「あら？ お早いですね。もう少しゆっくりしてくれた方が、あたし達も休めるんですけど」

スーージー達はまだ、馬車の前で食事中だった。

フィッシュ&チップスを食べながら、カフェオレを飲んでる。

何故だろう。

チップなはずなのに、コリンの食べた高級ランチより美味しそうに見える。

「あ、わたしカップを返してくるデスね」

シャルロが三人分のカップを持って、裏路地へ走っていく。

高級店で働く店員にも食事は必要だ。

そんな労働者階級の人間をターゲットに、屋台でも出ているのだろつ。

「俺もカフェオレ買ってこようかな」

「正気ですか？」

驚いたのはスージーだ。

コリンの思い付きに、怪訝そうな顔をする。

「コリン様は銅貨とかお持ちになってます？ 屋台では小切手や金貨は使えませんよ？」

「知ってるよ！ チップ用に小銭ぐらいは持ち歩いているよー！」

「その場でお金を払うんですよ？ 後精算じゃありませんからね？ 食い逃げとか止めて下さいよ？」

「俺、そこまで子供扱いッ？」

全く持って心外だった。

スージーが心配したような事柄は、コリンにとって既に学習済みの内容だ。

学生時代ならともかく、今のコリンは普通に買い食い出来るぐらいの社会常識は持ち合わせてる。

ちなみに世間に出て直ぐの頃は、お金を払うという行為が理解出来ていなかった。

フレデリカ先輩には随分と呆れられたものだ。

上級貴族にとって支払いとは、使用人が知らないところで勝手にやってくれるもの。

決して当時のコリンが、人並み外れて常識知らずだった訳ではない。

「さて、それでは買い物を済ませてしましましょうか」

一服も済んだ後、最初に向かったのは婦人用小物店だ。

目的はフレデリカ先輩の、替えの下着を買うこと。

スージーに続いて、コリンも堂々と店に入る。

お店の入り口で躊躇したのはシャル口だった。

「どうしたの？」

「いえ。こーいうお店って、男の子が入るには敷居が高くないデスか？ 何というか、その、とっても恥ずかしいのデスよ」

「そうかな？ 気にし過ぎじゃない？」

「さすがコリンお兄ちゃん！ 男らしいのデスよ！」

尊敬の念が込められた眼差しを向けられて、コリンは照れ臭そうに苦笑した。

帽子や傘といった小物が中心だが、下着類から軽装まで幅広いラインナップが並んでいる。

シャル口と店内の陳列を物色していると、奥で店員と話していた

スージーがこちらに呼び掛けてきた。

「コリン様、フレデリカ様のサイズを確認してもらえます？ 一応、目算で選んではみたんですけど」

「どれどれ」

スージーが店員に持ってこさせた候補を眺める。

さすがはヘイウッド家のメイド長。

フレデリカ先輩本人に聞くこともなく、選ばれたサイズは丁度ぴったりだった。

ただし、どれもデザインが微妙だ。

フリルやレース、リボンに彩られたドロワーズ系は、確かに可愛い
が合理的ではない。

先輩の趣向には合わないだろう。

「もうちょっと機能的なのはない？ 下着だけで泳ぐような状況下でも、身体の動きを阻害しないデザインが理想的だ。場合によっては、男ものでもいいからさ」

女性店員に次から次に商品を持ってこさせながら、テキパキと下着を選んでいく。

明らかに手慣れていた。

伊達に長いこと、先輩のパシリをしていない。

「コリンお兄ちゃん、格好いいのデスよ！ 仕事出来る男って感じなのデス！」

「いやいやいや。女性の下着を選ぶのが得意な男子ってどうなの？

そんなにパンツ好きなの？ 主食がパンツなの？」

持ち上げてくれるシャル口とは対照的に、スージーの方はドン引きだ。

げんなりとした顔で、一步引いてコリンの仕事ぶりを見ている。

「あつらー！ 貴方が噂のシャル口ちゃんね！ 話しに聞いていた以上にとっても可愛いじゃない！ うちに来てくれてとっても嬉しいわ！」

スージー達が来客したことに気付いたのだらう。

上階から直々に姿を現した女店主は、仕事もそっち除けでシャル口の容姿に食いついてきた。

「いや、わたしは男の子……」

「胸はぺったんこだしお尻も小さいけど、悲観することはないわ！ それはそれで需要あるから！ うちには子供服も扱ってるの！ そうね、こっちの新作なんてぴったりじゃないかしら！」

「はわわわっ、この方、テンションがベッキーさんと同類なのですよ！ わたしは着せ替え人形じゃないのデス。助けて、スージーお姉ちゃん！」

目を回しながら助けを求めるシャル口。

しかし、求める先が間違っていた。

スージーはにっこり笑顔を浮かべると、女店主に挨拶する。

「こんにちは、おば様。事前連絡もしないで、急に押し掛けちゃってごめんなさい」

「いいのよ、スージーさん。遠慮しないで、いつでもいらっしやうて。それより、うちのベッキーはちゃんと働いてる？ たまにはあの娘も、うちの店に顔を出すように伝えておいてちょうだい」

「ベッキーさんのお母様デスカー……っ」

ベッキーというのは、ハイウッド家に仕えるランドリーメイドだ。言われてみれば、どこか雰囲気似ている。

この親にして、あの子ありと言ったところだろう。

「シャルロちゃんのサイズなら、こっちのワンピースなんてどうかしら！ 似合うわよー！」

「素敵です、おば様。あ、そのスカート丈の短さなら、こっちのハイソックスを合わせるともって魅力的ね。くうっ、絶対領域萌えるわー！」

「そんな高そうな服、買えないし、着ないし、だから試着もしないのデスよっ」

「心配しないでシャルロちゃん。お代についてはシェリー嬢様が、特別枠で予算を確保しているから！」

「その予算って、明らかにわたし自身のお給金より高そうデスよっ？」

シェリー嬢の気持ちはコリンにも良く分かった。

自分の好きな衣装を着てくれるなら、コリンとしても服代ぐらいは喜んで支払うだろう。

「あら、何の騒ぎ？」

「まあ、可愛い！ お人形さんみたい！」

「なにになに、どうかしたの？」

騒動に気付いた他の女性客達が、次々とシャルロの周りに集まってくる。

そして皆が皆、シャルロの姿を見て黄色い歓声を上げた。
すっかり大人気だ。

「次はこっち！ こっちの服を着せてあげてっ！」

「このリボンなんて似合うんじゃないっ？」

「いやーん、可愛いーっ。お持ち帰りしたーいっっ。どこのメイドさん？」

「ダメよっ。シャルロちゃんは、あたしのメイドだからっ！」

婦女子達によって興奮の坩堝と化した店内で、シャルロがもみくちゃにされる。

シャルロが今度はコリンに救援を求めてくるが、残念ながら力になっ
てあげられそうにはなかった。

爽やか笑顔でコリンが応える。

「シャルロちゃん、ごめん。いくら俺でもそこに飛び込む勇氣はな
い！」

「コリンお兄ちゃん、薄情者なのデスーーーっ」

すっかりお人形扱いのシャルロが泣き叫ぶ。

盛り上がりも最高潮に達しよとしていたその時、全く空気を読まない場違いな怒声が店内に響いた。

「あんでだよっ、見るぐらいいいじゃねえか！」

「お客様、困りますっ」

水を打ったように静まり返る店内。

何事かと、店員や客達の視線が入り口に集中する。立っていたのは、見窄らしい格好をした中年男性。

目は黄色く淀み、肌と髪は荒れ放題だ。

着古された衣装はボロく汚れ、離れていてもひどく臭う。

どれだけ鼻屑目に見ても、この高級婦人小物店には似つかわしくない招かれざる客だった。

入店拒否されるのも当然だろう。

「あら？ コリン様の変態仲間ですか？ パンツ愛好会の会員さん？」

「知らない人だよ！ パンツ愛好会って何？ 新品パンツなんてただの布じゃん！ パンツは女の子に穿いてもらって、初めて価値が出るんだよ！」

スージーの問い掛けに、コリンが全力で否定する。

とにかく中年男性の様子はただ事ではなかった。

赤い顔で足取りは頼りなく、さっきから意味不明な言葉を喚き散

らしている。

「酔っ払いね」

「こんな真っ昼間から、すっかり出来上がっちゃってるみたいだ。羨ましい」

「飲み過ぎは身体に良くないのデスよ」

南街区は小綺麗なショップが並ぶオフィス区域だけではない。もう少し南へ下ると、大海原が広がる港湾施設が見えてくる。そこには日雇い労働者の人々が、大勢働いていた。彼らが高級商店街にやってくることはまずなかったが、それでもたまには空気を読まずに迷い込んでくる者が現れる。

「嫌だわ、騎士団を呼んだ方がいいんじゃない？」

「場を弁えてほしいものよね」

「早く出ていってくれないかしら」

ひそひそと眉を顰めて、小声を交わす女性客達。

中産階級の彼女達にとって、薄汚れた港湾労働者など軽蔑の対象ではない。

その様子が、さらに中年男性を怒らせた。

「ちくしょうツ、馬鹿にしゃがって！ 金ならあるんだ！ 黙ってパンツを出しやがれ！」

激昂した男が、懷から肉厚のナイフを抜き放つ。

途端にそれまで余裕の態度を見せていた女性客達が、甲高い悲鳴を上げた。

いくら身分が高くても、突き付けられたナイフの前では何の意味もない。

女店主が隣の店員に囁いて、裏口から騎士団を呼んでくるように指示を出す。

「こら、そこ！ 動くんじゃない！」

その動きに目敏く気付いた中年男性が、ナイフを振り回しながら叫き散らした。

間の悪いことに、さっきまで男性の応対をしていた女性店員が、腰を抜かしてその場から動けないでいる。

中年男性は乱暴に店員を引き寄せると、その首元にナイフを突き付けた。

「酔っ払いさんが、強盗さんになっちゃったのデスよ？」

シャルロの声にはどこか緊迫感がない。

一方、スージーの判断と行動は俊敏だった。

「受け身ぐらいはして下さいね？」

「は？」

いきなりスージーの手が伸びて、コリンの襟首を乱暴に掴む。

そして自らの身体を、するりとコリンの下に滑り込ませてきた。

視界が天地逆転する。

スージーに担ぎ投げられたコリンの身体が、逆さまの格好でショーウィンドウに叩き付けられた。

ガシャーンと碎けたガラス片と共に、店の外に投げ飛ばされるコリン。

石畳に身体を打ちながらも、立ち上がろうとしたコリンの肩を何者かが掴んで押さえた。

「危険に晒してしまい、申し訳ありません。すぐ安全なところまで退避を」

現れたのは、フローマス騎士団の女騎士だ。

見覚えはあった。

先日の絵師殺害現場で会っている。

名は確か、メイヴィスと言ったか。

彼女の部下と思われる兵士達が、コリンを暴漢から守るようなフォーメーションで配置に付く。

偶然にしては有り得ない。

どうやら遠巻きからずっと、コリン達を密かに護衛していたようだ。

「少尉。あの酔っ払いどうします？ 排除しますか？」

「そうしたいところですが、今は被警護者の安全確保が最優先です。急ぎこの場を離れますよ」

メイヴィスと兵士の二人がコリンの襟首を掴み、そのまま引き摺って安全圏まで逃れる。

その手を、コリンは乱暴に振り払った。

「ちょっと待てよ！　あの暴漢をそのまま放っておくのかよ！」

「貴方さえ居なければ、市民保護を優先したことでしょう。しかし残念ながら現在は、貴方を守ることが我々の任務。我が儘言わずに、大人しく従って下さい。あまり聞き分けないと、ぶち殺しますよ？」

コリンだけを強制退場させたまま、高級婦人小物店では状況がエスカレートしつつあった。

女性店員を人質に取った中年男性が、理性を完全に失って怒鳴り散らしている。

「馬鹿野郎！　騎士団なんか呼びやがって！　俺はパンツを買いたかっただけなのに！　この店員の命が惜しかったら、どいつもこいつも動くんじゃねえ！」

「やれやれ。我々は最初から居たんですけどね」

呆れた様子で、メイヴィスが嘆息する。

シャル口達を助けるため、すぐ店内に戻るつもりだったコリンも人質が居ては手の出しようがない。

懐の単発式法札に手を伸ばしたコリンに、メイヴィスが釘を刺してきた。

「馬鹿なことは止めるように。人質に当たったら、どうするつもりですか？　既に狙撃班を呼びに行かせています。店のことは気にしないで、貴方は速やかにヘイウッド邸へお帰り下さい」

「狙撃班の到着までに、何分かかるんだッ？　その前に店の奥にでも籠城されたら、手出し出来なくなるぞ！　まだ店の中には、シャル口ちゃんやスージーが残っているんだ！」

「だから？ 貴方という不安要素を排除できた時点で、むしろ店内には何の問題も残っていませんよ」

耳を疑うようなことを、メイヴィスは言い放った。
信じられない。

しかし、コリンが目にした店内の光景は、もっと信じられなかった。

「はいはい、ごめんなさいなのデスよ。慣れない刃物は、とっても危ないのデス」

いつの間にか、中年男性の隣に立つシャルロ。

そしてあっさりと、男性の手に握られていたナイフの刃を摘んで、そのまま抜き取ってしまう。

「え？」

中年男性があんぐりと口を開ける。

シャルロは腕を組めそうな程の至近距離で、にっこり微笑んで男性を見上げた。

「ほんのちよっぴり衝撃あるかもしれないデスけど、痛く感じる前に終わっちゃうので安心して下さいね」

人質になっていた女店員の手を引くシャルロ。
そのまま棒立ちになる男性。

「あたし達が居合わせたことに感謝することね。あんだ、罪を重ねずに済んだわよ」

中年男性の真正面に立ったスージーが、くるりと背を向ける。
一回転して繰り出されたハイキックが、暴漢の脳から意識を刈り取った。

鮮やかな一撃。

力を失った中年男性が膝を着き、そのまま床に崩れ落ちた。

「あんたら、どこの特殊工作員だよっ！」

気を失った男性の代わりに、店内に駆け戻ったコリンが突っ込みを入れる。

きょとんとした顔で、スージーが聞き返した。

「え？　だつてあたし達、メイドだし？　護身術を嗜むぐらい当たり前じゃない？」

「そんな武闘派メイドなんて、聞いたこともないよ！　あと、全然護身じゃなかったよね？　すげー攻撃的だったよね？」

「これでもわたし達、毎朝ちゃんとトレーニングしてるのデスよ。ほら、お屋敷の仕事は室内が多くて、運動不足になりがちデスからだからダイエットも兼ねて、頑張っているのデス」

「ダイエットじゃねーよ！　どれだけ実戦的戦闘術を身に付けてるのっ！　シャルロちゃんの足運びも、素人の領域を超えてたから！」

「あは。照れるのデスよ」

「ほめてねええーーーーーッ」

百聞は一見にしかず。

リリの話していたスージー最強伝説が、一気に真実味を帯びてくる。

スージーの体術が素人レベルだなんて、とんでもない。

度胸、技術、共にプロの軍人に見劣りしない技量だった。

コリンに遅れてやってきたメイヴィスが、スージーに向かって軽く敬礼をしてみせる。

「や、どうも。暴漢制圧のご協力、感謝します」

「メイヴィス様、こんにちは。こちらこそコリン様の面倒を見ていただいて、助かりました」

「任務ですから」

さらりと答えるメイヴィス。

二人は顔見知りらしく、挨拶を返すスージーに緊張した様子はないかった。

コリンに対する護衛の件も、おそらくスージーは知っていたのだろう。

「スージー達が自分の腕に自信があるのは分かったけどさ。でも何で俺、外に投げ飛ばされたの？ これでも俺は特務四課の班員だし、暴漢の制圧ぐらい手伝えたと思うんだけど」

「だって、何かの弾みで怪我でもされたら面倒じゃないですか。そうですね、言葉を選んでご説明させていただきますと、足手まとい？」

「言葉選んでそれかよっ！ 実は俺、学生時代の全国剣技大会で四位！ 結構、強いんだからねっ？」

「その割りには、あっさりと投げられてくれましたね。正直、気持ちよかったです」

「我々の警護にも気付いていませんでしたね。おかげで任務遂行が楽でした。フレデリカ事務官の方を担当した護衛班の方は、あっさり見つかって散々だった様子ですが」

スージーとメイヴィスの反論に、ぐうの音も出ない。

メイヴィスは事件処理のため婦人小物店に残ったが、コリン達の買い物は継続された。

「店内、オールクリア。一般客の撤収完了。緊急時の脱出経路確保。障害は見当たりません」

「近隣の狙撃ポイント、問題なし」

「了解。さ、コリン事務官、どうぞお進み下さい」

一個分隊の護衛付きという物々しい雰囲気。

店側にとつても、いい迷惑だ。

スージーやシャルロに気にした様子はないが、コリンとしては凄く居た堪れなかった。

勘弁してほしいと、コリンは内心で嘆息した。

そんなコリン達の様子を、向かいのビルの屋根から見下ろしている二つの影があった。

「せっかく顕在化したのに。スージーお姉さんのおかげで、やることなくなっちゃった」

<まあ、いいじゃない。ぼくらの出番がないってことは良いことだよ>

「つまんなーいっ！ あたしだって活躍したかった！」

一人はメイド服を着た少女。

一匹は緑の目をした黒猫。

猫が喋っている時点で、ただ事ではない。

<あんまり目立つと、また注意されちゃうにや>

「この間は新聞にも載っちゃったしね。あれは痛快だったなー」

ケット・シー。

聖絶指定種の一種でもある妖精猫だ。

指定種の保護特区を有する港湾都市フローマスにおいても、純血種の存在はかなり珍しい。

教会からは、存在そのものを否定されていた。

そのため一般市民の前に姿を現すことは、可能な限り避ける必要がある。

しかし隣のメイド少女は、いまいちその辺りに無頓着だった。

<特務四課も出張つてきちゃったし、これからはより慎重に事を運ぶ必要があるそうにや。本来なら彼らが出張つてくる前に、例の事件も解決しちゃいたかったところだけど>

「そんなに特務四課って、ヤバいの？」

「もちろんだにゃ。ヒトがぼくらに対抗するための、切り札と言っている。特にあのフレデリカって女の人は、要注意だにゃ>

「ふーん、そうなんだ。じゃあ、あのお兄さんの方は？」

「さあ？ あっちはおまけみたいなもんだし、あまり興味もないにゃ>

スージーからだけではなく、謎のマスコットキャラからも散々な評価のコリンだった。

「それじゃ、また後でねお兄さん。わたしはお皿洗いに戻らなくちゃ」

少女がコリンに一方的に話し掛ける。

もちろんコリンに聞こえるはずもなかった。

それつきりメイド少女と黒猫の姿は、最初から存在していなかったかのように掻き消えてしまう。

法術のモデルとなった魔法を使う彼女らは、人智を超えた能力を有していた。

「コリン様、どうかされたデスか？」

「え？ いや、何か見られてるような気がして」

「あは。それはそうなのデスよ。さっきから騎士団の皆様が見守ってくれているデスから。早くお買い物、済ませちゃうのデス」

メインストリートを歩くコリン達の足下を、するりと野良猫が横切る。

港町であるフロームスでは、路上の猫など珍しくもなかった。

護衛の騎士団を含めて、特に誰も気にする者は居ない。

にゃあ、と野良猫が鳴き声を上げた。

第3話 - 05 魔女の零2

ひと通りの買い物を終えた頃には、日もすっかり傾いていた。

フレデリカ先輩も、一足先に帰ってきているようだ。

調達してきた品々を確認してもらうために、荷物を抱えて先輩の部屋へ赴く。

ドアを開けたコリンは、予想外の先客に少し面食らってしまった。

「先ほどは失礼致しました」

そこに居たのは、街でコリン達を護衛していたメイヴィス少尉だ。高級婦人小物店で別れた後、フレデリカ先輩のところへ来ていたらしい。

丁度用事が済んだところだったらしく、先輩とコリンに敬礼すると、そのまま館を出ていってしまった。

「なかなか楽しい出来事があったみたいだね。ボクも買い出しに付き合えば良かったよ」

メイヴィスから話を聞いたのだろう。

にやにやしながら、フレデリカ先輩は手元の資料を眺めた。

ある程度の近距離であれば、コリンの知覚を一方的に共有してしまおう先輩。

しかし、今日のように離れた場所で別行動していた場合には、そうした芸当も不可能だ。

「メイヴィス殿、俺の護衛の件で報告に来ていたのですか？」

「いや。それもあつたけど、どちらかと言えば主題はこっちだね。」

なかなか興味深い話だよ」

そう言って先輩がテーブルの上に出したのは、小指ほどの大きさをした小さな瓶だった。

コリンがそれを摘む。

中に入っていたのは、赤い液体だ。

「ワインみたいな色ですけど、ちょっと薄いですね。何ですか、これ？」

「通称、魔女の雫。君達を襲った中年男性が所有していたものらしい。法術覚醒剤の一種だよ。説明するより、体験した方が手っ取り早い。ほら、腕を出したまえ」

コリンが訳も分からないまま腕を出すと、フレデリカ先輩が慣れた手付きでその袖を捲り上げる。

そして注射器を取り出すと、小瓶の液体を吸い上げた。

「よつと」

「うおおおおおつ、危ねえええええッ」

寸前で飛び退くコリン。

注射器の針から、ぴゅーっと空しく液体が射出された。

「いきなり何するんですか！」

「いや、注射だけど？」

「中身は何ですか！ 得体の知れないものを、いきなり注入しよう

としないで下さい！」

袖を戻しながら、コリンが絶叫する。

フレデリカ先輩は残念そうな顔を見ると、注射器を容器に閉まった。

「さっきも説明しただろう？ 魔女の雫、だよ。市場では単に、ドロップと呼ばれているようだね。阿片みたいなものだと思うえば、それほど危険じゃない。君の場合は、拒絶反応を観察できるはずだけだね。ま、七転八倒するぐらいで、死にはしないよ」

「駄目じゃん！ いくら死ななくても、七転八倒したくないよ！ それに今更ながら思い出しましたけど、ドロップって確か、副作用が深刻すぎて法規制されてましたよねっ？」

帝国社会は、麻薬に対して寛容だ。

特に阿片は広く普及していて、その辺の薬局で誰もが簡単に購入することが出来る。

主に鎮痛剤として、帝国人には欠かすことの出来ない医薬品だった。

また、輸出も盛んで、たまに海外と軋轢の要因になったりもしている。

そんな阿片大国である帝国においてすら、中毒性が高く、副作用の深刻な薬物は法令で禁止されていた。

中でも代表格と言えるのが、ドロップ。

元々は軍用の開発された代物だ。

「つまりあの中年男性、ただの酔っ払いじゃなくてドラッグ中毒者だったのか」

「これって、東街区のブラックマーケットでたまに見掛けるデスよね。すごく高級品なので、ちょっと前まで労働者階級の人では買えなかったはずなんデスけど」

コリン達の話聞いていたシャルロが、渡された小瓶をしげしげと眺めながら呟いた。

それでも帝都に比べると、フローマスはドロップを入手しやすいらしい。

他都市への転売で一儲けしようとして、検問で見つかって縛り首。そんな小悪人が後を絶たない。

だから無理してフローマスの外へは持ち出さず、街内だけで楽しむのがお勧めだとシャルロは説明してくれた。

「天使のような笑顔で、そんなブラック観光案内されても！」

東街区に出入りしているおかげで、アンダーグランド方面の流行には詳しいシャルロだった。

ドロップの効能は、方向性としては竜騎士法術にとても良く似ている。

使用者は一時的に、高揚感と共に物理的な限界を超えた身体能力を発揮することが出来るという。

ただし、ドロップの常用には致命的な問題も抱えていた。依存性が高い上に、自らを見失いやすくなる。

最悪、作戦行動に支障が出てしまうケースもあった。

デメリットが大きすぎて、軍用としては欠陥品。

そのため竜騎士法術が登場すると、ドロップは戦場から姿を消してしまった。

今では国家規模で生産されることなく、嗜好品として少量が流通しているのみだ。

「だけどそれだと辻褄が合わない？ あの前で来た中年男性、どう見ても金持ちには見えなかったよ」

「んー、最近はドロップの市場価格が、かなり暴落しているみたいデスから。今なら少しだけ無理をすれば、普通の人でも何とか手が届くらしいデスよ？ ダンピングだ、営業妨害だって、密輸業のおじさま達が嘆いていたのデス」

「そんな連中、さっさと商売止めてしまえ！」

シャルロの話によると、ドロップ市場にも厳しいシェア争いがあるという。

シャルロが付き合っている移民街の連中が扱っているのは、王国産の密輸品が中心。

それが最近、安価な国産品に大きくシェアを奪われているらしい。

「フローマス都市内での密造？」

「だろうね。フローマス騎士団もその線で捜査はしているらしい。ところでコリン、ドロップの原材料は知っているよね？」

「魔女の雫という名称の通り、聖絶指定種の血液を精製するんですっけ？」

「お、珍しく正解だよ。そして国産ドロップの流通量が増えだした

時期と、連続騎士殺害事件の開始時期とは、ほぼ一致する。これは偶然だろうか？」

そこまで聞けば、コリンにだって察しは付く。

つまりフレデリカ先輩やメイヴィス少尉は、新たに流通し始めたドロップの製造元に、ローアンの魔女が関わっていると睨んでいるのだ。

帝国軍から指名手配された古血の聖絶指定個体、ローアンの魔女、連続騎士殺害事件の犯人だと目されている彼女を狩ることが、コリン達に与えられた任務だった。

さつきからフレデリカ先輩が上機嫌なはずだ。

コリン達が遭遇した小事件は、魔女追跡の糸口だったらしい。

だからこそメイヴィスも、異端者問題のプロフェッショナルである先輩の知識に期待して、いち早く情報共有しに来たのだろう。

「だけど何で、その魔女さんは危ない橋を渡るのデスか？ ドラッグなんて売り捌けば、そのうち足が付くのは必然的なデスよ」

シャルロが素朴な疑問を口にする。

確かにその通り。

帝国や教会に追われている自覚があるのなら、目立つ行動は避けるべきだ。

人間社会の迫害から、何百年も生き抜いてきた魔女が、その程度のことを理解していないはずがない。

「はは・下僕作りという狙いもあるだろうけど、最大の理由はもっと簡単だよ」

フレデリカ先輩が、ソファに身体を沈める。

そして、すっかり冷めている紅茶に口を付けて、ふうと息を付いた。

何かを悟ったような遠い目だ。

「魔女だろうが、妖精だろうが、異端者だろうが、人間社会で生きていくには金が必要なのさ」

世知辛い結論だった。

第3話 - 06 メイド長3

メイド長のスージーが、少しも心を開いてくれない。

あくまでコリンのことは、客人として扱う方針を貫くつもりだよだ。

いくらこちらが気さくに話し掛けようとしても、丁寧な礼儀作法に弾き返されてしまい、さっぱり人間らしいリアクションを見せてはくれなかった。

「こうなったら、物で釣るか？ プレゼントとか唐突すぎるかな」

「あは。リリちゃんなら大喜びしそうなデス。でも、その作戦は前に例の男爵様がチャレンジして、コテンパンにされちゃったらしいデスよ？」

「うがーッ、俺も変態貴族と発想が同じと言うことかーッ」

頭を抱えて唸るコリン。

確かに地位と財力で、強引にねじ伏せるというのは今回の主旨に反する。

フレデリカ先輩から科せられた宿題は、予想以上に難度が高かった。

こんなことでは、いつまで経ってもメイド達とは打ち解けることが出来ない。

何しろ今のところ、食事でさえコリンは別枠だ。

夕食もハウスキーパーやバトラーと共に、上級使用人の食卓に案内されてしまった。

メニユーは、シェリーやフレデリカ先輩に供される内容と同じ。

確かに美味しかったが、出来ればシャル口達と一緒に食事をしたかった。

「あまり焦りすぎないことなのデス。キッチンメイドのメリッサさんは、コリンお兄ちゃんのお食べっぷりに喜んでいたのデスよ。リリちゃんやレベッカさんも居ますし、少しずつ仲良くなっていければ良いのデス」

「それはそうだけどね」

確かに少しずつではあるが、顔見知りのメイドは増えてきた。使用人ホールなどで会えば、彼女達とは挨拶を交わすぐらいには仲良くなっている気もする。

「逆に初日からいきなり全員と仲良しだったら、そっちの方が不自然なのデスよ？ ゆっくり頑張って下さいなのデス。応援しているのデス！」

「ありがとう、シャル口ちゃん」

本当にシャル口存在には救われる。

コリン的にはシャル口のおかげでかなり癒されていた。

うつかりすると、男の子だという事実をつい忘れてしまいそうだ。

「さて、お疲れのところ申し訳ないのデスけど、お風呂にするのデスよ」

「え？ 使用人なのにお風呂入れるの？ また俺だけ特別扱い？」

またか、と疑心暗鬼になるコリン。

ところがシャルロは笑顔で否定してみせた。

「いえいえ。お風呂はわたし達みたいな使用人でも、みんな入ることが出来るのデス。入れる時間は決まってるから、何人かまとめて入浴することになるデスけどね」

「おおーっ、それはすごい！」

フローマスは港湾都市だ。

ヘイウッド邸には、長い船旅を終えたばかりという客人が多く訪れる。

そして航海中の水は、とてつもなく貴重品だ。
いくら貴族であっても、船中で真水を使い放題とはいかない。

そのためヘイウッド邸には、そんな客人達をもてなすためのサ―ビスとして、大浴場を屋敷内に完備していた。

帝国内にカントリーハウスは数多いが、蒸気風呂まで備えた館は希少だろう。

もちろん船旅帰りの客人専用という訳ではない。

ヘイウッド家の家人は、毎日入浴することが習慣になっていた。
その恩恵は、使用人達にも与えられている。

コリン自身、昨夜は客人として入浴させてもらった。

風呂には一家言を持っているコリンから見ても、なかなか立派な設備だった。

蒸気風呂、冷水浴、温水浴。

さすがに公衆浴場ほど大きくないが、それでも数人が同時に入れるだけの広さはあった。

「コリンお兄ちゃんは、お風呂好きなのデスか？」

「もちろん！ 何しろ俺の実家は、観光都市スリスだよ？」

コリンはスリス公爵家の出身。

そしてスリスは、古代から温泉を中心に栄えてきた都市だ。

普段は腰湯で済ませて、全身浴は週に一度だけ。

それが帝国では一般的な入浴スタイル。

しかしコリンとしては、出来ることなら毎日でも入浴したい。

実際、スリス公爵家は温浴推進派の急先鋒だった。

「はあー、観光都市スリス、憧れてしまうのデスよ。一度は行ってみたいのデス」

「シャルロちゃんならいつでも歓迎さ！ 最高級ホテルを手配してあげよう！ リクエストあれば、どこでも招待状を書いてあげるよ？」

「あは、遠慮しておくのデスよ。自分でお小遣いを貯めて、長いお休みをもらえたら行ってみるのデス」

遠回しに拒否られてしまった。

ちなみにスリスもフローマスと同じく、帝国南部の都市だ。

距離的にもそこまでは遠くない。

いつかはシャルロにも、自分の故郷を見てほしいものだった。

「スリスみたいな天然温泉ではないデスけど、それでも温かいお風呂は気持ちが良いのデス。じゃあ、入浴出来る時間も限られているので、一緒に行くのデスよ」

「は？」

シャルロに自分の分のタオルと着替えを渡されながら、コリンの思考が停止する。

「いえ、使用人の入浴は、入れる時間割が決まっているのデスよ。急がないと、男湯の時間が終わっちゃうのデス」

さすがのヘイウッド邸でも、浴場は一つしかない。

男湯と女湯の切り替えは時間制になる。

そしてヘイウッド邸のインドアスタッフで、男性の下級使用人はコリンとシャルロだけだ。

実際にはミスタの部下達も何人か居るようだが、書類仕事に追われる彼らはコリン達と同じ時間帯に入浴するだけの余裕はない。

男同士なのだから、何ら疚しいことはない。

それなのに、シャルロの一系纏わぬ姿を想像するだけで、何だか背徳的な気分になってしまう。

これは危険だ。

変にどきどきしてきた。

「コリン様、どうかされたデスカ？」

「い、いや！ 何でもないよ！ 毎日お風呂に入れるなんて、本当に素晴らしいよ！ 早く行こう！」

「あの、そこまで楽しみにされると、ちょっと困ってしまうのデスよ？ 昨日のお風呂と同じデスからね？ 期待されても、急に設備が豪華になってたりはしないのデスよ？」

コリンの妙なテンションに、シャルロが及び腰になる。

もちろん昨日のお風呂とは、シチュエーションが全く違う。

昨日は一人湯。

今日はシャルロと一緒に。

盛り上がるなという方が、無理な話だった。

ヘイウッド邸の浴場は、サウナ室と浴室に分かれている。

まずはたつぷりとサウナで汗をかくのが、帝国流の楽しみ方だ。

更衣室まで一緒だったシャルロは、ブラシを忘れたとかで屋根裏部屋まで取りに戻ってしまった。

全裸にタオル一枚だけの姿で、コリンはサウナ室でじっと汗をかきながらシャルロが来るのを待つ。

ぼつりと、鼻尖から滴った汗が落ちた。

男同士、裸のつき合いだ。

サウナから出たら、シャルロの背中を流してあげるのも良いだろう。

シャルロの滑らかな背中ラインを思い出し、コリンは危うくのぼせそうそうになった。

耳を澄ませていたコリンが、更衣室の気配を感じ取る。

戻ってきたシャルロだろうか。

サウナで血行が良くなったせいか、ますます胸の鼓動が高まってきた。

そしてついに、元気いっぱいに開け放たれるサウナ室の扉。小さな裸体が飛び込んでくる。

「やつぶーい！ シャルロちゃん、一緒に入ろーっ」

リリだった。

タオル一枚身につけていない。

文句のつけようもなく全裸。

コリンは紳士だ。

子供らしく健康的な裸体を見たところで、いやらしい気分になど一ミリもならない。

「ぎゃーーーーーッ」

隠すものも隠さず、開けっ広げなポーズのままリリが絶叫した。

「リリちゃん、どうしたの？」

おっとりとした声と共に、胸元までタオルを巻いたエリカが顔を覗かせる。

リリの引き締まった裸とは、また違った身体付き。

白い肌は柔らかそうで、胸はリリよりふんわりと大きい。
将来有望だ。

「やあ」

汗だくでタオル一枚のコリンが、片手を上げて挨拶。
既視感が半端ない。

何だか同じパターンを、昨夜も繰り返した気がする。

いや、昨夜よりも色々な意味で事態は深刻だ。

コリンの笑顔も引きつりまくりだった。

よほどショックだったのだろうか。

ふらっと、エリカは俯せに倒れてしまった。

倒れた拍子にタオルがはだけてしまっているが、それどころではない。

大慌てで駆け寄る。

「エリカちゃーんツ？」

エリカを抱え起こすために屈んだコリンの目の端に、脱衣所から覗く生足のラインがちらりと映った。

「……………おお？」

メイド長のスージーだ。

一応はタオルを巻いているものの、長身すぎるおかげで布の丈が全然足りていない。

太股のつけ根あたりが、見えそうで見えないギリギリのラインだった。

美しすぎるシルエットに、溜息が漏れる。

鍛え上げられた機能美がそこにはあった。

まさに芸術品。

古代職人の刻んだ女神の彫刻を思い起こさせる。

「ねえ、コリン？ 何か言い残したいことはある？」

中腰姿勢のコリンを、スージーが冷え切った瞳で見下してくる。サウナの蒸気ですら凍てつくような、容赦のない冷徹さ。

コリンの背筋が震え上がる。

しかしその凍えた表情は、どこか満たされていた。

「俺、この屋敷に来て良かったよ。ありがとう」

「そう。それは良かったわね」

胸元のタオルを抑えたまま、スージーが片脚をゆっくりと浮かせた。

それ以上に足を動かすと、見える。

見えちゃいます。

脳内で警鈴が鳴り響くが、すっかりコリンは美脚に見入っていた。

「じゃ、とりあえず死んでおきなさい、このド変態貴族がアー――ッ」

スージーの振り抜いた足先が、コリンの顔面にクリーンヒット。

衝撃。

爽快にコリンの身体が素っ飛ぶ。

タオルが解けてスージーの全裸が露わになってしまった瞬間には、コリンの意識は完全に刈り取られていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0882t/>

メイドくんは男の娘！

2011年12月5日09時48分発行